

五郎十七加藤彌平太森島長意松平藤助兄片岡十右衛門伊藤武藏守土肥勝五郎
 新入の浪士は眞田大助幸信十三毛利豊前守勝永其子勘解由萩野道喜入道
氏家内膳正行廣關原後姓名を變せしふり中方將監淺井周子中方平兵衛一説中高みゑ自殺し女房和期
 局伊勢國親族大藏卿局大野治長母饗場局内藤新十郎母右京大夫の局木村重成母秀頼乳母宮内卿局
 玉の局湯川孫右衛門姉も同じく自殺せり二位局は召れて茶臼山にありしかは終
 に助命せらる。

十九日元和元年七月卯刻御所德川秀忠伏見を首途有て關東へ赴かせ給ふ此日江
 州永原に御輿を駐らる中。

四日元和元年八月江戸城に還御なる。

——台徳院殿御實紀

十二月元和元年紀。麿島薩摩國城主島津家久陸奥守北郷長千代丸翁

ヲ江戸証人トス。北郷系圖薩藩舊記增補熊本肥後國城主加藤忠廣肥後守亦証人

ヲ送り薩藩舊記增補唐津肥前國城主寺澤廣高肥後守モ女中ヲ江戸ニ移ス。

本光國師日記

島津家久其他江戸証人 元和元年島津家久江戸証人トシテ重臣北郷氏ノ子
 長千代丸ヲ江戸ニ送り加藤忠廣寺澤廣高亦皆証人ヲ出ス。

島津家久其
 他江戸証人

島津家久其
 他江戸証人

翁久長千代丸山城守 元和元年十二月爲太守公之質赴于駿府翌年四月十日拜謁

大神君献御太刀馬代縞珍十卷同十三日赴于江戸六月十二日拜謁將軍秀忠

公献御太刀馬代拜領御單物五御帷子五御太刀御馬羽織一。同七月賜暇而歸

國。

——北郷系圖大日本史料收

元和元年乙卯十二月長千代丸時六爲太守陸奥守家久公之質發都城赴駿府

翌年丙辰四月十日於駿府拜謁于家康公献上御太刀馬代縞珍十卷長千代丸

七登城時本田上野介正純相迎車寄勞慰之其後清水平左衛門尉懷長千代丸

登殿時加藤肥後守之質五人列座使長千代丸居上座拜尊顏之時家康公曰汝

者陸奥守質之替歟正純對曰是陸奥守重質也曰陸奥守懇情不淺同月十三日

發駿府赴江戸

——薩藩舊記增補大日本史料收

寺志州寺澤廣高も女中を江戸へ引こされしニ付て次郎兵衛供し以て昨十日

元和元年十二月ニ當地を罷とをられし志州ハ當地ニ逗留し大御所様へ御禮申

上ひありら其地へ參上可被申由ニ下署後藤光次宛崇傳書狀案

——本光國師日記

是年元和元年紀。幕府諸藩家老ノ質子ヲ徵ス。蜂須賀家記

市街恢弘時代

七二九

諸藩家老質
 子

諸藩家老質子事蹟

諸藩家老質子

蜂須賀家記○大日本史料所載ニ據レハ、

是年○元和元年幕府徵諸藩家老質子、移置其子弟於江戸邸。

〔參考〕リチャルト・コックス日記○大日本史料所載ニ、

一六一六年一月十四日、○新曆二月十四日ニシテ、元和元年十二月六日ニ當ル。○中畧。江戸より日本の武士數人來り、英商館を訪問し、持合せの商品を見たるが、何も買はざりき。彼等の語る所、依れば、皇帝は日本の國王〔即ちトノ〕を悉く江戸より來らしめ、七年間同所を留め、尙妻をも伴はしめ、各人別々、其家より居住し、皇帝の從者一人を常に之と共に居らしめ、出來事を聞見せしむべき由なり。彼は叛亂を防かん爲め之を爲すあり。而して國王自ら赴くおとを要求し、其子或は親族の代るを許さず。

市街ノ轉移起立シタル者有リ。

○文政町方書上。東京府志料。東京府誌。大久保家記別集。

市街轉移起立事蹟

市街轉移起立ハ、

櫻田町 溜池坂下ヨリ坂上ニ移ル。事文政町方書上ニ見ユ。

麻布櫻田町

一、當町元地起立之儀、治承年中、賴朝公奥州征討之砌、鎮守霞山稻荷神領御

寄附有之、田之畝に神領之印ニ櫻ヲ被爲植、追々繁茂致ル、自然と櫻田と申習ハ由申傳、櫻田霞ヶ關ニ罷在、天正七卯年五百七拾石之村高ニ有、年代不知、權田織部様御代官所ニ有之、慶長七年之頃、右地所御用地ニ被召上、殘地當時櫻田と相唱ル場所、虎之御門外ニ有之、當町之儀、何程高相別ル哉、委細相知不申、寔初溜池之端御替地ニ被下、同所坂之下に引地被仰付、其節伊丹利右衛門様御代官所ニ有、元和元年坂之上に引移住居致居ル。○下畧。

御臺所町

御臺所町 神田臺所町ニ於テ町屋敷ヲ給セラレタル者、府内備考ニ見ユ。

一、拜領町屋敷百坪餘

小普請 北島吉之丞

元和元年雉子橋御門外東御臺所町ニ有、拜領仕ル處、慶安四卯年御用ニ付被召上、同年元天龍寺前○市内牛込區。ニ有、替地拜領仕ル。○納戸町書上。

宮村町其他

宮村町其他 麻布宮村町一本松三軒家町本村町中、西久保天德寺領ト爲ル。是

頃大養寺領ニ歸シタル所モ有リ。府内備考ニ、

宮村町○中畧。

一、町内惣反別壹町五反八畝拾三步

内、九反貳畝拾九步

御代官所

市街恢弘時代

六反九畝廿四步

天德寺領

四反三步

大養寺領(○中畧)

一、西久保天德寺領之儀、元和元年、五拾石御朱印地ニ相渡リ、高内ニ有、正徳三巳年町内一同町御奉行所御支配ニ相成申也。

一、同所大養寺領之儀、御朱印地ニ相渡リ、年代相知不申也。高貳拾八石七斗貳升之内ニ御座也。町御支配ニ右同斷ニ御座候。

一本松町^{○中畧}

一、町内惣反別屋敷壹町貳反七畝壹步

内、貳反壹畝貳拾八步

御代官所分

壹町五畝三步

淨土宗

天德寺領(○中畧)

一、町内西久保天德寺領之儀、元和元年、五拾石御朱印地ニ相渡リ、高内ニ有、正徳三巳年町内一体町御奉行御支配ニ相成申也。

三軒家町^{○中畧}

一、町内惣反別九反三畝拾九步

内

六反八畝拾七步

御代官所分

一反九畝貳拾貳步

西久保

天德寺領

五畝二十步

同

大養寺領(○中畧)

一、町内天德寺領之儀、元和元年、五拾石御朱印地ニ相渡リ、高内ニ有、正徳三巳年町内一圓町御奉行御支配ニ相成申也。

一、同大養寺領之儀、御朱印地ニ相渡リ、年代相知不申也。高内反別之分、右同年、町御奉行所御支配ニ相成申也。

本村町^{○中畧}

一、町内反別

三町九畝拾壹步

御代官所分

但、麻布町惣反別廿六町七反三畝貳步之内。

外、貳反三畝廿九步

天德寺領分

外、八反八畝七步

大養寺領分(○中畧)

一、西之久保天德寺領之儀、元和元年、五拾石御朱印地ニ相渡リ、高内ニ有、正徳三巳年町内一圓町御奉行所御支配ニ相成申也。

市街恢弘時代

葺屋町

一、同大養寺領之儀也、御朱印地ニ相渡ル年代相知不申。高廿八石七斗貳升
貳合六勺高内ニ有、右同年ノ町御奉行所御支配ニ相成申。葺屋町 東京府志料ハ慶長中ノ開創トシ、東京府誌ハ元和元年市肆ヲ開クト
爲ス。孰カ是ナルヲ知ラス。姑ク此ニ收録ス。

葺屋町 此地モ慶長年中ノ開創ナリ。寛永年中ヨリ此地ニ市村座ノ劇場アリ。天保年中猿若町へ移サル。
東京府志料

葺屋町

沿革 元ト池沼ヲ填築セシ所ナリ。元和元年乙卯始テ市肆ヲ開キ、町名ヲ加
フ。當時ハ葺工多ク住セシト云フ。寛永以來劇場市村座アリ。天保十三年壬寅之
ヲ猿若町ニ移ス。元ト暮踏町ト稱セシト云フ。江戸圖解集覽。東京府志料。本町書上。

東京府誌

八官町

八官町 起立年月ヲ明カニセズ、東京府誌傳ヘテ元和ノ頃トス。亦此ニ附記ス。
忠輝卿へ越後國四拾万石ヲ進ラレシニ、十兵衛保長。カ御勝手向御用等ヲ
相勤ケルニ、万事重寶ノ者也トテ、御附人トナリ、元ヨリ忠隣久保。ハ一老職ニ
テ、此家ヨリ出タレバ、人前モヨク、殊ニ神君ノ御取立ニ預リタレバ、痒キ所へ

手ノ届クカ如ク立身也。其頃忠輝卿出頭ノ家老ニ、花井主水江後ニ遠ト云者有。
渠カ父ハ唐人ニテ、八官ト云。日本へ渡リテ主水ヲ設ケラルニ、容貌常人ニ越
ケレバ、神君御小性ニ召出サレ、父八官モ町屋敷ヲ被下。今江戸ノ八官町是也。三九郎ハ美少年ニテ、小鼓
仕舞等ヲ淑ス。故ニ神君ノ御小性ト成、後ニ御稽古ノ爲トテ、忠輝卿へ附サセラル。容儀
ウルハ敷チ以テ、忠輝卿ノ御實母於ハツノ方、後ニ於茶阿、其先遠州金谷ニテ設ケ
玉フ女子ヲ以テ三九郎ニ嫁シ、忠輝卿ノ妹 花井、忠輝卿ノ御附人ト成、其上忠輝
卿ノ御妹聲ト成テ時メキケル主水ニ取入、渠カ取成ヲ以テ、終ニ三萬五千石
ノ大身ト成。○大日本史料云フ、「長安、松平忠輝ノ附人トナルコト、及ビ三萬五千石ヲ領スト云フコトハ、共ニ誤ナリ。」

大久保家記別集○大日本史料收。

八官町 此地ハ元和ノ頃八官ト云阿蘭人ニ給ヒシヨリ町名トス。明治五年
佐兵衛町喜左衛門町ヲ此町へ合併ス。
東京府志料

八官町

沿革 元和ノ頃、宅地ヲ支那人八官ニ給スルヲ以テ此名アリ。新編江戸志。本町書上。○東京府志料、八官ヲ以テ阿蘭陀人トス。 明治二年五月其西隣ナル佐兵衛町喜左衛門町ヲ廢シテ、其
地ヲ本町ニ併ス。本町書上。
東京府誌

寺社起立轉地

寺社ノ起立轉地シタル者若干。

○文政寺社書上。文政町方書上。府内誌殘編。

市街恢弘時代

寺社起立轉地事蹟
櫻田稻荷社

寺社起立轉地 元和元年寺社ノ起立轉地シタル者ヲ舉クレハ、左ノ如シ。

櫻田稻荷社 溜池ニ移ル。

櫻田稻荷社

麻布櫻田町

境内古跡御年貢地三百五十二坪。門前町屋共。

○上 元和の頃溜池に遷座。○下

續府内備考

稻荷社

稻荷社 牛込榎町ニ起立ス。

牛込榎町

兩社 稻荷社

一、社地 除地拾九坪餘。東間口四間。西間口五間。北奥行三間半。

一、祭神 兩社稻荷作不知二體。

一、鎮座勸請の義と、元和の初年、別當南藏院開山正胤法印當所に錫をとゝめし頃勸請す。○下
—— 文政寺社書上

常敬寺

常敬寺 八町堀寺町ニ起立ス。

淺草本願寺末
牛込山伏町

分應山常敬寺

一、古跡拜領地面貳百七拾四坪餘。○中

一、開基明順法師、寛文八戊申歲七月廿八日卒。

成滿寺

成滿寺 亦八町堀ニ創建セラル。

武江牛込山伏町分應山常敬寺ノ開山明順法師ハ、生國三州ニシテ、先祖ハ宇多天皇ノ苗裔敦實親王六代ノ孫美濃守俊輔ノ二男從五位下左衛門佐俊昌、出家シテ俊明ト号ス。顯真僧正ノ弟子トナリテ、後ニ三州家武則昌院ニ住持セリ。天福元年高祖聖人三州柳堂藥師寺ニ御逗留マシマシテ、專修念佛ヲヒロメマシマシ玉フニ、俊明聖人ニ謁シ奉リテ、御弟子トナリ、寺号ヲ淨顯寺ト改テ、淨土真宗ノ道場トナセリ。今三州幡豆郡吉良之莊武家村法城山淨顯寺是ナリ。今此明順ハ、俊明ヨリ九代ノ孫教明ノ五男ナリ。然ルニ兄ヲ超明ト名テ淨顯寺十世ノ住ナリ。早世ニツキテ五男明順姑ク淨顯寺住持タリトイヘトモ、超明新發意盛長ニツキ寺務ヲ相讓リテ、隱居シテ、慶長十五年武州江戸ニ下リ、八町堀邊ニ居住シテ一字建立ノ願ヲ發ストコロニ、三州已來東照宮様御存シノ筋アル故、相歎キ奉リ、元和元年乙卯台徳院様ヨリ免許ヲカフムリ、八町堀寺町ニテ寺跡御免成シ下サレ、スナハチ御本山宣如上人常敬寺ノ号ヲ給フ。初テ八町堀寺町ニテ常敬寺建立セリ。○下
—— 文政寺社書上

淺草本願寺末
赤坂
淨土真宗 不動山无量院成滿寺

市街恢弘時代

澄泉寺

澄泉寺 櫻田邊ニ起立ス。

○上 三代目了賢省齊法橋同寺ニ住職仕ハ頃、元和元乙卯年、江戸八町堀ニ成満寺を起立仕、伏見淨泉寺之兼帶ニ仕ハ。○下
——文政寺社書上

勢州一身田專修寺御門跡末 櫻田
高田派觸頭
淨土真宗 靜龍山清淨樂院澄泉寺

一、拜領地境内惣坪數千三百七拾餘坪。表三拾三間、
奥行四拾八間。
右ニ元和元乙卯年櫻田邊ニ有ル寺地拜領有之ハ處。○下

——文政寺社書上

明福寺

明福寺 櫻田邊ニ起立ス。

京都東六條本願寺末
中根山明福寺

芝三田中寺町

起立之儀ハ、元和元乙卯年櫻田邊ニおゐて一字建立仕ハ。

——續府内備考

上行寺

上行寺 櫻田ヨリ八町堀ニ轉ス。

駿州富士郡西山本門寺末
芝二本樓

日蓮宗 富士山 上行寺

○上 江戸起立之儀ニ、御入國之後拙寺何世ニハ
哉不相分。日春江府ニ罷出、慶長元丙戌

年於櫻田寺地拜領仕、元和元卯年迄拾九年櫻田ニ居住仕ハ。此所御用地ニ付
差上、元和元卯年ハ寛永十二乙亥年迄二十年八町堀ニ住居。○下

——文政寺社書上

正信寺

正信寺 芝増上寺山内ニ起立ス。

増上寺末
麻布龍土六本木
淨土宗 源興山護念院正信寺

一、古跡拜領地惣坪千拾七坪。

内、六拾三坪門前町屋、但北日ヶ久保ニ地所共ニ有之ハ。

一、本堂間口三間半、奥行五間。

一、當寺開山學蓮社當譽順故和尚、生國筑後國柳川稱念寺弟子、起立ハ、元和元
卯年松平陸奥守殿家來下田大膳正當譽順故爲檀越、令開基、其節之寺地ハ、増
上寺山内ニ御座ハ。右下田大膳正當寺檀家ニ無御座子孫之譯、相知不申ハ。開
山學蓮社當譽順故和尚、住職五ヶ年、元和五己未年七月十六日命終ニ御座ハ。

——文政寺社書上

常光寺

常光寺 芝ニ起立ス。

芝増上寺末
武州荏原郡下高輪
淨土宗 元照山晴冷院常光寺

市街恢弘時代

一、惣境内千四百四拾五坪。

内拜領地千貳百八拾坪。持添地百六拾六坪。

拜領地之分表間口參拾間。奥行四拾間。裏間口參拾間。裏々同斷。奥行拾貳間。

門前地表門方四間程。北之脇二ゝ貳間半。裏々同斷。奥行拾貳間。

但、門前地之儀之、往古方寺社御奉行所御支配ニ御座ハ處、延享三寅年二月町御奉行所御支配ニ相成ハ。

持添地之分表間口拾間。奥行參拾間。

一、起立之儀之、元和元乙卯年開山大譽秀應江戸芝ニおゐて芝ト計ニ何ま之地ニ御座ハ哉、書留無。一、寺建立、海徳寺与号シ罷在ハ。〇下

——文政寺社書上

高輪常光寺門前

一、右門前起立之儀之、元和元乙卯年中、常光寺開山大譽秀應芝ニ御寺地拜領仕、承應元辰年御用地ニ相成。〇下

——文政町方書上〇高輪常光寺門前書上。

慈光寺

慈光寺 赤坂一ツ木ニ起立ス。

本願寺末
青山原宿
淨土眞宗 青野山 慈光寺

一、古跡拜領地六百六拾坪。當所上澁谷村ニ有、元地方増坪ニ有拜領被仰付ハ事。

年貢地三百八拾五坪。右同村飛地御領所之分。

右貳ヶ所之引地已來境内之分。

添地四百七坪。原宿村伊賀給地之内。天明五乙巳二月方抱地。但境内續。

惣坪境内千四百五拾貳坪餘。

貳畝拾四步 千駄ヶ谷分、吉祥寺領之内。天明八申年十二月方抱地ニ有所持。

一、起立、元和元乙卯年赤坂一ツ木ニ有寺跡御免被成下ハ。〇下

——文政寺社書上

教學院

教學院 慶長九年寺地ヲ受クト傳フ。開基ノ寂年ニ因ミ、姑ク此ニ附載ス。

山王城琳寺末 竹園山最勝寺教學院

青山

境内拜領地三千二百九十坪。

中興開基玄應元和元乙卯年八月四日寂。

境内之義之、中興玄應代慶長九甲辰年拜領仕候由、記録紛失由緒委敷相知不

市街恢弘時代

申候。

正藏院

正藏院 田安ヨリ牛込ニ轉ス。

武州豐嶋郡牛込横寺町
藥龍山光圓寺
東叡山末天台宗 正 藏 院

一、境内拜領地 表間口貳拾貳間半、裏行四拾間八寸、惣坪數八百六拾坪。

一、開闢起立之儀を、長祿之頃平川ニ律師圓觀と云者有り、一日草苜之男一佛
汝持し來り、此を傳教大師御作之藥師如來なり汝ニ授と言おそりて見む、律
師不思議ニ思、平川よ於て一字此草堂を造り、授與之藥師尊汝安置せり。○中

御當代よ至り、慶長之頃よもこれ有哉御用地よ召上らむ、田安よたゐて代地
下シ置れぬ處、尙又御用地よ召上らむ、當牛込よ於て代地下し置れぬ、右縁起
之通り且古書記之内穿鑿致ぬ處、當地替之義を元和元年ニ相成ぬ。○中

一、門前町家門を東之方、間口四拾間八寸、裏行九間餘、門を西之方、間口四間半、
裏行七間。

右起立之義を書留燒失仕、相分不申ぬ、尤古門前地。——文政寺社書上

昌清寺

昌清寺 湯島ニ起立ス。

京知恩院末續松山弘願院
湯島 昌清寺
淨土宗

一、境内惣計三百五拾坪餘、表間口拾四間四尺、裏行不同、拜領地、境内起立之儀
を、元和元卯年當所の御中間屋鋪割渡之節、右割餘りの寺地被下置、無年貢地
ニ御座ぬ。○中

開基之譯

一、當寺之草創昌清尼の、朝倉氏よして名のきよと云、父の筑後守重高、母の土
井氏、越前國朝倉下野守貞景の玄孫也。父重高若年より武功勝れざるを以、一
万石の上よ一万五千石御加増あて、遠州掛川の城主となして、忠長卿の從
臣とし給ふ。女お清殿を御乳の人よ被仰付、然るよ忠長卿御立身駿府に入せ
られ、從二位權大納言に任し給ふ。忠長卿御勘氣蒙らせ、甲州のうつされ給ふ。
御簾中様ニの御引をられ、關東に御歸府有、北丸殿を稱す。其後忠長卿高崎ニ
於て御生害あらせらるゝ迄も、お清殿ニの始終御まやほへ被申上、父筑後
守殿の配流せられぬ共、女お清とのよを御構もなく、北丸殿の御附よ被仰
付、御下おきよ依て、北丸殿御舍弟織田兵部少輔信昌の妹女よ被居置、織田家
の厄介分ニ被成下、北丸殿御落飾ありて、松孝院殿と号す。一向人よ御逢被成
ぬ事を禁せらる。此時お清殿よも御許し蒙りて、剃髮し、名汝給をりて昌清と

勝林寺

勝林寺 亦湯島ニ起立シタル者タリ。

禪宗臨濟派京都妙心寺末
駒込植苗木繩手

萬年山勝林寺

- 一、古跡拜領地 表口南北三拾八間四尺、奥行東西三拾間、坪數千百六拾坪。
- 一、寄進添地裏通り坪數貳百六拾坪、都合千四百貳拾坪。

いふ。これハ松孝院殿御俗名お昌の御方と申、昌の字ハお清殿の名取とへて昌清も名付被下とり。此尼の造立なるゆへ昌清寺と名付され共、其實ハ松孝院殿の尊慮ヨ出たる御事と聞たり。其ゆへいふといふハ、忠長卿かくせさせ給ひ高崎の大信寺ヨ御送葬あらせらるゝといへとも、御勘氣の御身の上なれば、御廟所とりまづらふ事もあて、御墓印ニ松のひと木を植ゑるのこゝを、御法事とり行ふ事もあて、御あごとひ奉託人もなし。されハ松孝院殿の御心のうちいゝ斗り御をまゐり思召させられん、せめて御菩提の御爲よとて、まゝの御くまとてありなれども、上の御聞へ洩憚らせ給ひて、昌清尼の造立と披露ありなる由之。昌清尼身まゐりて後、忠長卿御側ニ尼の願ひよよりて葬るとなり。上州高崎大信寺過去帳ニ改て昌清院殿心譽妙安大姉、寛永廿未年七月十八日死。〇下

文政寺社書上

啓運寺

啓運寺 下谷一丁目ニ起立ス。

上總國長柄郡鷲巢村長國山鷲山寺末
下谷山下
法要山啓運寺

- 一、當寺ヲ元和元乙卯年於湯島明神前建立、開基中川元故ヨ申醫師、其節土井大炊守様〇利、酒井雅樂守様〇忠、ハ奉願、右坪數之境地拜領仕、始々嵩呼山心宗寺と申〇下。

文政寺社書上

皆應寺

皆應寺 下谷黒鋸町ニ起立ス。

京東本願寺末淺草清水寺借地淨土眞宗
專圓山皆應寺

- 一、境内間口拾間、奥行拾五間、清水寺中借地、文化四丁卯年大久保安藝守殿寺社御役中願濟。
- 一、當寺起立之義ハ、元和元乙卯年釋祐念下谷黒鋸町年貢地表貳拾間裏行拾五間餘之處ニ起立仕候。〇中
- 一、開基 釋祐念明曆二丙申年四
月二十七日寂。

古書付之寫、其文左の通り、

覺

一、淺草寺町西照寺地中皆應寺

右開基は元和元乙卯年起立仕候、當年迄百廿四年罷成申候。〇下

——文政寺社書上

乘滿寺

乘滿寺 駿府ヨリ江戸車坂ニ移ル者、年月詳カナラズ。開基寂年ニ因リ姑ク本條ニ附録ス。

淨土眞宗東本願寺末

乘滿寺

寺

一、拜領地五百五拾七坪半。表通南北貳拾四間壹尺。裏通東西貳拾三間。

一、野條山林松院

一、當寺開山の尾張國古田庄川口城主水谷縫殿頭討死之砌懷妊之嫡男ニ有、出家名を明泉と云。正保丁亥九月六日示寂。

一、當寺起立之儀ハ、東照宮〇徳川家康之御醫師野條林松院受閑義大旦那ニ有、明泉と力を戮せ、攝州東成郡生玉ニ有一字草創し、野條山林松寺と号す。夫より

城州伏見及駿州府中ニ移轉ハ、又江戸車坂ニ移住いたし、右移住之年月日

惣有相知れ不申ハ、然るニ明曆之末東叡山火除ニ付被召上替地として當所ニ移轉ニ相成申。尤其頃新地古跡御改ニ有、林松寺義ハ、新地ニ付、乘滿寺と寺号相改り、林松をもて院号ニ相唱へ申ハ、己ニ寶物之裏書にて、慶長五より十九年迄之内ニ有、林松寺と相たるし有之ハ、右開基受閑義ハ、元和元年乙卯七月二十一日寂す。但開山開基送葬之地ハ、相知を不申ハ。〇下

——文政寺社書上

東本願寺末野條山林松院乘滿寺

淺草 不囉小名

境内拜領地五百五拾七坪半。

東照宮之御醫師野條林松院受閑儀、大旦那ニ有、明泉と力を戮せ、攝州東成郡生玉ニ有一字を草創し、〇中城州伏見、及駿州府中ニ移轉ハ、又江戸車坂ニ移住いたし、右移住之年月惣有相知不申ハ。
——續府内備考

養泉寺

養泉寺 谷中ニ在リ。開山ノ寂年ニ因ミ、此ニ附記ス。

日蓮宗豆州玉澤妙法寺末

長清山養泉寺

一、古跡拜領六百坪。間口貳拾間。裏行三拾間。

一、東叡山御年貢地貳畝貳拾三步。

市街恢弘時代

一、開山養泉院日要、元和元年乙卯五月死、開山俗生相知不申也。

一、建立并引地等之儀、相知不申也。
——文政寺社書上

伊豆國玉澤妙法寺末
長清山養泉寺

谷中 不詳小名。

境内古跡拜領地六百坪。東叡山年貢地八拾三坪。

當寺建立引地等之儀、相知不申也。
——續府内備考

松林寺

松林寺 續府内備考ニ據レバ、

淺草寺門徒
醫王山明王院松林寺

北本所北番場町

境内除地二百八拾九坪。外御年貢地二拾五坪。

起立開山之儀、相知不申也。○下畧。以上

○元和元年の起立といふ。

慈眼寺

慈眼寺 深川六間堀ニ起立ス。

常州水戸久昌寺末 本所猿江 法華宗
立野山慈眼寺

一、境内千九百三拾六坪。内九百貳拾八坪拜領地。千八坪御年貢地。

但シ、御年貢地千八坪之内、四百坪卯塔場、六百八坪讓請地。尤讓請之義、寛政四子年八月柳川太郎右衛門所持之地所讓請申也。

一、拙寺起立以來深川六間堀ニ有之。元祿六酉年御用地ニ相成、當地ニ引地ニ被仰付。

一、開闢起立之義、開山了現院日盛義、日蓮大菩薩之木像一體師資相承ニ所持致、元地場所半庵ヲ結、右像を安置致、一寺造立之志願有之。所追々老年ニ有右像ヲ弟子慈眼院日遼ニ譲リ、ニ付、則日遼師之志を繼、元和元卯年四月一寺致建立、師之日盛ヲ開山ト仰、自分二世ト相成、父の法号本立院立野日淳之号ヲ以立野山ト仕、自分之院号ヲ寺号ニ相唱、立野山慈眼寺ト号ス。

——文政寺社書上

慈眼寺 猿江ニアリ。立野山ト号ス。常陸國水戸久昌寺末ナリ。開山ヲ日盛ト云フ。某年六間堀ニ草庵ヲ結ヒ、師資相承セシ、日蓮ノ像ヲ安置シ、一寺創建ノ宿願アリシカ、晩年ニ及ヒシカハ其像ヲ徒弟日遼ニ授與セシニ、日遼日盛カ志ヲ繼キ、元和元年一寺ヲ創建シ、日盛ヲ開山トシ、日遼ハ二世ニ居リ、其父狩野某ヲ開基ト崇稱ス。其頃ハ、甲斐國身延久遠寺ニ屬セリ。日盛ハ同五年三月廿七日寂シ、狩野某ハ某年三月朔日死シ、法名ヲ立野日淳ト云フ。日遼ハ慶安元年三月二十九日寂ス。開基檀那ト稱スル者四氏アリ。是ハ日遼ニ歸依シ、當

寺創建ノ時助カセシ輩ニテ、一ハ生田某ト稱シ、元和元年五月七日死去シ、法名ヲ日法ト云フ。一ハ石渡新左衛門ト稱シ、慶安二年九月八日死シ、法名ヲ日悟ト云フ。一ハ平井善節ト稱シ、寛文六年正月十一日死シ、法名ヲ日妙ト云フ。一ハ上田助右衛門ト稱シ、延寶七年四月十二日死シ、法名日隨ト云フ。後元祿六年六間堀ノ寺地御用地ニ上リ、今ノ地ニ移轉シ、同十三年久遠寺末ヲ離レ、今ノ本寺ニ屬セリ。中興開山ヲ日定ト云フ。十六世ナリ。天明二年六月十七日寂ス。又中興開基三人アリ。共ニ商賈ト云フ。本尊ハ首題ニシテ、左右ニ釋迦多寶ヲ安シ、又日蓮作ノ大黒及佛像數軀ヲ置ケリ。境内千九百三拾六坪内九百二拾八坪ハ拜領地ニシテ、千八坪ハ年貢地ナリ。

鎮守社 本尊摩利支天ニシテ、鬼子母神ヲ合祀ス、又日蓮ノ像ヲ置キ、中老日實ノ作ト云フ。

稻荷社

支院 本壽院今廢ス。

府内誌殘編

白山社造立

二年丙辰元和〇紀元二七六年

十一月、白山社ヲ小石川市

内

ニ造立ス。

續府内備考。江戸

名所記。玉露叢。江府神社。畧記。東京通志。

白山社造立

白山社造立

文政寺社書上ハ、白山社初メ本郷元町ノ地ニ在リ、元和二年丙辰二月小石川白山御殿ノ地ニ移ストシ、江戸名所記及玉露叢ハ、慶長廿年即チ元和元年加賀ヨリ之ヲ白山御殿ノ地ニ勸請スト爲スコト、左記ノ如シ。今孰カ是ナルヲ知ラズ。

白山權現社

小石川

天曆二年九月加賀國一宮石川郡白山神社を奉勸請靈社あり。始鎮座の舊地の、本郷元町あり。今に渡り祭禮之節と、御旅所ニ相成申し。古來之舊記の度々之類燒よて燒失仕は得共、畧縁起有之。左之通。

當御社白山大權現の、祭神伊弉册尊、事解男神、速玉男神、菊理姬命也。人皇六十二代村上天皇天曆二年戊申九月加賀國一宮石川郡白山神社を奉勸請靈社也。始鎮座の舊地の、今本郷元町と呼是之。然し建武四年丑正月足利尊氏公より國家安平に御祈願所と命せられ、永百貫文之御判物を給りぬるよ、應仁年中北條家度々の兵亂社頭燒亡し、既よ絶なんとを。せきよ天正十九年辛卯十一月御鷹野御成の日、當社御鎮座の傳記聞召されて御神拜ほらせられぬり。元和二年丙辰二月今小石川白山御殿と稱する所よ奉移、其後明曆元年乙未

三月右社地御殿み相成其御殿地元白山社地なれるか故よ白山御殿と稱し給へり。其日今の社地を多ほそて、則御宮御造營御社領御朱印成下され、御鎮守御祈願所よ命せられてより、御神威彌ふとし、抑御祭禮の九月廿一日祀り、隔年御渡祭の日、本郷元町竹町よ御旅所を奉飾御神幸の行衰絶えせざるの、當社の舊地なるの故あり。今小石川と呼の縁の、始加州石川郡より奉勸請當社鎮座の舊地よ倣へるの故に、小石川と呼。祭日の毎月十一日廿一日也。當社地主神八幡宮の、人皇七十代後冷泉帝永承六年四月奥州安部の一統王威を掠む、是よ據て征伐勅宣を蒙り、伊豫守源頼義御嫡男八幡太郎義家兩大將軍の、官軍を率て發向し、はふ。當所の其時の奥州街道なり。然るよ敵將より此邊に兵汝伏駒を込、數千の薪を集め燒亡さんと計りぬ。兩將聞玉ひき、當社前の櫻木よ御旗を立、八幡宮汝奉勸請御祈誓ありて後、一戦よ敵を討捕給ひし時、御勸請の八幡宮よて、其靈驗奇瑞ある事いまよいちあるし。此邊に武者かくし穴今よあり。所謂當社櫻木旗櫻といひ傳ふるの故の、八幡太郎義家御旗を立給ふよよつての名也。年久しなれども古木のもをより若葉を生し、かゝるなふ花の眞の旗の形なるの名花也。又駒込といふるの駒を込ふるよよ

り、千駄木と云へるの薪千駄集めたるよ對しての名とも言傳ふる。

——續府内備考

白山権現の加賀國の靈神あり。此地よ勸請せし事、元和元年の事なり。本の社の地よ、名水の瀧有、いつの頃よや右典厩公伴の寺を替て御下やしきと云給ひしよ、瀧水をつき山のまへよ落さしめ給ふよ、更よ一滴の水もおつる事なく絶えてたり。人皆いそく権現の威光よ依て落たしを、権現を給てぬ故よ瀧の水絶たりといふ、いとおろなる衰あり、云らるの今の社地よ瀧あるへし、今の地よ瀧のあきいある故そや。凡水脈の地の中よ通るること時よ云とかひて替る事古來世の常よあり、さのよあやしむたらむ。

——江戸名所記

慶長廿年加賀白山大権現を武州へ勸請す。名水の瀧ありしが、此所館林宰相綱吉卿の拜領ありて、かの瀧を庭前の築山の泉水に落し入んとありしが、俄に水乾きて一滴も出ず、誠に神妙といひつべし。其社の小石川にうつし、今の白山あり。

——玉露叢

伴部重垣翁曰、白山ノ神ハ伊弉諾尊菊媛神泉守道者也。是ヲ白山三所ト号ス。

谷重遠曰、白山三所、中鎮。按當社モ伊弉册尊ヲ祭レルヨシ社家者ノ雜談也、神社初ハ元白山御殿ノ地ニ鎮座在シカ、御殿御築ノ時今ノ所ニ遷座ナシ奉。蓋此所ヲ小石河ト号スル事ハ、此神ヲ加州石川郡ヨリ勸請ナスニ因之。則當所ノ鎮守也ト謂リ。始ハ小祠ナリシカ、公儀ヨリ御造替有テ、神領寄附ナシ給フヨリ、神殿年ニ清麗ナリシニ、享保三年ノ冬火災ニ依テ神社類焼セシコソ悲ケレ。則當所ニ遷座以後七十年程ニ及ヘルヨシ。社家者ノ説也。然ラハ舊白山ノ地ヨリ此所へ鎮座ハ慶安二年ノ頃カ。名所記等ニハ後水尾天皇御宇元和元年加州白山ヲ此所ニ移ト記セリ。然トモ此神舊白山ノ地ニ鎮座ハ、其原始久シキ事ト見エテ、神木ニ船ツナギ松トテ無類ノ大木有シ事ハ、遠都人モ聞傳ヘシトカヤ。此處へ御社ヲ移時、其木ノ根ハカリヲ掘出シテ今ノ處ニ植、後ニ榊ヲ植ソヘ、枯木近キ頃迄社前ニ存セリ。是等ノ事ニ因テ考レハ、元和以前ニ當國ニ鎮座ナル事決セリ。當社モ數度ノ火災ニ依テ今形ハカリノ假殿也。

江府神社畧記

白山神社

小石川區小石川白山前町ニアリ。域内貳千八拾貳坪、伊弉册尊、菊理姬命事

解男命、速玉男命ヲ祀ル。社傳云、天曆二年戊申九月加賀石川郡白山神ヲ分祀シテ、本郷元町之地ニ創建シ、後兵燹ニ罹リ衰廢ス。元和二年丙辰二月小石川今植物園之地。ニ移シ、○下畧。

東京通志

増上寺家康廟營造

四月○元和二年紀元二二七六年。德川家康ノ靈廟ヲ増上寺ニ營造ス。安國殿是也。是ヨリ先家康○德川是月○元和二年紀元二二七六年。十七日丁巳○丁巳、三正綜覽。ヲ以テ駿府城○駿河國。ニ薨ジ、即夜○元和二年紀元二二七六年。四月十七日、○二柩ヲ久能山○駿河國。ニ移シ、十九日己未○元和二年紀元二二七六年。○己未、三正綜覽。神儀ヲ以テ之ヲ葬ル。是ニ至テ此舉有リ。○台徳院殿御實紀。柳營日記。上杉年譜。君臣言行錄。安國殿記。開運錄。三緣山志。

増上寺家康廟營造事蹟

増上寺家康廟營造 元和二年四月十七日前將軍家康○德川駿府城ニ薨シ、十九日之ヲ久能山ニ葬ル。

十七日○元和二年四月。巳刻○國師日記、舜舊記による。大御所○德川駿城の正殿に薨し給ふ。台壽七十五。御遺命により、夜中尊骸を久能山にうつしたてまつる。本多上野介正純、松平右衛門大夫正綱、板倉内膳正重昌、秋元但馬守泰朝四人、靈柩に供奉し、御所御名代として土井大炊頭利勝、宰相義直○德川の名代成瀬隼人正正成、宰相頼宣○德川御名代安藤帶刀直次、少將頼房朝臣○德川名代中山備前守信

市街恢弘時代

吉のみ、御跡より供奉す。其他は山に登る事を禁せらる。金地院崇傳大僧正天海、神龍院梵舜は、こと更に供奉して事をとる。町奉行彦坂九兵衛光正、黒柳壽學、大工中井大和守正次、先達て山にのほり、仮殿を經營す。是夜微雨そゞぐ。國師

日記。家忠、日舜、舊記。

十八日、今度御廟地神儀を以て營造せらるゝにより、神龍院梵舜その事をとる。こゝに於て本多上野介正純、土井大炊頭利勝、成瀬隼人正正成、安藤帶刀直次、松平右衛門大夫正綱、板倉内膳正重昌、秋元但馬守泰朝等會議し、夜中兆域をいそぎ經營す。舜舊記。

十九日、仮殿經營成る。其制は、仮殿三間四方、鳥居、井垣、燈爐二を置、左右に緋幕を張、緋布を以て筵道とし、仮殿より廿五間か間、緋布廿二帖、筵道十端を用ゆ。今日の御行装は、旌旗一對、土方小十郎某、一柳治左衛門某、次に戟は大久保新八郎康村、矛は土屋八左衛門某、次は持弓五張、植村與三右衛門某、次は鐵炮五挺、柳川木工某。此輩皆素襖を着す。次に御鏡、久貝忠左衛門正俊、次に御劔、本多甲斐守政朝、次に御馬三疋、次に素襖士五人、次に同朋二人。その装束を着す。次に酒井左衛門尉家次、本多出羽守正勝、次に吉田左兵衛佐兼治、幸徳井三位某。

次に綱頭阿部作十郎重次、次に布衣侍二人、次に松平紀伊守家信、松平豊後守某、次に翳一對、次に布衣侍二人、次に御輿、昇夫廿四人、神原大内記照久、酒井阿波守重行二人、左右にあり、次に御香爐、護身劔、次に御所御轅にて従ひ給ふ。青山大藏少輔幸成、土井大炊頭利勝、大澤兵部大輔基宥、島山主計頭某、從ふ。次に松平豊前守勝政、松平忠左衛門勝隆、次に左右に持弓百張、次に鐵炮百挺、次に調度懸、次に鑓二百柄、次に安部彌一郎、信盛、安藤右京進重長、水野遠江守忠直、後押す。諸大夫以上は皆束帶也。御遷座の時、燈明悉く消し、惣て喧騒を禁じ、御先に散米、次に御鏡、次に御幣は大内記照久是をもち、鈴は梵舜是をならす。次に靈柩、烏帽子上下の士供奉す。次に弓、次に矢、次に楯、次に鉾なり。御遷座の式終りて御内陣に入奉らんとて、先御鏡を梵舜取て散米し、太麻をとりて、祓ひして御内陣に納め、次に神供一膳、後菜六膳、つぎに三十六味、ことゞく精饌なり。つきに机を杓子にたて、神供を備ふる事、照久是を勤む。次に三種の加持、三種太祓百二十座、梵舜つかふまつり、太祝の言を高くよむ。謹白。元和二年卯月十九日亥時撰定。天吉日良辰乎、太政大臣從一位源朝臣公乃御形像乎、駿州有度郡久能乃奉葬高嶺仁、備御神供後菜乎、此狀平安介久鎮坐、且天下靜謐彌

繁昌長久乃基乎守利坐與恐美恐美毛奉申辭別互申佐久自然參集中仁不心不淨乃者在止毛御廣幾御心惠乎以天守護幸給倍止恐美恐美毛申つぎに二拜つぎに拍手つぎに退下つぎに奉幣兩段再拜これみな梵舜儀注を治定し、照久に傳授せし所なりとぞつぎに諸老臣參拜す舜舊記。御鎮座記。廿二日御所○徳川秀忠久能山神廟へうち詣給ふ義直頼宣兩卿頼房朝臣もまたがはる御所御哀戚の御さま見るもの感泣せざるはあし御本社いそぎ構造つかふまつるへき旨を中井大和守正次に面命せらる御本社は大明神造り千木堅魚木を備ふべし次に拜殿次に巫女屋次に神供所次に舞殿次に御厩次にあぜぐら次に神籬次に樓門を建べし新に柚木を曳べしとて柚入の事を命せらるこの構造成功するまで衆人參拜を禁すべしとて山下に番所を設け是を警衛すべしと命ぜらる

この月○元和二年四月江戸増上寺にも靈廟を造營せられ僧徒法諡を奉りて安國院殿徳蓮社崇譽道和大居士と稱し奉る

四日○元和元年五月江戸にては増上寺にて七々日の御法會行はるよて諸老臣ならびに金地院崇傳等參拜す

十七日○元和元年五月増上寺にて今日より晦日まで御法會あり神にいははせたまふにより御法事はうちくの事なれば諸大名より香資献する事も禁ぜられ武藏一國の諸寺はこの法會に會集諷經する事をゆるさる京都の寺院は諷經に參る事をとめらる御所○徳川秀忠御詣あり終日千人施行あり一人に米一升づゝ下さる國師日記。舜舊記。

——台徳院殿御實紀

〔參考〕 細川家記ニ、

一、四月十七日○元和二年家康公薨御御年七十五右ニ付忠興君○細川御參府○無御座○

家康公御遺骸駿州久能山野山に久御葬送御法号安國院殿徳蓮社宗譽道和大居士淨土宗天台宗ニある榮雙院殿と申奉り○元和三年二月廿一日東照大權現と神号之宣旨有同年四月八日野州日光山ニ移し祭られ○考ニ御法号之事一書安國院殿惟海圓心大居士と有又双林院樹大雄院など云異本も有之上野増上寺共ニ承○處分り不申唯本文之通御牌銘有之由但公方家薨御の時○先早速假ニ御法号有之勅裁之上被爲定○事御代々其通之由左○へ家康公も假の御院号異本之通ニある

後ニ安國院殿と被改ひ哉との説も有之。又台宗ニあるハ、安國院之事不相分、今以榮雙院と唱ひ由何事ニも神号を用ひ事故御法号ニとか、
とらざる様ニ聞へ申候。

増上寺家康廟建立ハ、

四月二十九日元和二年

一、御代々浄土宗ニ御座ハ間、増上寺ヨも御位牌を被立、御玉屋御建立有、号安國殿。

大相國公一品徳蓮社崇譽道和大居士。

柳營日記

同元和二年四月二十九日、江戸ニ歸城シ玉フ。家康在命ノ時ヨリ浄土宗ニ歸依シ

玉フ、故ニ江城ノ東南ニ三縁山増上寺ニモ御位牌ヲ立ラル。牌名大相國公一品徳蓮社崇譽道和大居士ト号ス。諸大名諸旗本悉ク參詣ス。

上杉年譜

元和二年御他界ノ節、御法号ハ安國院殿一品徳蓮社崇譽道和居士ト申シ奉ル。三年二月廿一日勅使來テ東照大權現ノ社ト神号ヲ賜ヒ、大權現宮トハ、重テ勅アル也。御影ハ神君御壽齡七十歳ノ御像ニシテ、御生涯ノ御髮爪牙マテ

御像ノ腹中ニ收玉フ。御長ケ恰好モ全ク同カラシヲ思召シ、御手ツカラ鏡ヲ以テ御貌ヲ御移シ遊ハサレ、御存生ノ内ハ、常ニ御座ノ間ニ御スエ置キ、仰ニハ、我死後此像ヲ増上寺ニ移シ、本堂ノ眞ウシロニ回廊ヲ掛ヨ、然ラハ増上寺住職、朝募勤行ノ度毎ニ、本堂ノ返リニ我影前ニ來リ拜セヨト、御遺言ニ依テ、御他界後ニ駿府ヨリ御影ヲ増上寺ニ移シ奉リ、遺命ノコトクスト云々。寛永十一年ニ又改テ影殿御建立。大猷公上意ニハ、御影堂當家有ン限り誰カ是ヲ踈ニシ奉ン、大切ノ影像ナレハ、火ノ用心等覺束ナシ、家離レナル丸山ノ麓ニ御徙アラント、御自ラ御見立マシマシテ、新ニ神殿御造立有リ。今ノ安國殿是也。御存生ノ時、常々鷹ヲ御好アリケルトテ、御宮ノ内ニ悉ク鷹ヲ書書セ、御門ニモ鷹ノ模様ヲ彫セ玉ヒテ、即鷹ノ御門ト名付給ケルト也。

君臣言行錄

増上寺境内丸山ニ奉鎮座ハ安國殿御宮之尊像ハ、去ル慶長六年辛丑年正月

元旦御規式畢、被仰出ハ、六十一歳を本卦歸り、前年より御心掛被遊い、と奉察い。、予當年六拾歳本卦歸りと申、可愼之年也、但し、通途

形代之像、汝彫刻可致由被仰出。丸津氏承テ、則細工人相招き、御目通へ召連ハ

處、御束帶之儘こゝ斯之通り彫刻可致之上意ニ付、天眼鏡ニ奉寫、御身體之御肉合御面部御皺之被爲寄こゝ次第御衣紋御地合品々迄、御等身寸分不違奉寫取こゝ節鬢先こゝ是汝可植之上意こゝ御自身ニ御毛ヲ被爲拔、御渡被遊こゝ由夫こゝ不日尊像御成就被爲遊こゝ御前へ差上こゝ處、常々御座所御床ニ御安置被遊、朝暮家康公々々ト被爲呼、其年こゝ兩三年之間、御自身こゝ御側衆同様ニ御心得こゝ起こゝ伏し自由ニ被遊こゝ由、且又御除髮御除爪ノ節、爪髮を御腹内へ被爲納こゝ其後元和二年正月廿一日こゝ御不例ニ付、二月朔日公方様江戸御出立こゝ二日ニ駿府へ御着被遊、四月廿二日迄御滯府、神君様こゝ三月十七日御轉任被爲在、四月二日御遺言被遊こゝ神靈こゝ永く國家を守護する間、沒後身體を久能山へ納め、神こゝ祝ひ申へく、葬禮法事こゝ増上寺ニ御修行可致、位牌こゝ大樹寺ニ可安置、一周忌こゝ至る日光山へ鎮座すべくこゝ也。

四月六日、増上寺住持觀智國師并了こゝ的廓山御目見被仰出、御直ニ被仰聞こゝ、先年彫刻之像を増上寺ニ移可安置、本社之作りこゝ六拾六疊敷ニ可致、其中央ニ居へ、永く國家を守護すへし、神木こゝニ银杏を植へし、異國之朝帝を守る名に便りありこゝ也。同十七日巳刻御他界、十九日亥刻御神躰を久能山へ納め奉

り、廿二日公方様御社參被遊、五月十七日こゝ増上寺ニ御中陰之御法事御修行有之、同晦日御結願ニ付、公方様御參詣、夫こゝ御神號等之儀ニ付、板倉内膳正殿上京被仰付、七月十六日故大相國御事神こゝ崇め申さる、上こゝ院号不可有之由、勅答有之、依是安國殿ト奉稱こゝ、則勅額こゝ安國殿ト申文字こゝ、先年御鳥居ニ奉掛し由、今現こゝ寶藏ニ有之、右尊像こゝ、土井大炊頭殿供奉こゝ御下り之由、増上寺境内ニ御宮地御見分、元和二年十月二日御作事御取掛り、翌年春二月御成就、依之御神前ニ銅燈籠献備有之、其銘こゝ元和三丁巳年二月ト有之、右之通尊像こゝ、御鏡之尊像こゝ云、又こゝ御厄除之尊像こゝ云、又こゝ爪髮之尊像こゝ奉稱、現今御髮先御肉毛四五本宛御腹内、爪髮御神躰御肉合御面部御皺御裝束御衣紋ニ至迄、乍恐御存生之御容儀こゝ異なしト奉存こゝ、尤御遺言之通、御宮作りこゝ六拾六疊敷、且御神木こゝ银杏こゝ、圍り一丈七尺之大木、少も朽無御座こゝ。○中御宮作りこゝ三度迄御改被仰出こゝ儀、最初之御宮こゝ、元和二年十月御造營、則今之開山堂是也、寛永十一年御造營、則今之黒本尊堂是也、三度目之御宮こゝ、寛永十八年御造營、則今之丸山之御宮是也。○下

安國殿記

開運錄

貫主大僧正御別當十一箇院幹事四口別院寺家共四十餘院此外大衆上座四十八僧其外出勤多し。護念經一時千卷を奉讀誦、天長地久國豐民安御家運御榮久の御祈願あり平生常恒も天下泰平の御祈禱怠慢なし。

隆崇院。 良源院。 月界院。 安養院。 源流院。 威徳院。 觀智院。

黑本尊 御長貳尺六寸

略縁起 學譽現譽兩大僧正の自記を抄畧す。

抑當山は鎮座し給へる黑本尊無量壽如來と申は、惠心僧都の御作にて鎮護國家の靈像なり。昔より惠心彫刻の志は從ひ影を横川の水にうつし、そのち機縁は應し跡を參州桑子乃明眼寺に垂給ふ。歳霜既ふり、金泥の光も香煙は黒ませ給へば、世舉て黑本尊とは申奉りぬ。神君様御歸敬の本尊餘の二鉢は箔佛にて、此尊はより黒色は御座せば、常は黒三鉢まじまじけるに本尊を仰られしよし。是より本尊の嘉名ならせたまふ。東照宮様いまだ岡崎の城主にて御座ありし時、三河の國にて一向門徒の中は逆意を企るもの有て一時は蜂起す。その時神君様州郡の騒動を静め給はんため、士卒を催し、かの逆徒御誅伐あらせ給ひし時、ある日明眼寺に高田御旗を立て給

ふ。賊徒の勢は猛として、雌雄を俄は決し難しとぞ。神君様は、そのかみ大高城を御開きのち大樹寺に入御の上、登譽上人の勸誡を信受させられ、再び岡崎へ御入府あらせ給ひし御時より、大樹寺に於て淨土宗の安心をきとめさせられ、彌陀法王の神變加持力を仰りせたまひ、御武運長久の御いのり年久しければ、幸ひ此寺は本尊も逆徒和融の御祈願を籠させたまふは、誠や風草の偃うよとく程なく皆々御麾下に屬し奉りければ、是より愈此本尊に歸依したまひ、頻に彼住持は懇望し給へども、容易は奉らざりしかど、再三の仰よりて、左はは暫の程御逗座の鉢はなし奉らひやと奉りければ、御自筆の御書にて、

惠心の阿彌陀申請の所、御本寺に可被仰届之段、相心得ひ、然と先其内可被預置の旨申入の處、御領掌令祝着ひ、自然餘寺へ可爲寄進も様ニ御内證ひ哉、聊非其儀は、家康持佛堂は爲令安置は、委細雅樂助可申入は、恐々謹言。

三月廿二日 家康在御判

明眼寺

猶又御願満足の御喜とて、寺領石^三寄附し、又運慶の作彌陀三尊の像を彼寺へ給ひければ、住持も難有命を感戴し、終に永祿七子年五月此尊像を捧げ、岡崎城へ入れ奉りぬ。されば神君様御供養の本尊の内にも、誠は此尊像に御祈を淺からぬ御事とぞ。其比武田氏武勇をあらそひ、數ヶ度の合戦に勝利を得る事能はず。時は一ツの奇策を設け、我家の子に器量拔群の小童ありしかば、是は深く秘計を授け、僞て咎あるものゝまねして是を追放す。小童牢人の身となり、遂はたよりを求め御家より召出され、常に御側近く侍りて、其隙を窺といへども、もとより運命天に契ひ給へる名將なれば、中々本望を遂べき方便なし。されども主命を恥しめじと、白虹日を貫くの勢ひも、龍鬚を摩すことならず。神君様ははそれとも知しめさず、常の御寢所は成らせ給ひ、玄ばしまとろませ給へば、不思議や黒本尊御枕の上より立せたまひ、いゝ家康、何とて起居て、持佛堂より來り念佛せざるやと、御聲あらはし呼せ給ふにぞ、其儘御佛間より成らせられ、玄とやかに御念佛し給ふ、件の小童それとは不知、御寢所より忍ひ入、御夜衣の上より二刀まで刺奉る、手こたへのあきよあはてきはけるを、神君様何やらんと御聲をかけさ

せ給ふよぞ、このゐの人々驚き馳集り、やがて小童をからめとり、御前より引居ければ、いか成罪科もも行はせ給ふへきよ、却て御氣色御うるはしく、小童が節を守り死を輕んずるの意を賞與し給ひ、人をして武田の方へ送り返させ給ふよぞ、武田の方までも、神君様乃寛仁大度の御計ひを感じけるとぞ、是より神君様は益此尊像を崇敬し給ひ、遂富天下を持ち、威四海よくは、萬機の御計らひ吐握の御いとほさへあらせられざる御身よも、日課の御念佛の一日も懈らせたまふ事なかりしとかや、誠や運命は宿世善惡の業よりて、盛衰は指掌の間よりあらはるゝ事ながら、また禍を轉じ福となし、重を輕きようつすも、佛神の擁護にあらまといふ事なし。わけて無量壽如來は、超世大悲の法王にて渡らせたまへば、かりそめにも信仰の志あらん人争り感應をからんや、天正十五年駿府より本尊をむかへ給ひ、いよ、御崇敬あり、慶長五年關ヶ原御陣の御時、御當山存應上人を御城より召させられ、十念を受させ給ふ。是先規の御嘉例とぞ。御先祖代々岡崎の御城より、大樹寺住持の御十念を受させ給ひ、若事急成時は、大樹寺に向ひた。されば天下泰平、御子孫繁榮乃御祈願とて、松より十八公の嘉名あれば、佛の十八本願よりぞらへ、關東

十八檀林の御建立も此故よぞ仰出されける。九月朔日御出馬あらせられし時、御當山よ成らせ給ひ、御門出の御祝儀とて、天上天下唯我獨尊の法門をぞ仰付られける。是や矛を横へ詩を賦し、陳よ對して琴を彈せしも、敢て況ぶべきかは、神君様は江戸御城を台徳院様よ御譲らせたまひ、駿府城よ御座を移させ給ひしも、此本尊を御隨身おし給ひ、常よ御供養あらせ給へり。就中元和の始、大坂御陣の時、本尊を奉持し給ひ、國師の上、了の廓山の兩僧よ、同じく本尊の供奉を仰付らる。此時駿府御城よ於て、廓山召れ、出家黒衣の身なりさいへとも、陣中供奉よりて、うすの御劔を御手つから給へり。是を帶し、御陣中よ、されば茶臼山の侍座し奉り、御陣中より送りし書札とも、今當山寶庫よ納む。かくて一日兩僧を御前よめされ、暫く御法話の折から、陣前の軍既よはしまりて、兵共入亂れ、兩陣勝負の注進、敷並のことくなるよ、不思議や御方の御陣より、黒糸威の鎧着たる法師武者一人、敵陣よ駈入り、右應左接、千開万閉、獅子奮迅の勢ひををし、神異不測の働いた、人とは見へ申さすと、言上り、神君様聞召、それは眞田伊豆入道からせやと仰ありしかば、伊豆入道は此度は御留守の人数よて、御城中よ罷在れと申上れば、さらば佛神の御加護よやと思召し、折から本尊を

拜覽あらせられしに、不思議や御全身汗はみ、御背中よ鐵炮の跡つかせ給ふ。扱は今日の戦よは本尊乃御加勢あるごと、頻よ御感涙御身の毛もよたちたふとひ給ひける。その時神君様御喜悅のあまり、御供養あしたまはんと思ふよりけるに、幸ひ御菓子師の鹽瀬が、献上せし饅頭を片木よしてさへ、御兜の上にすへさせられ、御供養ありしかば、今以年毎に四月十七日黒本尊へ兜饅頭よて、鹽瀬より、夫よりほさあく大坂落城し、天下一統、御代萬歳、松吹風よ御凱陣の御旗を靡せられ、本尊重て駿府の御城よ入らせ給ける。乃至本尊は、駿府より江戸の御城よ移らせ給ひ、台徳院様の御崇敬往時よ異あらせ給はず。殊よ朝夕御拜仰の御爲とて、御城中よ佛閣を構へ給ひ、佛閣ハ平川口又かゝる靈像よ俗躰の給仕甚だ御憚りありとて、天徳寺、誓願寺、大養寺、本誓寺の住持を御供養の僧よ定められける。右四ヶ寺御供養僧たる其後大猷院様の御時、上意により、此本尊は神君様の御尊敬深く御座しければ、眞よ今の世れ甘棠なりとて、別よ御堂を建立し移し奉り給ひける。已下略抄。

三縁山志

武州三縁山増上寺阿彌陀佛靈像記

三縁山増上寺大殿特設一座奉安阿彌陀佛倚像、倚即立也。高二尺六寸。是東照神

君嘗所奉供之尊像也。世人呼之稱黑本尊。蓋以久經歲月金泥悉變作黑色。本邦諺語以佛像稱本尊故也。又或曰九郎本尊。謂源九郎義經之所奉持也。故以名焉。按黑與九郎倭語相近。由是其所傳稱自有異乎。然稱謂之原由。未知孰是。靈像始在于參州桑子明眼寺。神君一瞻禮之意甚欲得。存想不舍。乃割某邑調五十石。以充寺業。易得此像。有神君手筆記曰。楞嚴院源信僧都之所鑄造也。距師七百年于此矣。然相好圓備。儼如生身。大凡使瞻仰者不覺斂手鞠躬焉。靈感屢彰。不可具載。且述三五以爲實錄。信州有武田勝賴者。一方之勇將也。屢與神君爭戰不克。勝賴有侍童失其名。有姿色而勇悍絕人。勝賴密命之曰。若事成則厚賞於汝。童雖包姦計。而阿媚奉歡。神君不甘受之。自爲隄防。雖在幽室。而無狎昵之私。童無隙可乘。常伺夜眠。一夕神君就枕熟眠。時靈像夢於神君曰。子何爲安眠耶。速起念佛。其聲甚急遽也。神君驚覺。即到佛前。拈念珠而課佛。童不得知之。竊入寢室。揮刀二斬。手捺覓之。惟有臥衾而不得。神君童大駭怖。狼狽周旋。神君抗聲叱之。衛士聞之。馳來。犄角執之。神君乃召童。從容謂曰。汝銜主命。履險蹈禍。不顧危亡。意氣壯勇。可謂烈士矣。即放之歸。時人莫測是何。或問所以。神君拒而不答。屢問不已。神君告之曰。我實嘉彼幼年而有大意。旣得擒之。便手劍之。易

於摧破鷄卵。然輕其窘厄。而遺其有義。此豈良將之意哉。亦夫或爲鄙事。而文之以美名。或適有微功。則自移大之。誇稱其事者。此庸人之常情也。彼計不成。窘急得免。面謁其主。無言可述。必文己褒我。謂曰。家康神君諱。猛將有智謀。誰能得覘其隙乎。又豈爲兒曹所刺殺者哉。勝賴聞之。以我爲如此者。則失魂破膽。大生怖畏。童亦以我爲恩。或報致忠。何重負。鎧荷戈。與我從事於邊疆耶。然則與殺之而無益。孰若放之而有利。子其思之。問者歎伏。至今世講武業者。往往傳唱是事。以爲武略之要領也。神君免此厄時。手持二連數珠。是數珠之製。時未盛行。世人視神君之免厄。多取法之。方今天下課佛號者。一遵此製。莫不順焉。所謂二連數珠者。傳言起於一心院稱念上人。今世稱之謂貫輪也。蓋穿三十及三十六顆。以作兩輪。鉤鎖相連者也。神君得靈像通夢之驗。益加歸敬。重同眼目。每有軍事。使人馬捧而前行。云慶長二十年。神君出軍于攝州難波。兩氏安危。士卒存亡。繫此一戰。然當兩陣交兵之時。有一僧。身體甲冑皆悉黑色。自神君之陣而出。人咸不知從何而來。進向敵城。奮疾如飛。堅甲利兵。爲之所摧。適有爭戰者。則或歐血而死。或悶絕而仆。兩陣奇之。以爲神異。不測殆非人事。觀智國師使上足弟子了的。廓山二人。從神君於軍中。神君與二人共開視佛龕。惟有光趺。失像所在。神宮願二人

曰、嚮戰場之奇士即是尊像之所變作乎。相共流涕感歎不已。戰酣日暮兩陣各退。而後像還竈中云。神君捐館後、建廟堂於增上寺、號曰安國殿、乃奉安神君嘗所造等身影像、祭奠無懈。嗣君大將軍秀忠公、奉供靈像於都城、瞻禮歸敬、無減于神君。二年嗣君以謂先考平居隨身奉供、未嘗頃刻離其傍、是尊像乃今甘棠也、宜安置之於廟堂之地矣。遂降鈞命、遷于增上寺。延寶四年九月二十二日夜、丈室失火、靈像所居之處、焰火已盛、欲救無方、時有一人躍身入煙焰之中、捧之移於庭外。衆人大喜、見之惟左足踝下少處闕壞、及室盡火滅、覓其缺少、得之於灰燼之中、宛然不燒、接之如故。後檢問移之者、或曰僧某也、或曰俗某也。所見各異、而移之者實某一人也、亦足以爲奇矣。元祿八年大將軍綱吉公降命、修增上寺大殿、時母君桂昌院從一位大夫人重新佛龕、寶帳、玉扉、構飾精巧莊嚴、成就乃命遷於大殿寶壇之上。母君大君同作瞻禮、近臣諸司無不景仰。於戲大聖逗機、影迹無方、所現之處、無非利益、是故始則闕柳營深殿之中、鎮護台座、以安天下。今也居貴賤絡繹之地、顯示妙相、以度含識。此威神君精誠懇到之所感、又歷代大君護教輔贊之力也。然則國運與法運、共得無窮。四海安泰、萬民和洽、生無事之盛世、樂歲物之繁成、俱往淨刹、同至不退。其亦有在於是乎。因記前事、以示

後世云。

淨宗護國篇

神田明神社
轉移營造

四月元二和二年紀元二二七六年。神田明神社ヲ湯島○市內本郷區ニ轉移營造ス。三年丁巳元二和七年紀元二二七七年。

神田明神社
轉移營造事蹟

神田明神社轉移營造 神田明神ハ元和二年四月再ヒ湯島ニ移リ營造ス。以テ

江戸川掘鑿邸宅地拓開ノ地ヲ爲サムトスル也。

一、御社地拜領地表通り凡百五間餘。奥行間中凡百間。此坪數凡九千五百六拾六坪餘。

内

境内凡三千六百坪餘。

門前町家之分凡貳千三百三拾四坪餘。

往來空地凡六百六拾壹坪餘。

神主構之内凡貳千九百坪餘。

代地之分昌平橋外三拾三坪。

右往古神田橋御門内只今神田橋御館之御場處ニ。有之、其後年代不相知、駿河臺當時鈴木町

邊遷座有之、元和二丙辰年當湯島之地所エ凡壹万坪程爲替地、致拜領、則

遷座いたし。

市街恢弘時代

一、當所を赤城臺又の神田臺と相唱ひ由申傳ひ。尤此譯相知不申ひ。

一、神號神田大明神。

祭神二座、

一ノ宮、大己貴命。

但、神體往古を秘封之儘なる於神主を拜見不仕ひ。鎮座之年代相知兼申ひ。

二ノ宮、平親王將門公靈。

但、神體往古を秘封之儘なる於神主を拜見不仕ひ。

天慶年中之頃蒙勅許相殿ニ相成ひ由申傳、委細之儀相知兼申ひ。

一、神田御社と唱ひ儀、何之譯なる御社と申譯相知不申ひ得共、往古を御社と唱來り申ひ。

但、正五九月御本丸御湯立御被差上ひ。御社と認差上申ひ。

一、御府内惣鎮守之儀、將門公靈相殿鎮座此りなる惣鎮守と唱來ひ由申傳ひ。

但、平親王靈威隆盛成故、往古をいと取く申傳ひ。其餘之儀相知不申ひ。尤

寛文元年延寶七年元祿四年當御棟札等何れも武州豊島郡江戸惣鎮守と有之ひ。

一、祭禮毎年九月十五日。

但、渡祭禮の隔年ニ御座ひ。

右祭禮起發之儀、年代相知不申ひ。御入國之頃迄、毎年船祭なる竹橋邊の御船なる川筋御道筋相分り不申ひ得共、小船町神田屋庄右衛門と申者之宅前を神輿御上り、陸地御通行之由申傳ひ。尤船祭相止ひ年代相知不申ひ。且往古を延寶之頃迄、毎年御祭禮有之、天和元年を隔年御祭禮ニ被仰渡ひ。且當時神田屋庄右衛門儀、子孫家筋相知兼申ひ。

但、竹橋と記録ニ有之ひ得共、當時竹橋御門之儀ニハ哉相分り不申ひ。

一、御祭禮之節、神輿大手御橋ニ奉居、神主奉幣有之、往古を仕來りニ御座ひ。

但、最初古實相知不申ひ。

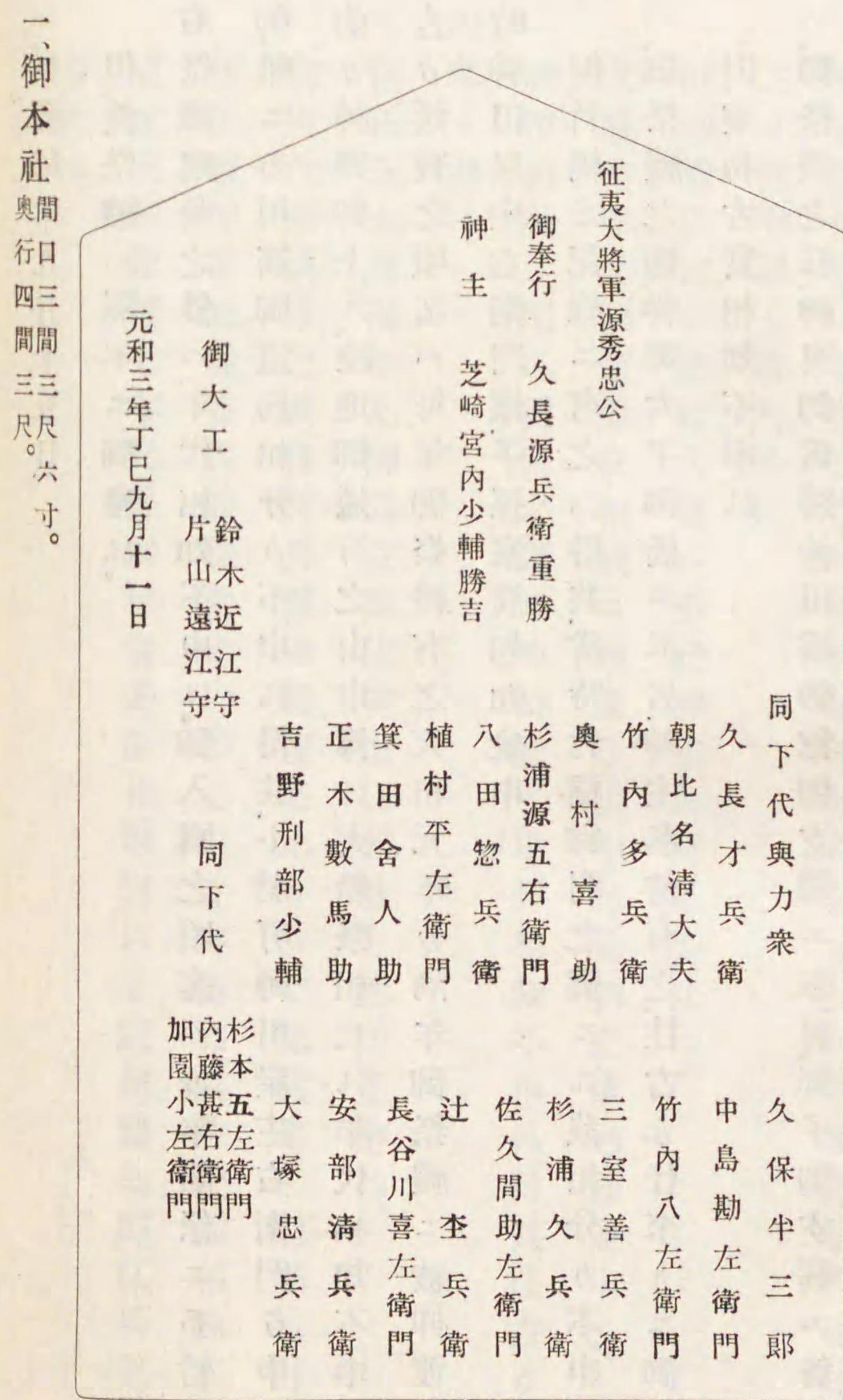
一、御祭禮之節、神輿御舊跡神田橋御館御立關ニ奉居、獅子御立關ニ舞込申ひ御吉例ニ御座ひ。此古實相知不申ひ。

一、御祭禮之節、神主轅ニ奉供奉仕、騎馬社家十五人六位衣冠ニ奉供奉、内二人の御太刀背負、右之通往古を仕來りニ御座候。古實之譯ハ相知不申ひ。

一、御祭禮當朝相馬邦三郎殿御社ニ參拜、御初穂金三百疋被献之ひ。夏。

但、古實相知兼申ひ。

一、御祭禮當朝日輪寺御社エ參詣青銅一貫文献之、拜禮誦經致し候夏。但、往古より仕來りニ至、由來相知兼申ひ。○中
台徳院様御造營之御棟札御奉行覺



一、幣殿 間口三間三尺六寸。奥行五間五寸。

内ニ有之候。

一、隨身 壹對 大サ五尺貳寸。高サ五尺壹寸。

一、拜殿 間口九間四尺八寸。奥行四間貳尺四寸。

内、

中央參詣拜所 間口四間壹尺四寸。奥行貳間四尺五寸。

東之間 間口貳間四尺七寸。奥行貳間四尺五寸。

西之間 間口貳間四尺七寸。奥行貳間四尺五寸。

但、社家詰所。

右從公儀初ゝ御造營、元和三巳年出來。

但、寂初御造營御社間數も當時御社間數と御同様ニ申傳ひ。書留ハ燒失ニ至、相知不申候。

一、右瑞垣 東ノ方拾壹間半。西ノ方同斷。後口拾間三寸。

一、御供所 間口五間。奥行三間。

右ハ元和三年初ゝ御造營之節、御造立ニ相成、其後御社御造營御修復之度

々、御本社ニ准シ御造立御修復共出來仕レ。

一、渡り廊下長四間、幅壹間。

右全斷。

一、御寶藏間口七間、壹尺、奥行四間、四尺五寸。

右の元和三年初レ御社御造營之節御造立ニ相成、其後御造立并御修復ニ相成レ得共、其都度々年曆相知兼申レ。

一、御湯立場間口四間、三尺、奥行貳間。

右同斷。

御湯立場エ古札等所々々相納申候。古札等ハ御湯立有之節致火中レ。

一、御水家間口壹間、三尺五寸、奥行壹間、貳尺。

右全斷。

一、御神馬家間口三間、奥行貳間半。

右御神馬家往古有之由申傳レ得共、最初造立之節年代相知兼申レ。

一、樓門間口四間、四尺、奥行貳間、四尺。

一、左之練堀長折廻し貳拾壹間半、東。

一、右之練堀長拾貳間貳尺五寸、西。

一、樓上鎮座之神無御座ハ。

一、隨身長四尺五寸、作人大佛師善慶。

由來節盤間門命。ち相唱、御門を守レ神ニ御座ハ。

一、木馬奉納人無之、大サ五尺八寸。

由來相知不申レ。但、木馬之儀、御造營之節御寄附ハ哉、書留無之、相知兼申レ。

當時有之候ハ寛政九年ニ出來レ夏。

右元和三年初レ御社御造營之節御造立ニ相成、其後御造立并御修復有之ハ年曆相知不申。

一、樓門左右袖門貳ヶ所、明キ貳間宛。

右全斷。

一、裏門明キ貳間。

右元和三年初レ御社御造營之節御造立ニ相成、其後御造立并御修復ニ相成

候得共、其都度々年曆相知兼申レ。當時御門ハ氏子町ニレ出銀出來申レ。

一、裏門明キ。

右全斷。當時の自立ニ御座也。

一、石坂上門明キ七尺五寸。

右同斷。當時の氏子町出銀ニ有出來申也。并井垣共同斷。

但、當時の塀ニ相成申也。

一、竹門明キ壹丈。

右同斷。往古の御造立ニ相成候儀有存候得共、書留無之、相知兼申也。當時の氏子町ニ有出來申候。往古の竹の門ニ有之也。竹門と唱也儀相知不申也。

一、一ノ鳥居明キ壹丈六尺。

右元和三年御造立、其後天和三亥年御修復御坐也。其後御造立并御修復共、其都度々年曆相知不申也。

一、二ノ鳥居明キ壹丈三尺五寸。

右往古有之也。哉書留無之、相知不申也。

一、石鳥居石坂門明キ壹丈四尺。

右元和三年御造立、後天和三年御修復、其後御造立并御修復之都度々、年曆相知不申也。當時の氏子町有出來申也。

但、元和天和之間ニ御造立御修復共有之也。哉、相知不申候。

一、額殿間口八間。奥行三間。

右往古有之由申傳也。

一、御神酒所間口貳間。奥行三間。

右往古有之也。哉、相知不申也。○中畧。

一、門前町屋

表門前町 凡八拾參坪餘。

表門前 凡六百貳拾六坪餘。

裏門前 凡四百貳拾壹坪餘。

西町 凡千貳百三坪餘。

表門前町代地 凡三拾三坪。

昌平橋外

右門前町家願濟之譯年代、相知兼申也。

但、元和年中神主芝崎越後守相願、町家出來仕候由申傳也。得共、書留無之、相知兼申也。

——文政寺社書上

武陽神田神廟記

欽稽神田祠一殿二坐、左者國造大己貴命、而右相殿者、平親王將門公靈也。先此鎮坐豐島郡芝崎邑。今神田橋內、後爲土井大炊頭利勝之宅地也。開基之年不分明。緣起舊記等、中古以前放失矣。傳稱將門公之屍、追來官軍、到芝崎神田邊倒矣。時人恐其謗、築墓於其所祭之。今尙在土井大炊頭利勝、井上河內守正利之宅地境界。猶依奇瑞、勅許合祭之於神田神。從此當社一殿二坐也。後有故去邑、遷坐于駿河臺。此所又俗稱神田臺、後爲小堀遠江守宗甫之宅地矣。元和二年丙辰夏四月、又遷坐于赤城臺。此所亦俗稱神田臺、這地也。泉甘屋肥俗淳、去金城良三百餘步。設富士山乎西南、筑波根乎東北、北則百尺岸下、隅田河清流近、而足洗於參詣之貴賤胷塵。右則千里平陸、武藏野曠原連、而餘伸於群客之男女眺望。至于今、神田靈地巍然而其神威所載、延喜式超過五所之神田者是也。江志賀濃賀茂丹波多記加石河郡同府。古曰、山不在高、有仙則名。這臺也、不在山、其名高似泰山者、蓋誓神鎮坐于此也。○中畧。從一位大相國前征夷大將軍源秀忠公曰、國造神者、崇武州之總社神田祠者、禱天下之繁榮、且城下鎮守、而且國中之壯觀也、不可先莊嚴。因茲元和三年歲次丁巳秋九月、命久永源兵衛重勝、使匠師鈴木近江片山遠江、造營之功。於此神威巍々陪盛、神光赫々彌新也、世舉無不敬欽、國連無不奉仕、老少男女、日々勵履杖、貴介公子、月々運鞍

輿信矣。神以敬貴依信寧也。不圖羅丁酉之類災、于時大師前左近衛大將馬寮御監源家綱公、命井上河內守正利曰、神田之神廟者、秀忠公遺命、所以異于他也。早難欲俾近臣下知、遂造營、金城內外火災多、尙也。神司芝崎宮內少輔平吉連。自指示、而以宜成功。則黃金二千兩、萬治三年庚子冬十月、擇吉日良辰、工削、墨良匠運斤、寬文元年辛丑夏四月、所庶幾、天子萬歲、台齡千秋、常盤堅盤、四海安貞、衆民豐樂、仍掛畫匠狩野探幽墨圖乎神前、就大炊御門從一位、再大傳藤經孝公、爲神田大明神五字乎樓門之顏色、神威神光依然也。延寶七年秋八月、松平山城守重治奉家綱公鈞命、教小菅猪右衛門正氏、須田次郎太郎、祇寬神谷長五郎、直重花井次左衛門定安等、遂修復。明年庚申爲稀世之烈風、所々小破。又奉大樹綱吉公台命、依舊面々修之矣。
續府內備考

神田明神門前町

○上 神田明神社之儀、古來々神田橋邊二有之、其後只今之駿河臺鈴木町邊二遷座有之、元和二辰年四月、當所々引地二被仰付、凡壹万坪程之地、所被下置也。
○下畧 ○神田明神門前町書上、神田明神表門前書上、神田明神裏門前書上、神田明神西町書上、皆同也。

神田神社 府社

市街恢弘時代

文政町方書上

神田區宮本町ニアリ。域内貳千五百六拾壹坪六合八勺、大己貴命ヲ祀リ、少彥名尊ヲ合祀ス。天平二年庚午芝崎村今神田橋内ニ創建シ、天正十九年辛卯十一月徳川氏社領三拾石ヲ付シ、慶長八年癸卯神田臺今駿河臺鈴木町ニ移シ、元和二年丙辰四月今ノ地ニ移シ、社殿ハ同三年丁巳ヲ以テ成ル。○下

東京通志

是頃

元和二年(紀元二七六)四月

神田明神西町

市内其他起立ス。○文政町方書上

神田明神西町其他起立

神田明神社新境内ニ起立シタル市街左ノ如シ。

神田明神西町起立

文政町方神田明神西町書上ニ據ル。

神田明神西町

一、當町之儀之、神田明神社地之内ニ有之、西ニ當リハ故、神田明神西町ニ相唱申ハ。往古之武州豊島郡峽田領之由申傳ハ。明神社之儀之、往古神田橋御門邊ニ有之、其後駿河臺鈴木町邊ニ鎮座御座ハ處、元和二辰年四月中當所ニ引地被仰付、凡壹万坪之地所拜領仕、右之内ハ町家取立申度段其節之神主芝崎越後守寺社御奉行所ニ御願申上ハ處、願之通被仰付、則御支配ニ相成罷在ハ。尤右越後守義之、元和年中之神主ニ御座ハ得共、其節之書物等、天明六年出火

之節燒失仕、年月等相分リ兼申ハ。尤寛文四辰年町御奉行所御支配ニ相成申ハ。

一、町内片側町家 但東側。

南北表門口田舎間六拾間。裏幅惣延長六拾貳間壹尺。

東西裏行東ノ方ニ有六間五尺。同西ノ方ニ有折廻シ五拾六間。

惣坪數千貳百三坪三合。

但、外ニ湯島往還通り道幅田舎間七間、往還付雨落下水幅壹尺ニ御座ハ。尤往還當町持分之譯并裏幅間數不同之分、朱引ヲ以委敷繪圖面畧。○相記申ハ。

一、神田明神市毎年十二月廿日廿一日相立申ハ。但、商ハ物之儀之、都ホ正月鋸物其外等ニ有、往古御座ハ所、中絶致、寛政三亥年中ハ猶又相始リ、其節ハ明神社内計市立ハ所、年々商人共ニ相増、當時近邊町方往來ハ商ハ人共罷出、引續連綿仕ハ。尤町方ニ有御願濟等之不致、以前明神主ハ御願濟之趣ニ有得共、年古キ儀ニ有相分リ不申ハ。前書寛政之度相始リハ節之、別段神主方ハ御届等之不致由ニ御座ハ。

一、町内北ノ方地境ニ、凡壹丈三尺餘相廻リ、高サ八九丈程之年古キ銀杏木有

神田明神西町其他起立
神田明神西町其他起立
神田明神西町其他起立
神田明神西町其他起立

之、右場所と杉浦房次郎殿屋鋪地并明神社地境之あだれ之場所とある、何を之持場と申儀と駈と不相辨ひ得共、先年より里俗化ケ銀杏と申傳ひ得共、年古キ儀と付、由來駈と相分り不申ひ。

一、當町先年と湯島往還裏町とある之、南ノ方ニ猿江覺樹王院持湯島龜有町と申屋有之、右町と往還付と有之、此處寛政十年聖堂御再建之節、右龜有町御用地ニ被召上、聖堂御圍込、并湯島往還屋敷ニ相成ひと付、只今之通り往還付町屋ニ相成申ひ。

一、當町地先キ湯島通り往還之儀、先年と當町と拾五間南之方ニ有之、此處、前書之通り御圍込等ニ相成、只今之通り屋敷付替り申ひ。

神田明神
門前町

神田明神門前町 文政町方 神田明神 門前町 書上ニ據ル。

神田明神門前町

一、當所往古と武州豊島郡峽田領御座此處、神田明神社之儀、古來と神田橋邊ニ有之、其後只今之駿河臺鈴木町邊ニ遷座有之、元和二辰年四月當所引地ニ被仰付、凡壹万坪程之地所被下置ひ、依之右社地之内町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守年月不知寺社御奉行所と奉願ひ處、願之通被仰渡町家

作仕、則當町之義と、社地内ニある表通り門前ニ有之、此間、神田明神門前と相唱申ひ。尤古來と明神表門通り中程ニ別紙繪圖面畧。之通り、石之鳥居有之、右鳥居内町家と表門前と唱、同所外之方往還迄を明神門前町と號シ、則當町ニ御座ひ。尤前書之通、古と寺社御奉行御支配所ニ有之、此處、寛文四辰年中、町方御支配ニ相成申ひ。且前書石鳥居天明六年焼失仕ひ得共、只今以跡有之、地境之印ニ仕ひ。

一、寛政十年年聖堂御再建之節、町内南之方表通り五拾八坪七合五夕御用地ニ被召上、右代地之儀、昌平橋外明地之内ニある被下置ひ。尤委細之義と、代地之方ニある可申上ひ。

一、湯島通り往還之義、當町地先之場所、先年、當時之場所、凡拾壹間程南ニ寄有之、此處、寛政十年年聖堂御再建之節、道敷右御圍込ニ相成、其節、當町前書之通り御用地ニ被召上、右之場所、往還御付替ニ相成、當時有形之通ニ相成申ひ。

一、町内東西ニ 拾三間半。

一、同南北ニ

東之方拾壹間。
西之方四間。

市街恢弘時代

惣坪數八拾三坪七合五夕。

但、兩側内中央明神社通道幅四間相餘申ハ。外ニ湯島往還通り道幅田舎間九間、往還付雨落下水石橋下水除幅壹尺御座ハ。尤往還當町之持分之譯、并裏幅間數不同之分、朱引を以委細繪圖面〇ニ相記申ハ。

一、神田明神市、毎年十二月廿日廿一日相立ハ事。〇下畧。西町條同文。

神田明神表門前 文政町方神田明神表門前書上ニ據ル。

神田明神表門前

一、當所往古ハ武州豐島郡峽田領ニ御座ハ處、神田明神社之儀、古來ハ神田橋邊ニ有之、其後只今之駿河臺鈴木町邊ニ遷座有之、元和二辰年四月當所ハ引地ニ被仰付、凡壹万坪程之地所被下置ハ。依之右社地之内ハ町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守年月不知、寺社御奉行所ハ奉願上ハ處、願之通被仰渡、町家作仕、則當町之義ハ、社地之内ニ有、表門通りニ有之ハ間、神田明神表門前ハ相唱申ハ。尤古來ハ明神表門通り中程ニ別紙繪圖面〇之通り石之鳥居有之、右鳥居外往還迄之町家ハ門前町ハ唱、同所ハ内ニ明神表門前ト号シ、則當町ニ御座ハ。尤前書之通り古ハ寺社御奉行御支配町ニ有之ハ處、寛文四辰年

神田明神表門前

中町方御支配ニ相成申ハ。且前書石鳥居天明六年燒失仕ハ得共、只今以跡有之、地境之印ニ仕ハ。

一、町内東西ハ南之方三拾三間半、北之方貳拾壹間。

一、南北ハ東之方三拾五間半、西之方四拾五間半。

惣坪數六百貳拾六坪七合五夕。

外ニ表石橋ハ之敷石通り參詣往還道幅四間、神主前ハ石坂迄空地四百八拾三坪御座ハ。

一、神田明神市、毎年十二月廿日廿一日相立ハ事。〇下畧。西町條同文。

神田明神裏門前 文政町方神田明神裏門前書上ニ據ル。

神田明神裏門前

一、當所往古ハ武州豐嶋郡峽田領ニ御座ハ處、神田明神社之儀、古來ハ神田橋邊ニ有之、其後只今之駿河臺鈴木町邊ニ遷座有之、元和二辰年四月當所ハ引地被仰付、凡壹万坪程之地所被下置ハ。依之右社地之内ハ町家取建申度段、其節之神主芝崎越後守年月不知、寺社御奉行所ハ奉願上ハ處、願之通被仰渡、町家作仕、則當町之義ハ、社地之内ニ有之ハ間、神田明神裏門前ハ

神田明神裏門前

相唱申。尤前書之通古之寺社御奉行御支配ニ有之ハ處、寛文四辰年中町方御支配ニ相成申。

一、兩側町家惣間數

南北ハ 田舎間八間、裏幅同斷。

東西ハ 同坂下迄四拾壹間半、同坂通り表門前境迄拾貳間、都合五拾三間半、裏幅同斷。

惣坪數四百廿壹坪壹合七夕。

外ニ、昌平橋表往還道幅五間壹尺、下水貳尺五寸、參詣道敷石通り坂下通り道幅貳間五尺。

一、神田明神市、毎年十二月廿日廿一日相立事。○下畧、西町條同文。

江戸川掘替

五月廿一日庚寅○元和二年(紀元二二七六年)○庚寅、三正綜覽。幕府先弓頭阿部正之○四郎、五郎、郎ヲ奉行トシ、關東ノ人夫ヲ發シテ、神田臺○市内、神田區。ヲ掘鑿シ、江戸川ノ流路ヲ轉ジ、堤防ヲ拓平シテ宅地町地ヲ開キ、十月○元和二年(紀元二二七六年)。ニ至リ功ヲ爲ス。爲ニ此ノ前後ニ於テ、寺社ヲ轉移シタル者少ナカラス。蓋駿府詰諸士ノ江戸ニ歸還スル者ニ宅地ヲ給與セムカ爲メ也。○本光國師日記。慶長日記。坂上池院日記。武德編年集成。東武實錄。天寬日記。明良洪範。白石紳書。台德院殿御實紀。東京地理志料。

江戸川掘替

江戸川掘替 前將軍家康○德薨ジ、駿府詰ノ士江戸ニ歸還スルヲ以テ之カ宅地ニ供充スルノ必要有リ、江戸川ヲ掘替ヘ、神田臺ヲ拓開シ、及神田川沿岸其他ニ宅地町地ヲ開ク。

一、同○元和二年(五月)。廿一日、細越中殿ヘ返書遣ス、案左ニ有之、内記殿ヘ持せ遣ス。○中畧。

一、駿府ハ參上被申候衆、何も御屋敷可被下ニ付ル、神田のよい川を吉祥寺之きこへ掘替、玄蕃殿○細川興元。立左近殿○宗茂。などのうしろのつゝをならし、皆々屋敷可被成様こさゝ御座○中畧。

五月廿一日○元和二年。

金地院 崇傳

羽越州様○細川忠興、川人々御中。

一同○元和二年(六月)。十一月、細越中殿ヘ狀遣ス、案左ニ有、内記殿ヘ持せ遣ス。○中畧。

一、駿府ハ參加之諸侍衆御屋敷可被下旨ニ有、神田之川を掘替、御普請被仰付之由ハ、關八州之手夫ニ有被仰付之由ニハ。○中畧。

六月十一日○元和二年。

金地院

細越州様○忠興、川人々御中。

一同○元和二年(九月)。二十七日、細越中殿八月廿九日之狀來、細内記殿被届。○中畧。

市街恢弘時代

一、此地彌相替儀も無御座。神田之御普請大形相澄、としく御屋敷拜領之衆も有之由。○中

七月六日 ○元和二年

金地院

細越州様 ○忠

尊報

本光國師日記

一、駿河大御所様衆、自駿府引越被參。い、屋敷おどもせまく可有之由にて、江戸川を北東へ直に掘通、其中をひろけ、屋敷割を可被仰付よし。初は吉祥寺の前を掘通し、田安御門の北東ノ方を引ならし、神田明神其外万隨意號新知恩寺。以下を先へ送、明神ノ神田の臺へ移し、御臺所より御建立、萬隨意ノ下谷へ移し、本明神其外ノ小石川方々へ移シ、御堀の土を引あらし、屋敷構被仰付。○元和二年八月条ノ次ニ記ス。

慶長日記

八月、○元和二年。阿部左馬亮松平豊後大番頭被仰付、近藤五左衛門御鐵炮ノ頭被仰付、阿部彌市御歩行頭被仰付、大御所様衆駿府ヨリ引越被參候ハ、屋敷ナトモセバク可有之由ニテ、江戸川ヲ北東エスクニホリマサシ、其ナカヲヒワケ、屋敷割可被仰付由。初ハ吉祥寺ノ後ヨリ本郷ノ臺ヲ堀ヌキ可然カト評定候ヘ、後ニハ様替リ、吉祥寺ノ前ヲ掘通シ、田安御門ノ北東ノ方ヲ引ナラシ、

神田明神其外万隨意新智恩寺ト号ス。以下ヲ先エ送り、明神ハ神田ノ臺へ移シ、御臺

所ヨリ御建立、万隨意ハ下谷エ移シ、本明寺其外小石川方々エ移シ、御堀ノ土

ヲ引ナラシ屋敷構被仰付。 坂上池院日記

神君へ勤仕ノ輩駿府ヲ去テ武江ニ下着スベキ故、其宅地ヲ賜ルベシトテ、田安御門ノ下北西ヨリ清水御門ノ邊へ流ル江戸川ヲ、本郷ノ臺へ堀通ジ、淺草川へ流スベキ旨議セラレケルガ、吉祥寺ノ前ヲ掘通シ、柳原筋ヨリ淺草川へ落シ、川ノ土ヲ以テ地形ニ直シ、神田大明神ヲ湯島ノ邊へ遷シ、祭リ、新川ヨリ東南屋敷割シ、則駿府ヨリ引移ル地ナレバ駿河臺ト稱セラレ、或ハ鷹匠町猿樂町臺所町等ト名付テ、是ヲ宅地ニ賜ト云々。阿倍四郎五郎正之川中島ノ成敗、テ当月ニ至テ成就ス。

○或曰、神田大明神ノ社ハ、大御臺所ヨリ御建立アリ、幡隨院ハ下谷へ、本妙寺ハ丸山へ、其餘小石川邊ノ神社佛閣悉ク遠ニ移サルト云々。○元和二年八月廿日ノ條。

武徳編年集成

是月 ○元和二年。江城ノ北神田ノ堀ヲホリ、土手ヲ築ク。阿倍四郎五郎正之是ヲ

監ス。 東武實錄

市街恢弘時代

七九五

十一月元和二年六月

一、駿府に參加之諸侍衆、御屋敷可被下旨に、神田之川を堀替、御普請被仰付ル。關八州之手夫に、被仰付由に。

日不知元和二年十月

一、江戸神田台堀土手普請、關東之人夫千石之地一人宛積勤役之。阿部四郎五郎正之等奉之。紀年錄。

——天寬日記

此頃元和二年唯今マテ駿府ニ在テ神君ニ奉仕セシ面々皆江戸へ歸住スルニヨリ、御城下ニ於テ宅地ヲ給ハル。田安御門ノ下北面ヨリ、清水御門ノ邊へ流ル、江戸川ヲ本郷ノ臺ニ掘通シ、淺草川へ流スヘキト評議有ト雖、吉祥寺前ヲ掘テ、柳原ヨリ淺草川へ落シ、其川ノ土ヲ以テ地形ヲ直シ、神田明神ヲ湯島へ移シ、新川ノ東南ニ屋敷ヲ下サル。駿河ヨリ移リ住ム地ナレバトテ駿河臺ト名付ク。又臺下西ノ方觀世太夫并ニ其座ノ者共住居セシヲ外へ移シテ、此所ヲモ賜ハル。今ニ猿樂町ト云。其外鷹匠町臺所町ナド名有、是モ宅地ニ給ハル。阿部正之信州ヨリ歸リテ後、新川ノ奉行ヲ仰付ラレ、或ハ幡隨院ヲ下谷ニ移シ、本妙寺ヲ丸山ニ移ス。其外小石川邊ニ有所ノ神社佛堂ハ、悉ク遠方ニ移

サルト云。

——明良洪範

丙申の冬雀部六大夫入道重羽の物語に、我父など駿河より此所へ引うつりし頃に、今の駿河臺の邊ひらけたり。駿河衆の屋鋪も被下候故、駿河臺といふ也。其頃には江戸川といひて、今の龍慶橋の筋の川南へ流れて平川に落合たり。水戸殿の前の土堤の少しひきと見ゆる所、即其川筋あり。夫を埋みしと、後又落入たれぬ、又築しかと地落入りて少しひきとあり、さてその流の平川へ落入らむと、まる筋の、唯今の内藤駿河などの屋しき也。それ故に内藤やしきに、今も池有といふ。これ其時の川筋の水の残りあり。此處に鶴の下りしを聞召、台徳院殿御あそせ有へしとて御出の時に、御番衆の二三人見んとて御番所より私に跡に付て來りしを、土井大炊頭の見付て、皆當番にて、あきのと問、いゝにもと答へしか、仰もあてうち、あけて參りて、必を御あゝりに逢ふへし、我あそより參れ、よきますへきといふほどに、左りにつきて參るに、鶴とらぎられて御氣色よかりし時に、わかきものとも御鷹のものと、り候事、汝つるに見ぬとて御返らにつきて參りて候と申されしかは、御覽して誠に彼等はいま、と見候事は、あらしと、御見らひなされと、りといふ。その猿

樂町といふにも、觀世太夫り屋敷ありて、座のもの少々居とりき。さてかの駿河衆引うつるに至て、今のとくに水戸殿の前の堀を淺草へやりつゝけ、其土を以て土堤をつりれて内外の隔出來て、こなを駿河臺と名付たり。其後に又陸奥守へ被仰付ていよく、其堀もふるえをられし也。觀世やしきも他所へうつされて、其跡もやしきり渡して猿樂町の名残りといふ。某問ふ、さらは今の牛込御門の堀も其時に出來しやと問ふに、牛込前の堀の事いと知らぬ。龍慶とし筋の水を江戸川と云、平川の落合ふをふさきて淺草川へ落を事の、前よりいふことと承りたりといふ。

白石紳書

廿一日元和二年五月。駿城に奉仕せる諸士みな江戸に參るに由て、神田臺下の川を吉祥寺の際へ堀あらため、川邊の堤防を平均し、かの諸士の宅地とせられんため經營あり。

十一日元和二年六月。駿府にてつかへまつりし士みゑ江戸へ參る。このほど休暇をたまへば、京坂にても、采邑にても、其外何方にもまかり、秋にいたり參府すべしと命せらる。この輩か宅地給はんとて、神田川を掘替て、地所を經營せらるゝため、關東八州の役夫を催促あり。

十八日元和二年九月。神田邊の經營成功しければ、駿府より來りたる諸士、宅地を賜ふ。

是月元和二年十月。神田臺の土功成功す。阿部四郎五郎正之奉行する所なり。

是年元和二年。駿府より參り仕る輩に給ふ宅地、始には江戸川の水路を北東に直流せしめ、其中に宅地を築き給ふへしとて、吉祥寺の後より、本郷の臺を掘通すへさかど有しが、また改て吉祥寺の前を掘うかち、田安門の北東を平均し、神田明神の祠、萬隨意院、以下の神祠寺院を遠く退け、明神は御臺所御沙汰として神田臺に構造し給ひ、萬隨意院は、下谷へうつし、本妙寺等は小石川にうつし、堀の土をもて宅地を平均せらる。

台徳院殿御實紀

元和二年五月、神田臺を鑿開して、江戸川を淺草川に通じ、其南北は宅地町地を開かる。

上。駿河臺、小川町の邊、及淺草門の外なる町々は、皆當時開かれし所なり。

東京府志料

是ヨリ先、江戸川ハ東西ニ流レ、小石川ニ合シテ今ノ飯田町堀留川ニ注キ、平川ニ入り、一橋ノ少東南ヲ經テ常盤橋ニ至ル。元和二年丙辰四月、東照公薨シ

駿府居住ノ諸士ヲ江戸ニ移ヲ以テ、六月江戸川ヲ東ニ疏鑿シ、小石川ト共ニ神田臺下ノ小流ニ合シ、淺草川ニ注カシム。即神田川ナリ。以テ飯田町等ノ地ヲ廣クシ、邸地ヲ同町及ヒ猿樂町、小川町舊鷹匠町ト云。駿河臺ニ與フ。是ニ於テ江戸川ノ堀留川ニ通スル者、其中間ヲ斷絶ス。同六年庚辰秋、更ニ松平正綱左衛門太夫。等ヲ以テ奉行ト爲シ、神田川ヲ疏浚ス。

東京地理沿革考

〔參考〕大日本史料所收東邦にある使傭人より東インド商會に贈りし書翰中、左ノ言有リ。

一六一六年七月十四日新曆二十四日ニシテ元和二年六月十一日ニ當ル。附、リチャルド・ウイツカ

ムよりリチャルド・コツクスに贈りし書翰

○上 尊ニ依れば或特別の要務を將軍様及其顧問會議より命ぜられたる爲め、トノ殿は三四ヶ月内に江戸に赴くべし。此間に將軍様は其父の駿河及其他の地の兵士全部を召し、其父に對して爲し、如く、彼に仕ふることを強ひんとして彼等全部を江戸に呼びたり。其處までは彼等は、大に市を増大して此十二ヶ月内より其昨年ありしよりも二倍大なるべし。○下

是頃、築土明神社牛込門内〇市内。ヨリ牛込築土〇市内ニ移ル。〇下

築土明神社
轉移

社書上。續府内備考。改撰江戸志。東京通志。附隨轉移シタル市街有リ。〇文政町

附隨市街轉移
築土明神社
轉移事蹟

築土明神社轉移 城濠浚鑿ノ工役ニ基ク者ノ如シ。寺社書上之ヲ元年ニ繫ク。南向茶話之ヲ寛永中トシ、江砂餘礫寛永九年トスルハ何ノ據ル所有ルヲ知ラズ。

牛込築土明神社

一、拜領地四千貳百坪之内六百坪社地、三百坪古門前地、残り三千三百坪寺地。右往古之平川御門内ニ鎮座御座ハ處、天正七己卯年二ノ御丸御普請ニ付、牛込御門内ニ替地被下置ハ處、又々元和元乙卯年外堀御普請ニ付、御用地ニ相成、牛込只今之地ニ替地拜領被仰付、追テ相應之地見立相願可申旨、被仰付ハ由申傳ハ、尤牛込御門内米倉家屋敷邊、以前之社地ニ御座ハ。今ニ神木等屋敷脇往來ニ有之ハ。去寛政十三年社地寺社御奉行所ニ奉願上ハ處、御取調等有之ハ間、追テ此方ハ御沙汰可申達趣、被仰渡ハ、御掛脇坂淡路守殿。〇安

一、築土大明神木座像。御長七寸。 一、躰。御作。不知。

右之人王六十一代朱雀院御宇平親王將門遷化也。

一、御神躰眞鍮六角御寶塔 一、基。

市街恢弘時代

右の密物。

一、妙見尊伽羅佛立像。御長貳寸貳分。

一、髯。

裏面曰、

奉造立伽羅佛妙見尊

于時明和九辰年五月從佐州飯府之刻風波渡船沖中爲漂泊一晝夜半佛天之加護受無恙就令上陸依之此尊像築土社内ニ奉安置者也。

菅沼新三郎定堅別當七世實運代

一、田安稻荷社間口九尺。奥行貳間。

一字。

御神躰御幣。

牛込御門升形之上ニ御座由。尤以前社地御座節、境内末ニ御座由。引殘置也、今ニ當寺持御座由。

天台宗 善龍山楞嚴寺

右依勅宣所叙用也。宜承知給之由狀、如件。

別當法師權大僧都大和尚位宣慶 在判

天文九年十一月廿六日

武藏國豐島郡江戶平川
津久戸大明神別當
天文九年十一月廿六日

善龍山楞嚴寺常住

右之通ニ御座由。

一、中興開山法印源秀 寛永十八年巳八月遷化。

一、正保四年東叡山二世公海御判物被下置由。寫。

武州豐島郡江戶牛込村

善龍山楞嚴寺成就院津久戸大明神別當職相兼、依爲古跡、從先代雖汲東叡山之末派、未受證判之帖、因茲投一簡、彌屬末寺、訖者自今以後、不肖本地之下知、天下安全之御祈禱、社役勤行等、不可有怠慢者也。

正保四年極月廿三日 毘沙門堂公海判

右之通御座由。○下。

文政寺社書上

氏子町名左之通

牛込御門内土手通

表四番町御用屋敷

九段下り清水御門外

御厩村松家

生板橋

飯田町

渡邊家柳生家

小石川御門内

市街恢弘時代

松平讚岐守上屋敷。土手通牛込御門内。

市ヶ谷船ヶ原町表裡一町。神樂坂上。

本多修理殿屋敷。

續府内備考

社傳云。天慶三年相馬將門誅せられて後、其首武藏國江戸平川觀音堂あり、是を津久戸明神と稱り奉る。文明の頃、太田入道道灌山王津久戸を鎮守として平川に造立す。按るに、道灌日記も、文明十年六月廿五日河越の氷川後世人の作にて信用しかさき事多し。太田系圖も、此の日道灌江戸の城に於て、山王權現の堂荒神の宮菅巫相の社を建すと云ふ。此社を建すと云ふは沙汰なし。其後天正七年に至り、田安の内遷座す。按るに、當社ハむかし平川あり、文中の文。又四十餘年を経て、元和の頃、別當靈夢をうけて今の牛込の地にうつせり。此遷宮の時、神輿牛込揚場坂にして甚重くして、此所にして供物を備へ、神樂を奏したれば、本のごとく御輿あり給ひ、當社へ遷宮まじはる。此時より揚場坂を稱らためて神樂坂とい申せし也。按るに、揚場年中に江戸川船入さふりしよりの名なるへし。此當社往古御城の内遷座すし故神殿御建立すしとあり。紫一本云、牛込御門を入て田安と云、此臺も田安明神の社あり、是ハ平親王將門の首と云、永享記も、太田道灌武州入間の

郡川越の城の乾の方より氷川明神あり、其社よをそらへ江戸御城の乾より津久戸大明神をいとひ申と云、今津久戸大明神ハ牛込あり、田安明神を此地より移し奉りし事遠きよあらま、初光より津久戸大明神と申たるを、田安の内より御社ありし故、所の名をかたとす。田安明神と申せし由、津久戸の名ハ久しき事にして、此山より正八幡の社あり、津久戸八幡といふ、左りれの右の永享記も津久戸明神と書たるハ、永享の時代より書たるよりあらま、御入國以後より書たるを遷すと云云。按るに、一本ハ解る所より、津久戸八幡の名久しく、遷るへし。既ハ天文の文書にも津久戸の社あり。神社畧記も云、社説も神田明神とあるは、八幡ハるへりて後、此名あるへし。神田畧記も云、社説も神田明神とおおしきなり、當社の今の三の丸の地は鎮座ありし、天正十七年牛込御門の内、今米倉家第宅の地より移し奉る。按るに、此社の舊地ありて、近き頃まできたり、此邊も田安。然るに後水尾帝の御宇、元和二年今の所より遷座ありし。此説上の異なる處ハ、又の同し。南向茶話といへる書も云、築戸明神ハ諸記よとへたる如く、往古平川村よりありしを、その後牛込御門の所へ遷座ありて、寛永年中外廓いてきし頃、今の所へ又遷座ありし。按るに、寛永年中の遷座ハ神田の社と同社ありし。神田も古くハ駿河臺の邊よりありしを、元和二年外曲輪の外へうつせりしと云い、ハ、同時の事あるへし。ハ、當社も元和二年今の地より市街恢弘時代

つされしといふ傳へもあるをや。此年外曲輪内の神社佛寺ハもく外よりつされしと云ゆ。國花万葉記云、江戸牛込築土明神ハ、社地よその高丘よて、町屋を眼下よ見る景地あり、八幡社からひ建り、むらし水戸の讃岐侯御建立のよし、尤美匠あり。按るに、此説ハ牛天神の社と混ぜしにハあらまや。

改撰江戸志

津久戸社 所祭神 同神田。在江戸牛込津久戸。社説曰、當社始ハ今ノ三ノ丸ニ鎮座アリシカ、天正十七年牛込御門ノ内 今米倉保教 第宅之地也ニ移シ奉ル。然ニ後水尾帝ノ御宇元和二丙辰年亦今ノ所ニ遷座、地主神ハ則八幡太神也。土俗傳言、當社ハ平將門ノ首ヲ祭、故ニ始ハ血首大明神ト号ス。後ニ津久戸ニ改ト謂。余想ニ、將門ノ首ハ、伏誅ノ後、京師ニ登セ梟首セラル、此所ニ祭置ケルモ不審。復按スルニ、一書ニ當社ヲ築土ト記セリ。殊ニ享保六年三月四日火災ノ後、新ニ建立ノ鳥居ノ額ニモ、築土大明神ト書ス。因謂、大己貴命ヲ大國主大國天、亦國作大己貴命ト申奉ルモ、國土ヲ經營ノ御神徳有ニ依テ也。然ラハ築土ノ社号正ニ理アルニ似タリ。又此邊ヲ小日向築地下云、中古ヨリ此地ニ鎮座ノ神ナレハ、自然ニ築土明神ト稱シ奉シナラン、血首ノ故ニハアラサルベシ。所ノ名ヲ以テ神号トスル事、間々多シ。然ニ津久戸ニ書替、將門ノ首ヲ以テ附會スルニヤ。神田ヲ

以テ骸トシ、築土ヲ以テ血首トス。神田ハ大己貴命也ト。當社ヲ同神トスル時ハ、大己貴命ナル事決セリ。江府神社畧記

津久土明神社 牛込御門の外 別當善龍山成就院

當社の神田大明神と同社也と云。祭日九月十五日。

元の鎮座ハ田安あり、よつて田安大明神といふ也。永享記太田道灌入間郡三芳野の郷河越の城ハ乾ニ津久戸大明神をいそふとあり。問、元和二年に今の津久戸山ようつされてより津久土明神乃名ありと云、永享ハ元和より百年も前の事也、永享記ニ津久戸明神をいそふといふりし。答テ云、永享記ハ永享ハ時分書たるにあらは、御入國の後ニ書さるゆへ、津久戸といふか、永享ハ頃ハいりよも田安明神なり。又俗説ニ云、當社の將門の首をいそふ也、又赤木の明神ハ、將門の首此津久戸へ飛きたる時梢におちとほりさるゆへ、血木につきて赤木といひ、血首大明神といふを津久戸大明神といふと記せる書あり、とるまゝならず。此外江府の内ニ將門をまつるといふやしろ多し、此の將門總州ニありて近國に威をふるひ、鬼神のおとく人民おそれしうへ、貞盛秀郷討手にくとり、總州よてとらひ、武州への將門の弟將頼出張して

秀郷比弟千晴と合戦し、當國近國ともに騒動のうへ、將門うとれて、その首京都へのほる道筋をせり、當所を通るに人を取さぶおそれて、おかくれおどしけると也、折ふしそのころ天死大キよとやる。これ虐鬼なまを、まさしく將門のたゞりなりとて、所々小祠立、將門の靈をまつり、或は諸社の拜殿よかといひしと也。將門居住の址は、下總國相馬郡守谷と云所よ有。本丸二ノ丸 ナト有。うじ るは太沼也。 江戸が十里。

江戸砂子

八幡神社津久土神社 牛込區築土八幡町ニアリ。中 同所津久土神社アリ。素盞鳴尊ヲ祀ル。社傳云、文明十年戊戌太田資長之ヲ平河ニ創建シ、江戸城鎮守トナシ、天正七年己卯田安ノ地ニ移シ、田安明神ト稱シ、元和二年丙辰今ノ地ニ移シ、津久土又築土明神ト稱ス。

東京通志

附隨市街轉
移事蹟
牛込成就
院門前

附隨市街轉移 津久土明神社轉移ニ伴ヒテ轉移シタル市街有り。
牛込成就院門前 其一也。

一、牛込成就院門前之儀、津久土明神元牛込御門内ニ有之候處、元和貳辰年御用地ニ相成、當所の替地被仰付候ニ付、右社地内三百坪之場所、古門前地ニ御

市谷船河
原町

市谷船河原町 相傳ヘテ築土明神社遷徙ノ時轉移スト爲セバ、是時ノ事ナル可シ。

市谷船河原町

一、町名之起草創人之儀相知不申、往古の築土明神氏子ニ有、平川御門内ニ罷有、御城内ニ相成、右社遷座、町内之儀、牛込御門内土手近所、代地被下置、住居仕、所、後年猶亦御用地ニ被召上、船河原橋、只今久世伊勢守様御屋敷邊ニ有、代地可被下置、旨被仰渡、市谷田町三丁目續ニ有、奉願上、代地被下置、當場所の引移、今以築土明神之氏子ニ有、御座、前書往古之起立引地之年代之儀、相知不申、町名之儀も、當所の引移、後、船河原橋、寂寄ニ付、唱始、以哉、委細相知不申、往古之町名是亦申傳ニ、無御座候。

文政町方書上 市谷船河原町書上。

松平忠輝邸
收公

松平忠輝邸
收公事蹟

七月五日甲戌元和二年紀元二二七高田越國城主松平忠輝總介ノ封
ヲ收メテ勢州淺間ニ配ス。江戸邸ノ收公亦是時歟。東武實錄。台徳院殿御實紀。慶長

松平忠輝邸收公 松平忠輝是ヨリ先元和元年九月十二日譴ヲ蒙リ、二年七月
五日封ヲ除テ勢州淺間ニ配流セララル。

七月元和二年越後少將忠輝上總越後國及ヒ信州河中島ヲ沒收セラレ、勢州淺間
ニ配セララル。是ヨリ先キ大御所御在世ノ時、近藤平右衛門秀用後石見守ヲ上
使トシ、命有テ曰ク、攝州大坂ノ役、江州守山ニ於テ將軍家ノ從士長坂血鎧九
郎ヲ理不盡ニ誅戮ス。我レ在世ノ時ニ於テ將軍家ニ對シテ違變ノ志アリ、況
ンヤ、薨去ノ後公儀ヲ輕セン事覺束ナシ、次ニ京師ニ於テ參内ノ時、供奉ノ儀、
虛病ヲ構ヘ異儀ニ及ヒ、剩エ其日加茂川ニ遊獵スルノ事、且又歸國ノ暇ノ夏、
其ノ命ヲ待タス、北國ノ本道ヲ避ケ、隱道ヲ經テ北越ニ歸ル、脇道停止ノ事兼
テ仰出サル、處ニ、其制法ヲ破ル、其上過分ノ采地六十万石ヲ宛行ル、ノ處
ニ、私ノ奢ニ金銀ヲ費シ、軍用乏キノ旨ヲ訴ル、旁以不義ノ至也、先ツ長坂ヲ殺
ス下手人ヲ速ニ出スヘキノ由ヲ命セララル。忠輝迷惑シテ長坂ヲ殺ス事百餘

人ノ步卒ニ下知シテ是ヲ殺サシム。今誰ヲ以テ下手人ニ定メント是ヲ案シ
煩フ。時ニ山田將監富永大學助進ンテ君ノ爲メニ下手人ニ出テ忠死ヲ遂ン
ト請フ。然ル處ニ大坂ノ役忠輝ニ從ヒ供スル步卒ノ中三人下手人ニ出テ死
ナン事ヲ強テ請フ。是ニ依テ小澤水右衛門松岡清右衛門ヲ彼三人ニ差シ副
エ駿府ニ赴カシメント欲スルノ處ニ、大御所ノ老臣等飛使ヲ越後ニ馳テ忠
輝ニ告テ云ク、大御所ノ御憤リ以ノ外ナリ、此上ハ速ニ領國ヲ退キ東國藤岡
ニ蟄居シテ年ヲ經テ免許ヲ歎キ訴エラレ宜シカルヘキノ旨ヲ達ス。是ニ依
テ下手人ヲ駿府ニ遣スニ及ハズ。忠輝頓テ藤岡ニ閉居ス。其節大御所御不豫
ニ依テ、在國ノ諸大名各駿府ニ來リ集ル。時ニ忠輝本多上野介正純ニ内意ヲ
窺テ云ク、大御所御不豫ニ依テ御城下マテ參府セン事御勘氣ノ身トシテ其
憚リ多シ、三島蒲原ノ邊マテ竊ニ來テ御不例ヲ窺ヒ奉リ度ノ旨ヲ云ヒ遣ス。
正純私ノ思慮ニ及ヒ難キニ依テ、此旨ヲ大御所ノ台聽ニ達ス。其意ニ任スヘ
キノ由ヲ命セララル、ニ依テ、正純此御旨ヲ奉テ蒲原邊マテハ來駕クルシカ
ルマシキノ由ヲ返答ス。是ニ依テ忠輝急ニ彼驛マテ來ルノ處ニ、日ヲ經スシ
テ大御所薨御アリ、一七日過テ後公ヨリ上使ヲ忠輝ニ賜テ曰ク、大御所御在

世ノ時御勘氣赦免ノ事吾レ是ヲ度々愁訴スルト云ヘモ敢テ御許容ナシ先君赦サレナキノ上ハ其憚リ有リ早ク藤岡ニ歸リ百ケ日ヲ經テ江戸ニ參府スヘキノ由ヲ命セラル。是ニ依テ忠輝藤岡ニ歸ル。公江戸ニ還御ノ後松平半四郎重則後内膳正ニ任シ又大隅守ニ改ム。近藤平右衛門秀用ヲ上使トシテ藤岡ニ赴ムカシメ命有テ曰ク駿府ニ於テ仰出サルル趣參府ノ事百箇日ヲ經ン事ハ餘リ延引ニ及フ先ツ江戸ノ別墅ニ來テ御旨ヲ待ヘキノ由ナリ。忠輝命ニ從ヒ江戸ニ來テ別墅ニ蟄居ス。時ニ命有テ曰ク領スル所ノ越後信濃兩國ヲ放サルノ間勢州淺間ニ退キ閉居スヘシは大御所ノ御遺命タルノ故是非ニ及ハサルノ由台命ニ依テ忠輝言テ云ク遠ク勢州マテ赴クニ及ハス願クハ御赦ルサレヲ蒙リ此地ニ於テ生害ヲ遂ケ大御所御在世ノ間ノ御憤リヲ止メ奉ラント請フ。公此旨ヲ聞召シテ敢テ其儀ニ及ハス一端ノ御懲シメノ爲メニト仰置ルノ事ナリ御旨ニ任セ早ク彼地ニ赴クヘキノ台命ニ依テ此上ハ忠輝遲滯ニ及ハス江戸ヲ發シテ勢州ニ赴ク。時ニ相國寺ノ茶入浪游ノ刀是天下ノ名物ナリ差シ上ケ度ノ旨老臣等マテ是ヲ達ス。公命有テ曰ク言フ所ノ二ツノ物ハは大御所ヨリ汝ニ賜ル所ノ物也何國マテモ身ヲ放サス是ヲ持

ツヘキノ旨仰ニ依テ忠輝爲方ナク彼二ツノ寶物ヲ以テ土井大炊頭利勝ニ預ケ置キ從士僅ニ十二人。榎木左京千本掃部久世左近長谷川權右衛門近藤十郎左衛門富永九兵衛戸田采女山田大藏明石志摩戸田角彌河村七左衛門淺井左内等其外歩卒少々是ニ從フ。然リト云ヘ共宿々關々ニシテ江戸ヨリノ御下知タルノ由ヲ云テ或ハ二人或ハ三人所々ニ於テ押留ルノ間相從フ者五六輩ニハ過キス。途中ノ警固トシテ近藤平右衛門秀用ヲ差シ副ヘラル。忠輝配所勢州淺間金剛證寺ニ至テ閉居ス。淺間山ニ於テハ魚肉ヲ食セス。平右衛門秀用是ヲイタハリ江戸ニ歸テ台命ヲ窺ヒ金剛證寺ヲ改メ麓ニ下リ妙高菴ニ居ラシム。其後中山勘解由ヲ上使トシテ勢州淺間ニ赴ムカシメ配所ヲ改メ飛驒國ニ移サル。其後又飛州ヲ轉シテ信州諏訪ニ移サレ蟄居ス。越後國檢使トシテ佐久間河内守横田甚右衛門山田十太夫山本新五左衛門村瀬左馬助山代宮内等越後國ニ赴ク。信濃國檢使トシテ安倍四郎五郎是ニ赴キ河中嶋四郡ノ事ヲ沙汰ス。
東武實錄
五日元和二年七月上總介忠輝朝臣淺草の別業編年増上寺塔中ニ今藩翰譜に從ふ。に近藤平右衛門秀用神尾刑部少輔守世御使して大御所御遺命をれば伊勢國朝熊にうつるへしと仰下さる。朝臣承はられ臣何の異心ひてかかく遠謫せらるへきおほえなし罪あらんにはこのまゝに首をはねらるへきなりと答へらる。兩使

立かへりこの旨をかくと聞え上しかばゆめく、志かるへからず、こはまばしその罪を鳴らし懲しめ給ふへき爲のみなれば、御遺命のごとく朝熊に赴かるへしと、再ひ仰下さる。朝臣の上はいなみ奉るべきにあらずとて、終に配所へ赴くへきにそ定まりける。〇下

——台徳院殿御實紀

忠輝江戸邸ハ、慶長江戸圖龍口北側南北七十間ノ地ニ、河中島少將ト記ス者是也。往古江戸繪圖、松平伊豫〇忠ニ作ルハ、是時收公セラレ、後福井侯邸ニ賜ハリタル者トス。台徳院殿御實紀淺草別業云々ト有リ、今其所ヲ知ラズ。

六日乙亥

〇元和二年(紀元二二七六)年七月〇乙亥、三正綜覽。

是頃、朽木

領主朽木元綱〇河内守。等

邸宅ヲ江戸ニ賜フ。新ニ駿府

ヨリ來リタル人々也。〇本光國師日記。

朽木元綱等賜邸

駿府詰ノ士新ニ江戸ニ來リタル者、夫々邸宅ヲ賜フ。事、本光國師日記ニ見ユ。

一、同

〇元和二年七月。

六日、細越中殿

へ返書遣ス。案左ニ有。〇中

一、駿河ハ參加諸奉公衆何もそや被置髮ハ、其内朽河州〇元綱、〇牧齋。ハ永々入道

之由ニある。朽河州も家屋敷拜領被申ハ、妻子を引越ニ駿府へ昨日五日被來ハ、日野殿〇輝禪高、〇山名、佐中書あとも、家屋敷拜領ニある。〇中

七月六日〇元和二年。

細越州様〇細川忠興。

尊報。

金地院

一、八月十日

〇元和二年。

細川越中殿へ書狀遣ス。案左ニ有。〇中

此比ハ上方ハ大工衆餘多下申ハ、駿府ハ御越ハ女中様方之御屋敷作事、近日相始申由ニハ、右之御衆之屋敷ハ、安對州〇安藤重長。之など、爰元ニて神田之屋敷普請、これ御取籠之躰ニ相見へ申ハ、猶奉期後音ハ、恐惶謹言。

八月十日〇元和二年。

細川越中守殿

人々御中

〇下

内朽木元綱邸ハ、往古江戸繪圖大名小路、京極丹後、有馬玄蕃邸ノ東隣ニ、くつ木卜齋ト有ル者是ナル可ク、山名豊國宅ハ龍口ニ山名禪閣ト有ル者是也。日野輝資〇唯、其他ハ那邊ニ賜宅シタルヲ知ラズ。

寛政呈譜其他左ノ如ク記ス者、亦是頃ノ轉移ナル可シ。

大岡正信 寛政呈譜ニ、

正信〇大岡。虎之助、彌左衛門。

市街恢弘時代

朽木元綱等賜邸

朽木元綱等賜邸事蹟

朽木元綱

日野輝資、山名豊國、佐中書

大岡正信

中野笑雲

中野笑雲 台徳院殿御實紀ニ、

晦日○元和二年五月○中畧。茶道頭中野笑雲駿府より來り拜謁し、江戸にて宅地を下さる。

近藤政成

近藤政成 寛政呈譜ニ、

政成○初高政。初名七郎太郎。信濃守。

同和○元二辰年四月十七日就薨御、○徳川家康江戸表に引越申し、其節神田橋御門

外居屋鋪被下置ハ段、出頭衆秋元但馬守殿被申渡拜領仕ハ。

神尾守世
同元勝

神尾氏 阿茶局飯田氏は年屋鋪ヲ竹橋内ニ賜フコト、下記ノ如シ。其子神尾守

世○初久守。刑部少輔。神五兵衛。養子同元勝○岡田内記。後神尾内記。備前守。ノ屋鋪ニ賜フ、何レノ年ナルヤヲ

知ラズ。守世ハ元和元年祿三千石ニ至リ、番頭ニ任シ、刑部少輔ニ任ズ。元勝ハ同

二年九月世子家光ニ附屬シ、十番斬ノ間番士筆頭ノ一人ト爲ル。或ハ是頃ノ給

賜ニ非サル歟。今假ニ此ニ附記ス。内往古江戸繪圖神田鎌倉町阿茶局屋鋪「二位サマ」

リト有ニ隣リテ「ちんの五兵衛」ト有ル者之ヲ守世屋鋪トシ、井上新左衛門屋敷ニ

隣リテ「岡田内記」ト記ス者之ヲ元勝屋鋪トス。神尾主水○元書上ニ、

年號月日不知、私先祖備前守元勝代、小川町ニ有る三千坪屋敷拜領、且上野ニ

有る壹万六千坪下屋敷拜領。大猷院様御代年號月日不知、上野下屋敷御用ニ

付被召上旨、松平伊豆守殿被仰渡、尤替地場所見立可相願旨、被仰渡ハニ付、

芝海手新錢吹ハ跡ニ有る三千坪之場願之通拜領被仰付。天明三亥年若狹守

元珍、小川町屋敷御用ニ付被召上、替地之儀願ハ様被仰渡ハ處、相應之場所

も無之、芝新錢座屋敷海手之儀ニハ間、海地築立申度段、願之通被仰付築立、

當時八千坪程ニ相成、住宅仕ハ。

ト有リ。謂フ所ノ小川町屋鋪即チ鎌倉町ニ在ル者ナル可シ。上野下屋鋪ハ、寛永

寺創建ノ日收公セラルルコト、下ニ之ヲ記ス。

奥女中ノ轉移シタル者ニ、阿茶局飯田氏有リ。

この月○元和二年四月○中畧。阿茶の局清雲院は、江戸に參り、阿茶局には、竹橋の内にて

宅地下され、中野村にて厨料三百石給ひ、清雲院にも同所にて五百石給ふ。

—— 台徳院殿御實紀

從一位阿茶局

○上○徳川家康。薨御。以後江戸に罷越、竹橋御門内ニ有る宅地拜領、於武州中野村

市街恢弘時代

阿茶局

三百石被下。○中其後天樹院様御用ニ付、屋敷差上、神田橋鎌倉町ニ奉拜領
仕。○下 寛政呈譜

往古江戸繪圖清水門内「一位」ト有ル者是也。○正保江戸圖「天樹院様」トス。鎌倉町ニ移リタル者ナル可シ。同圖
又神田鎌倉町ニ「一位サマ」ト記ス。神五兵衛○局宅ニ隣ル。阿茶局ハ、家康ノ侍妾、
家康薨スルヲ以テ江戸ニ徙レルモノ、以貴小傳其他ニ、

阿茶此局ハ、飯田筑後といひしをのゝむすめにて、今川の家人神尾孫兵衛忠
重り妻なり。天正五年七月忠重にをくまて、お暇しき七年東照宮ニ仕へ奉り、
阿茶此局といふ。その子五兵衛。つりに六歳あるをも長丸君の扈從よき
る。寛永の家譜ハ、五兵衛守世、天正十一年をじりて見參す。十五歳ふりと云る。家の傳ふる所あやまりある歟。此の局ことに出頭せし人にて、おなかと御陣中をめしくせらるゝ事のことなり。慶長十九年此冬、大坂の御陣も常高院殿よりして城中より、御あつりひの事おぼしめすは、にまおかせざるよて、此局此の才覺れやと云られり。東照宮神さりはせし、のち、江戸にまいりなれり。竹橋のうちにして宅地をたふそり、寛永の地
圖ハ清水門のうち一位様と云る。せしハ、この女房の事なり。また中野村にて三百石の地あてをこゑたる。
元和七年の六月台徳院御所の姫君うちよまいらせ給ふ時、かとしきあくも

御母代よまいりて都にわたり、從一位に叙せられしり。世は神尾一位と
ぞ申々る。されど寛永の系圖よと、此の事見へず。たゞ一位と号すと云るした
と。

寛永九年台徳院御所かくまさせ給ひしは、局かしらるゝして雲光院とい
ふ。これよりさき慶長六年○十六年歟此ころ、東照宮の御ゆるしをえて、神田乃伯
樂町一寺をいとあみ、龍徳山光嚴教寺雲光院と名をたたりしり。今こつ
から此号をかくゑいふなるべし。此寺明暦の火後、神田田所岩井町よりうつり。かく
て年つもりて八十三歳、寛永十四年此正月やまひりきりよおよふと聞しめ
して、酒井讃岐守忠勝朝臣してとせらせ、望む事ほらそやす處しと有しに、
雲光院ニ寺領たほそらむ望みゆ。さらはとて五十石此地よせられり。
この月廿二日よそ終りある。すかそち雲光院にて後わさありしに、御とふ
らひよ白か手千兩たまされり。五兵衛守世をまきりよ登庸せらせ、從五位下
此刑部少輔よある。母此のまといひあから、其身も器量ほりし人ありとぞ。弟
に内記元勝といひしは、尼公の養子よて、まことの松平周防守康親り家人岡
田竹右衛門り子ありしを、尼公布施兵庫か女よ福せせて、子とせられしあり。

これをまきりにかりいてて、寛永十五年乙五月町奉行の職に補せられ、叙爵して備前守に任す、寛文元年致仕し、同き二年入道して宗休と号す。世に三老人といわれし一人ありとぞ。守世元勝子孫おほし。——以貴小傳

雲光院殿阿茶局。從一位。

飯田筑後直政世住甲州。武田氏仕。女、神尾孫兵衛尉忠重駿州今川氏爲藩。爲妻。神尾氏數家之譜。御外戚傳。柳

營婦女傳。以貴小傳。飯田氏岡田氏譜。由縁隨筆。

弘治元年卯二月十二日生。

天正五年丁丑七月十五日、忠重死爲寡婦。

同七年己卯五月被召出、改阿茶局。從此以後、所々御陣供奉。

同十二年甲申、尾州長嶽御陣之節、懷胎於戰場、流産。

同十八年以後、御隱密之御用向、從與執政に傳達蒙。

慶長十九年甲寅、大坂冬御陣御和睦御使、到城中調之。

元和二年薨御以後、於竹橋御門内賜邸。今爲田安内。後於鎌倉街賜邸住栖。此時有

命不薙髮云。

同七年辛酉六月十八日、東福門院御入内之節、爲御母堂代、御同車上洛。以後

欲叙從三位辭而不受之。仍再依御推叙從一位。又爲御産之時護而在京。

寛永九年台徳公大猷公御上洛之節供奉。

同十四年丑正月廿二日逝去。爲御香奠。葬馬喰。雲光院。寺後移深川藪之内、減境内過半坪數。依明曆

大火。回。雲光院從一位尼公正譽大法女。附五十石。神尾氏於新錢座之邸中、建戒祿也。光明寺山中、創清心院、建碑置牌。幕府祚胤傳

清雲院

清雲院長谷川氏有リ。清雲院ハ、

十一月朔日寛永二年。清雲尼寛永系圖。伊勢北畠家士進藤加賀守義俊か子長谷川三郎右衛門藤直の女。慶長二年より神祖につかへ元和二

年剃髮して尼となり、三丸に宅地を給ふ。(家譜)養子長谷川左馬助廣清はじめて拜謁し、采邑四百石を

給ふ。寛永系圖。尼はじめ武州中野邊にて五百石采地賜はりしが、此ごろ辭退せしかば、又甥を養子にせしめられしあり。——大猷院殿御實紀

藤直三郎左衛門。長谷川。

重吉源右衛門。

藤廣左兵衛。

女子

東照宮の御側近くつかへたてまつり、薨御の後、剃髮して清雲院と号し

市街恢弘時代

武藏國中野にをいて五百石の地をたまふのち請むねにまかせられ、あらためて現米百石月俸十口を賜ふのち姪左馬助廣清を養子とし、また姪五兵衛廣直か孫三郎左衛門藤該を養子とし、各家を興さしむ。

藤繼忠兵衛。頼也。

——寛政重修諸家譜

清雲院殿於奈津。

長谷川三十郎藤原藤直勢州北畠家舊臣。世女。長谷川氏家譜。

慶長年中、奥勤蒙寵幸。

元和年中於御他界爲尼於武州中野而賜五百石於三之丸脇賜第、後又移小

石川御門内邸住栖之。

寛永九年御遺金賜黄金百枚。

萬治三年九月廿日死。年八十。葬傳通院。勢州渡會郡於山田。建清雲院、建碑置牌、且當院奉安東照宮。依之建下馬下乘矣。

清雲院心譽光質大禪定尼。

——幕府祚胤傳

英勝院

英勝院太田氏有リ。往古江戸繪圖一位様田飯。隣リテ榮松院様ト有ル者是ナル可ケレバ、同時ニ屋敷ヲ賜ヒタル者歟。

女子○徳川家康女。

名市姫。母太田新六郎源康資女。

名勝。天正六年戊寅十一月九日生。後爲尼号英勝院。寛永九年壬午八月二十三日卒。年六十五。

法名長譽清春。

徳川家康第四女○御生母太田氏於梶方。英勝院殿。

——源流綜貫

——家譜畧

○太田資康女。

天正十八年八月東照宮關東ニ御入國ありて、名家の諸士をめさるゝとき、兄重正京師にありしにより、女なれども道灌が子孫なればとてまづめし出さる。しかれども年僅に十三なりしかば、老女安西をしてこれを介抱せさせたまひ、つねに御かたはちかくみやづかへし、梶とめさる。慶長五年關原御陣のとき御供にまいらんことをこひたてまつり、馬にのりてしたがひたてまつる。時に合戦御勝利なりしかば、のち御陣營の地を勝山とあらためさせたまひ、梶も勝と稱すべきむね御誕あり。後姫君を産たてまつるといへども、四歳にして早世あり。十五年七月台命により鶴君後水戸中納言頼房卿。をやしなひまひらす。八月又おほせをうけて姪資宗を養子とす。十六年三月御上洛のとき、資宗とともにしたがひたてまつり、四月二條城に御逗留のとき、御外孫振姫君池田三左衛門輝政が女。をやしなはしめられ、松平總次郎後松平陸奥守

宗に嫁せしめらるべしとの上旨あり。後大坂兩度の御陣にしたがひまいらせ、元和二年四月薨御のち、尼となりて英勝院と號し、江戸に參り代官町に居宅を賜はり、これに住し、よりより營にのぼりて台徳院殿にもまみえたてまつり、九年大猷院殿御代繼せたまふのち、ことに御願あつく、常に御前にめされて恩惠を蒙る事他に異なり。これ英勝尼曾て東照宮の御かたはらに侍したてまつりて、竹千代君と申せし御時より、御嗣とならせたまひし後までも、厚くいたはりたてまつりし事をおぼしめたまふに、よりてなり。寛永八年十一月十六日水戸中納言頼房卿の息女絲姫を養ひ、九年五月大猷院殿の御養女となされ、後松平筑前守光高に嫁せしめらる。これを大姫君と稱す。十一年四月又頼房卿の六女小良姫をやしなひ比丘尼とし、沙彌と稱す。六月鎌倉扇谷管領屋鋪の前に道灌の舊跡ありとき、菩提寺を創立せん事をこひたてまつりしに、其所にをいて五貫八百五十文餘の地を賜はる。十二年資宗が千駄木の別業に幽居せしむ。十三年十一月扇谷の精舎なる、これを英勝寺となづく。曾てやしなひをきし比丘尼を住職となし、清因と稱す。導師は増上寺大僧正天譽たり。十四年十一月二

十日相模國三浦の池子村にをいて三百石の地を寄附せらる。十八年九月病にかゝる。しばし御使を下されてたづねられ、二十五日中根壹岐守正盛をして問せたまひ、金三千兩を賜はる。二十六日宮崎備前守時重をよび春日局をつかはされ、官醫をめし集めて其藥を議せしめたまふ。十月四日資宗を營に召れ、日夜英勝尼が枕席にありてしばし病狀を言上すべき旨おほせ下さる。十一月四日大猷院殿千駄木の住所に渡御あり、病床につきてたづねさせたまひ、養生の數條を御みづから書せたまひしを御懷よりとり出させたまひ、御手づからこれを賜ひ、また黄金二十枚、段子三十卷を恩賜せらる。十九年五月二十一日嚴有院殿天樹院御方の館に入れたまふの時、禪尼が許に渡御ありて織物若干をたまふ。八月十四日大猷院殿禪尼が病おもきよし聞しめし、ふたゝびならせたまひ、御懇のことゝもいふばかりなし。禪尼伏て御めぐみのかたじけなきを拜し、中にも若君のさきにならせたまひうるはしくおひたゝせたまふを見たてまつる事、老後のおもひ出何事かこれにしかんと言上せしかば、尤におぼしめさる。日増に成長せさせたまへば、たとひ日毎になりとも成せたまはんやうにはから

はせたまふべし、御みづからしばくたづねたまはば、却て病軀の煩も多かるべしと、なぐさめさせたまふ。このとき頼房卿御側に候せられ、資宗も侍座したてまつる。すでにして御座をうつさせたまひ、岡本玄治を召れ、療養の事を問せらるゝに、病體安からざるのよしを言上せしかば、しばらく御落涙にをよばせたまふ。やがて松平陸奥守忠宗をめしてあつき御誼あり、又仰のこされし事ありとて、資宗をめされ、上意を傳へさせたまふ。二日の夜禪尼が病急なるよし上聞に達せしかば、ならせたまふべしといへども、夜陰なりとて老女彦をつかはされ、堀田加賀守正盛、松平伊豆守信綱、阿部豊後守忠秋、阿部對馬守重次等、馬をはせて來り病狀をさひ、これを言上す。御醫師久志本右馬之助常諄其餘數輩はせ集りて醫療を盡す。二十三日卒す。年六十五。清譽英勝院と號す。鎌倉英勝寺の山中に葬る。卒するの一日、大猷院殿御膳に魚味を禁せられ、數日放鷹を廢せらる。二十七日井上清兵衛正次を英勝寺につかはされ、賻銀百枚をたまはる。九月十四日水戸頼房卿の許に阿部忠秋をつかはされ、禪尼平常の志願たれば、英勝院に宸翰の額を御執奏あるべし、また寺領も御厨料に混じたると歎き申せし

により、百二十石をくはへられ、池子村四百二十石の地を全賜はり、壽福寺の山をも境内となすべしとおほせ下さる。このとき資宗も侍座して命の辱きを拜聽す。二十日頼房卿中將光國卿を伴ひ鎌倉に至らせたまひ、由比濱にをいて茶毘の儀式あり。増上寺大増正還夢導師たり。資宗、資次これにつらなる。又僧侶百餘口を英勝寺にあつめて千部經を轉讀せしめらる。松平伊豫守忠昌、松平陸奥守忠宗嫡子越前守光宗等參詣す。其餘尾張大納言義直卿、紀伊大納言頼宣卿、また御譜第の諸大名御家人に至るまで、使をつかはして賻銀を備ふ。二十一日池田帶刀長資を鎌倉に下され、英勝寺領四百二十石の御朱印をたまはる。二十年八月二十三日一周忌の法會を行ふのとき、吉良若狹守義冬を上使として後水尾院宸翰の額英勝寺の三字をたまはり、又老女伊野井をつかはされて、香奠白銀百枚をたまふ。○太田氏譜。

寛政重修諸家譜

良雲院

良雲院市川氏亦比丘尼町ニ在リタル者ナル可シ。

徳川家康子
女子

母武田氏名竹。寛永十四年丁丑三月十二日卒。葬于江戸淺草西福寺。法名天譽壽清。號良雲院。

源流綜貫

市街恢弘時代

八二七

〔徳川家康〕第三女○御生母市川氏。下山殿。良雲院。

振姫

良雲院殿於竹。振姫君母堂。

市川十郎左衛門尉昌永長イ 甲州住。仕。女。西福寺記。由縁隨筆。

市川氏女御外戚傳。柳營婦女傳。東曜。婦女傳。玉輿記。柳營女錄。

市川大隅昌永女。一本市川氏譜。

武田氏名竹。父名未詳。御系圖大全。

於竹兄平右衛門被召出。改備前守昌忠。一本市川氏譜。

按、雖諸記異說有之、唯以西福寺記、而當爲正歟。方今麾下市川氏數家之譜不載之。然則天正慶長前後、父子兄弟雖御尋有之、武田氏族滅以後、依無之、而其氏族之輩、被召出、被屬、廳下、歟。又按、兄弟之中、被召出、以後、被屬、蒲生氏、歟。又今於三家方越前家淺野氏等、有其氏流歟。寡聞未得其詳焉。

天正十年以後與勤之中侍枕席。

寛永九年御遺金賜金百枚。

同十四年丁丑三月十二日卒。葬淺草西福寺。良雲院天譽壽清大姉。

幕府祚胤傳

良雲院殿天譽壽誓大禪定尼。第二世稱譽。奉授号也。武田氏名竹姫君信玄第十四女也。信

玄舍弟秋山越前守虎康爲養女。甲亂之日、親族岩手信景信州長沼之領主也。信虎叔父武田治部少輔信美

之孫。秋山虎康本姓武田。信虎第。九男。甲亂後改姓。等、共信州長沼武州八王子等之處々隱。天正十年

姫十六歲、始神祖ニ遠州横須賀之城ニテ見、同十一年生信吉于同州濱松城。同

十五年生阿姫君於中泉焉。元和二年四月十七日神祖薨去、姫慨遂ニ薙染ノ

良雲院ト号ス。翌元和三年丁巳八月晦日阿姫モ亦城州伏見ノ邑ニ逝去。先是

慶長八年九月十一日信吉公卒ス。良雲尼公悲歎之情ニ不勝、甲州下山籠居。大

樹秀忠公聞知之、尼公ヲ召テ金城ノ東丸ニ居、寛永十四丁丑年三月十二日東

丸ニ逝去。葬于當寺。○淺草西福寺ノ條。續府内備考

内續府内備考ハ、尼ヲ武田信吉ノ生母ト爲スモ、源流綜貫其他ニ據レバ、信吉生

母ハ、

信吉

初名信義。母秋山越前守源虎康女。名都摩。稱下山殿。天正十九年辛卯十月六日卒。葬下總平賀本土寺。法名日上。号妙眞院。

源流綜貫

家譜畧

妙眞院殿於津摩。下山方。萬千代君母堂。

秋山越前守源虎康女。秋山氏譜。

市街恢弘時代

兄平右衛門昌秀、甲州武田氏敗亡以後、爲浪士、住下總州葛飾郡秋山村。大神君被爲憐、爲父養育、賜千石、且兄弟四人一同被召出。

武田信玄女、穴山梅雪之妻、而產武田勝千代。後東照公奉仕、生萬千代君。君卒後、養保科正之而爲子、号賢生院。柳澤氏家譜。

武田信玄末女下山御方。武田虎次郎譜。

見性院之、萬千代君御產母。會津見福山祕錄。

武德大成記云、慶長七年十一月八日信吉ニ水戸城ヲ賜リ、其母武田氏タルニ依、

武田萬千代トス。

信吉君、母穴山陸奥守信行室、下山梅雪ガ采地也。仍而号之。一本御系圖。

本土寺下總州小金驛東北鄰平賀村。碑銘云、秋山氏於都摩方、越前守虎康女。水戸義公改葬之、建碑誌銘。

天正十一年以後奧勤。或十年甲州御入之時被召幸。

同十九年辛卯十月六日卒。葬平賀本土寺。妙眞院日上。

幕府祚胤傳

ニシテ尼ニ非ス。

東照宮御實紀附録ハ、又見性院比丘尼町居住ノ事ヲ記シテ、左ノ如ク傳フ。

見性院

見性院と聞えしは、武田信玄入道か女にて、穴山梅雪信君か妻なりしが、武田氏亡び、穴山も又宇治にてうたれし後、第五の御子万千代丸のかたは、生母秋山越前守虎康か女なれば、さるちあみをもて穴山か家人等は、みあ万千代丸の方に附られ、武田の家号を稱せしめられしほどに、見性院をも江戸に招きは、ごくませたまひ、田安門内の比丘尼町といふに住しめられしが、この尼まうのほりまみえたてまつるときは、いつも上段より下らせ給ひ、厚く禮遇し給ひける。これも信玄か女なるゆへなるへしと、みあ人申侍りき。

見性院ノ保科正之ヲ擁護スルコト、別項記ス所ノ如シ。玉輿記、柳營婦女傳系ノ類、同シク正之擁護ノ事ヲ記シテ、信勝院一ニ信松院。ニ作ル。

朝覺院亦比丘尼町ニ住セシ乎非乎。

朝覺院殿茶阿局。忠輝朝臣。松千代君母堂。

花井氏女。御外戚傳。宗慶寺記。柳營婦女傳。玉輿記。花井氏系圖。

山田四郎八之氏。遠州金谷驛之住人。按、名乘未審歟。女。由縁隨筆。

未詳姓氏、稱花井氏。語金谷農父名ハ寡婦也。源流綜貫。

天正年中與詰。

市街恢弘時代

朝覺院

元和二年丙辰薨御之後落飾從駿府參着江戸。
同七年辛酉六月十二日卒。葬小石川極樂水宗慶寺。朝覺院貞譽宗慶大姉。

幕府祚胤傳

此外同ク比丘尼町ニ居リタル者ニ養儼院黒田氏有リ。

養儼院

於六。

黒田五左衛門丹治直陣女黒田氏家譜。

慶長中於梶之方爲部屋子奉仕。太田黒田其先住武州同北條氏以後互爲親睦。後蒙寵幸住別局。

同十九年大坂御陣御供。翌年御陣御供未考。

元和二年就御他界爲尼号養儼院其後住田安比丘尼屋敷又有故住喜連川。

寛永二年丑三月廿八日參詣日光御宮於御前而頓死。年廿九。一説云自誇容色爲長髮故。

葬日光山中養源院又傳通院建碑置牌。黒田氏香花地。養儼院鑑譽心光大姉。

幕府祚胤傳

仲間小人駕籠方給地

是月元和二年紀元二七六年七月幕府仲間小人駕籠方ニ本郷湯島市内本郷區内ノ地ヲ給ス。文政町方書上ニ據レハ、

仲間小人駕籠方給地事

仲間小人駕籠方給地 文政町方書上ニ據レハ、

本郷春木町壹丁目

本郷春木町壹丁目

一、町銘起立之儀之、往古々本郷之内ニ有、屋敷拜領以前、伊勢御師春木太夫右町近邊ニ數年旅宿致罷有、如何之儀ニハ哉、引拂ハ跡、元和二辰年七月中、御仲間御駕籠方へ、大繩ニ拜領仕、其後町屋ニ相願、中且亦町内之内、支配勘定田口岩藏殿武士地壹ヶ所之儀之、元和年中御駕籠頭猪飼治兵衛殿拜領地面ニ有之、以處、相對替ニ有、被致ハ哉、寶曆年中之頃、御小人頭川村嘉兵衛殿拜領地ニ有、其後年代不知、田口貞七郎殿と相對替被致ハ趣、引續武士地ニ有之、以得共、右武士地之譯、相知不申。

一、前書申上、以拜領地主三拾貳人性名、左之通。

- | | | | | | |
|-----|-------|------|--------|--------------|-------|
| 御仲間 | 西村五郎平 | 御普請役 | 萩原五左衛門 | 御廣敷添番 | 金指紋治郎 |
| 御仲間 | 來浦庄三郎 | 御普請役 | 柳田治兵衛 | 御仲間 | 風間勝太郎 |
| 御仲間 | 加藤權治郎 | 御普請役 | 吉田助治郎 | 御廣敷添番 | 加藤太郎 |
| 御仲間 | 太田又八 | 御普請役 | 高橋清八 | 御留守番永田權八郎組同心 | 小脇彌七郎 |
| 御仲間 | 平山庄治郎 | 御普請役 | 伊藤源五郎 | 御留守番永田權八郎組同心 | 池田幸吉 |

市街恢弘時代

本郷春木町貳丁目

本郷春木町貳丁目

一、町名之起、草創人之名相分不申、往古伊勢之御師春木太夫旅宿有之、其後春木太夫如何之譯合有之、哉、立退、跡、元和二辰年中、大繩地ニ、御中間組四拾三人に被下置、春木太夫住居之地、故春木之二字を町名ニ直し、春木町と唱、由申傳、尤地所拜領之節、直ニ町家取建、又、其後町屋出來、哉、之譯、巨細相分不申。

一、町内町家、大繩拜領地面ニ、元和二辰年四拾三人に被下置、則名前地面間數坪數左ニ申上、右四拾三人之内、御中間頭大岡金兵衛上地之内、御本

御勘定吟味下役

大熊健吉

同小野藤治郎

山口五三郎

高橋彦兵衛

平岩權之助

小普請支配久世伊勢守組

小宮山甲治郎

御書院番組米澤内藏頭同心

太田彦兵衛

御代官大岡源右衛門手付

綿貫新右衛門

御駕籠之者

藤田龜吉

小普請組土屋藏守組

森滿治郎

西丸御駕籠之者

薄井傳治郎

同支配太田志磨守組

大斧金治郎

御仲間

野金八

御仲間

小澤半兵衛

御先手小笠原平兵衛組同心

山本新平

西丸裏御門番之頭大久保彦太夫組

平岩新三郎

御駕籠之者

高橋伊之吉

丸表坊主高橋久悦、大須玄喜兩人先祖に正徳三巳年六月中被下置、其節之拜領主名前且地面間數坪數是又左ニ申上。

元和二辰年拜領之節、相分不申。

一、表京間四間、裏幅八間、裏行 東拾三間五尺五寸。西拾七間〇五寸。 坪數九拾貳坪六合。

御中間方 櫻井政五郎

元和二辰年拜領之節、御中間方山本作十郎ニ御座。

一、表京間四間、裏幅四間、裏行拾三間五尺五寸、坪數五拾九坪六合。

御中間方 山本辰次郎

元和二辰年拜領之節、相分不申。

一、表京間五間、三尺五寸、裏幅同斷、裏行拾壹間壹尺五寸、坪數六拾貳坪貳合。

富士見御寶藏番 淺岡万吉郎

元和二辰年拜領之節、相分不申。

一、表京間五間、三尺五寸、裏幅同斷、裏行拾壹間壹尺五寸、坪數六拾貳坪貳合。

御中間組頭 平山金三郎

元和二辰年拜領之節、御中間方杉山與右衛門ニ御座。

他ニ住居仕。 八三五

市街恢弘時代

一、表京間五間三尺五寸。裏幅同斷。裏行拾壹間壹尺五寸。坪數六拾貳坪貳合。

御代官佐藤忠右衛門手附
杉山軍八

(奉) 元和二辰年御中間青木佐太夫拜領仕_レ處。安永六酉年奉願相對替仕_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御中間方
小野一作

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御中間方
市江瀨平

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御先手万年七郎右衛門組同心
鈴木定六

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

小普請方假役
市江東作

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御小人目付
前田彦十郎

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御中間方
柳原榮次郎

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間三間壹尺五寸。裏幅三間貳尺三寸。裏行拾九間貳尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御代官辻六郎右衛門手附
橋本善次郎

(奉) 元和二辰年拜領之節之名前。相分不申_レ。

一、表京間七間壹尺。裏幅七間五尺八寸。裏行南拾九間貳尺五寸。北廿壹間壹尺五寸。坪數六拾三坪八合。

御中間方
永野軍平

(奉) 元和二辰年御中間櫻井伊八拜領仕_レ處。享保十五戌年奉願上相對替仕_レ。

一、表京間四間壹尺。裏幅同斷。裏行拾七間三尺五寸。坪數七拾貳坪九合。

御中間方
有賀庫次郎

市街恢弘時代

元和二辰年拜領之節之名前、平島惣左衛門ニ御座也。

一、表京間九間貳尺、裏幅九間壹尺五寸、裏行北六間五寸、南七間六寸。坪數六拾三坪九合。

小普請神尾豐後守組平島西右衛門

元和二辰年拜領之節之名前、御中間方鳥飼久左衛門ニ御座也。

一、表京間七間、裏幅同斷、裏行七間六尺、坪數六拾五坪五合。

御中間方鳥飼清左衛門

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間五寸、裏幅六間壹寸、裏行九間四尺八寸、坪數五拾八坪九合。

御中間方磯邊万吉

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間五間四尺貳寸、裏幅五間三尺、裏行南拾壹間七寸、北拾貳間壹尺七寸。坪數六拾四坪九合。

御召御馬預諏訪部文九郎組神田勇太郎

元和二辰年拜領之節之名前、御中間方増田久八ニ御座也。

一、表京間六間、裏幅同斷、裏行九間四尺五寸、坪數五拾八坪壹合。

御中間方増田熊藏

元和二辰年御中間方三橋丹次郎拜領仕也處、天明三卯年本郷菊坂臺町荒井德次郎屋敷と奉願相對替仕也。其後年月不相知、又奉願相對替仕也。

一、表京間五間四尺五寸、裏幅五間貳尺五寸、裏行南拾間五尺貳寸、北拾貳間。坪數六拾三坪四合。

御目付支配無役森源次郎

元和二辰年御中間方高田五太夫拜領仕也處、寶七戌年本郷菊坂臺町西村次郎兵衛屋敷と相對替、其後年月不相知、又相對替仕也。

一、表京間六間四尺壹寸、裏幅四間五尺、裏行七間壹尺六寸、坪數四拾四坪五合。

御中間方早野平吉

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間貳尺、裏幅同斷、裏行五間八寸、坪數三拾貳坪貳合。

御勘定吟味方改役西村九郎右衛門

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間三間五尺八寸、裏幅四間壹尺貳寸、裏行東拾六間貳尺六寸、西拾五間五尺。坪數六拾四坪九合。

御小人目付永田九兵衛

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

市街恢弘時代

一、表京間四間。裏幅四間三寸。裏行東拾五間五尺。西拾五間八寸。坪數六拾貳坪壹合。

御中間方

深谷市左衛門

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間四間三尺。裏幅同斷。裏行東拾九間八寸。西拾四間貳尺八寸。坪數六拾八坪九合。

御小人目付

永田忠右衛門

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間貳尺。裏幅七間三寸。裏行九間八寸。坪數六拾坪九合。

西丸御小人目付

荒井利兵衛

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間三尺七寸。裏幅七間貳尺五寸。裏行北南七間壹尺。北南七間貳尺五寸。坪數六拾三坪九合。

御目付支配無役

伊藤治郎吉

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間拾六間貳尺。裏幅同斷。裏行拾九間貳尺五寸。坪數三百拾六坪壹合。

御代官

大岡源右衛門

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

他二住居仕也。

一、表京間四間壹尺貳寸。裏幅同斷。裏行拾四間壹尺五寸。坪數五拾九坪五合。

御代官大岡源右衛門手附

高木周藏

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間五尺七寸。裏幅六間三尺七寸。裏行北南七間五尺。北南七間三尺。坪數五拾壹坪三合。

御中間方

近藤文之丞

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

他二住居仕也。

一、表京間六間五尺八寸。裏幅六間三尺。裏行六間三尺。坪數五拾貳坪。

御中間方

並木佐太郎

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間貳尺。裏幅五間貳尺。裏行拾壹間五寸。坪數五拾壹坪壹合。

西丸御小人目付

内田龜太郎

元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間拾間壹尺。裏幅拾間壹尺。裏行七間五寸。坪數七拾壹坪九合。

小普請方吟味役

野口十郎右衛門

元和二辰年拜領之節之名前、御中間山崎七郎右衛門ニテ御座也。

一、表京間拾間壹尺。裏幅拾間壹尺四寸。裏行拾八間三尺八寸。坪數百八拾八坪九合。

御代官大岡源右衛門寺附

山崎彦太郎

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間拾壹間五尺五寸。裏幅同斷。裏行六間四尺五寸。坪數七拾九坪三合。

御中間方

内田金右衛門

他二住居仕也。

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間。裏幅五間六尺。裏行拾壹間三尺五寸。坪數六拾八坪八合。

御中間方

加藤九左衛門

(卷) 元和二辰年御中間方柴田甚四郎拜領仕也處、享保十九寅年奉願相對替仕也。

一、表京間六間壹尺九寸。裏幅同斷。裏行東拾間三尺五寸。西九間五尺六寸。坪數六拾四坪貳合。

小普請方假役

池田善右衛門

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間五間五寸。裏幅同斷。裏行拾壹間五尺。坪數五拾九坪七合。

御中間方

藤村良助

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間五間五寸。裏幅同斷。裏行南拾壹間五尺。北拾壹間五寸。坪數五拾八坪。

御中間方

清水鐵藏

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、中村小兵衛二ゝ御座也。

一、表京間六間三尺。裏幅同斷。裏行九間四尺五寸。坪數六拾貳坪六合。

小普請方改役下役

中村藤三郎

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間五間四尺五寸。裏幅六間四尺五寸。裏行六間四尺五寸。坪數五拾五坪貳合。

小普請石川民部組

松永善太郎

他二住居仕也。

(卷) 元和二辰年拜領之節之名前、相分不申也。

一、表京間六間四尺五寸。裏幅同斷。裏行九間四尺五寸。坪數六拾四坪九合。

御中間方

西村平作

他二住居仕也。

右拜領町屋敷、元和二辰年御中間組四拾三人一同拜領仕、代々所持仕來也。最年久敷儀故、其節之名前不相知も有之也。

(卷) 正徳三巳年六月拜領之節之名前、御本丸表坊主高橋休悦二ゝ御座也。

一、表京間八間四尺八寸。裏幅八間。裏行東拾七間壹尺五寸。西拾六間五尺五寸。坪數百四拾貳坪貳

市街恢弘時代

合。

御本丸表坊主

高橋久悦

正徳三巳年六月拜領之節之名前御本丸表坊主大須玄喜ニ御座也。

一表京間八間四尺五寸裏幅八間裏行東拾七間壹尺五寸。坪數百四拾貳坪貳合。

右拜領町屋敷貳ヶ所也。正徳三巳年六月御中間頭大岡金兵衛上地之内、兩人

先祖拜領仕也。○本郷春木町

貳丁目書上。

本郷春木町三丁目

本郷春木町三丁目

一、町名并拜領町屋之儀也、春木町壹町目を申上り通、同様ニ御座也間、別段不

申上り。且亦右町之内、野宮市太夫殿武士屋鋪壹ヶ所挾り居り得共、大繩上り

地跡拜領ニ也哉、亦之武士屋敷ニ有之也哉、相分不申也。

一、前書申上り拜領地主名前、左之通。

竹内彌五郎御徒目付宇佐美仁右衛門

同 山本彦治郎御徒目付加藤惣七

同 松長長三郎御徒目付川村仁三郎

御中問 橋本惠治郎

同 柏原徳治郎

同 下山傳吉

御目付支配無役 小林忠右衛門

御臺所人 丸山祐吉右同斷。

同 平井讚三郎

御仲問 山崎馬之助

御普請方下奉行 増田源三郎

御藏御門番同心 關口彦三郎

御仲問 柏原藤三郎

同 内山新左衛門拜領地ニ住居仕也。

同 松永金太郎拜領地ニ住居仕也。

同 風間新八郎拜領地ニ住居仕也。

御仲問 今井八郎左衛門

同 小金井才三郎拜領地ニ住居仕也。

御廣敷添番 小永井惣太夫拜領地ニ住居仕也。

御仲問 荻原才兵衛拜領地ニ住居仕也。

御小人目付 小林八兵衛小普請太田内藏頭組

御仲問 羽田五郎助拜領地ニ住居仕也。

同 鎌方郷右衛門右同斷。

同 荻原源助右同斷。

同 棚澤鐵三郎

御小人目付 羽田市藏右同斷。

御仲問 關口四郎三郎右同斷。

同 神田助三郎右同斷。

御目付支配無役 田野村與市

御仲問 長瀬平五郎右同斷。

同 佐藤喜内

一、右名前之外惣組預り地壹ヶ所、甲府小普請支配鍋島伊豫守様御組池田助七郎拜領地ニ有之也處、文政六未年七月中上り地ニ相成、其節右組預りニある當時左之四人引受罷有也。

市街恢弘時代

引受人

御仲間頭鈴木宇右衛門組御仲間
遠宮藤九郎

同

加藤重三郎

同

岩堀孫治郎

同

深谷市右衛門○本郷春木町三町目書上。

湯島切通片町

湯島切通片町

一、當所之儀を、往古を武州豊島郡峽田領湯島郷に御座は由申傳は。

一、町銘之儀、古來之儀を相分り不申は得共、元和二辰年七月中、御仲間方大繩拜領屋敷に被下置はに付、御仲間頭牧野金助様御請取被成、御組下に御割渡相成申は。尤何年以前を町人の貸付申度段御願濟に相成は哉、年月相分り不申は得共、町屋取建は以來町方御支配ト奉存は。古來を切通往還通り片側町屋に、切通シ坂上に有は故、湯島切通片町を相唱申は趣之申傳に御座は。

一、町内北横町之内に先年隱賣女有之、尤其頃本郷新町屋里俗大根畑にも隱賣女御座は所、安永四未年を當町にも右商賣相始メはに付、新大根畑を相唱は趣は所、天明三卯年町御奉行牧野大隅守様御掛り二、夫々御答メ被仰付、右御地所を御上り地之上御取潰シに相成は得共、今以東西に貳拾三間程、南北に拾四間程之場所を、里俗に新大根畑を相唱申は。則當時石崎仙右衛門殿、足立定藏殿宮川彦五郎殿栗田糸藏殿拜領地之所に御座は。

一、町内之儀を、不殘御仲間方大繩拜領地に、前書申立は通、年月相分り不申は得共、新規町屋被仰付、追々拜領主相替、當時左之通。

表田舎間四間。裏行貳拾三間三尺。此坪九拾四坪 小普請 淺井小十郎

右を元祿三年十月先祖淺井平七より拜領引續相續被致は。

表田舎間三間。裏行貳拾三間三尺。此坪七拾八坪九合七勺。 御使之もの

大澤善内

右を元和二年○辰年明き地にて、先祖大澤善内拜領を引續相續被致は。

表田舎間三間。裏行貳拾四間。此坪七拾九坪。 中口番

佐藤傳内

右を元和二年○辰年明地にて、先祖佐藤宇平次より拜領引續相續被致は。

表田舎間三間。裏行貳拾四間。此坪四拾八坪。 縮役助

蘭半

右を元和二年○辰年明地にて、先祖蘭藤七郎拜領より引續相續被致は。

表田舎間七間壹尺貳寸。裏行拾間。此坪七拾貳坪五合。 御觸番

近田喜太郎

右を寛永八未年明地にて、先祖近田半八拜領より引續相續被致は。

表田舎間七間壹尺貳寸。裏行拾四間四尺八寸。此坪七拾壹坪五合。

市街恢弘時代

右之寛永八未年明地ニ有、先祖内田勘次郎拜領より引續相續被致シ。
御小人目付 内田鎌五郎

表田舎間五間五寸貳分。裏行拾五間四尺八寸。此坪七拾八坪三合。

無役 杉浦定之助

右之寛永八未年御仲間淺野太郎右衛門拜領屋敷之所、天明元丑年二月中上り地ニ相成、同年五月中先祖杉浦平四郎拜領より引續相續被致シ。

表田舎間五間五寸五分。裏行拾五間四尺。此坪七拾七坪九合。

無役 伊藤三之助

右之寛永八未年明地ニ有、先祖伊藤伊右衛門を拜領引續相續被致シ。
御口者 三浦勘左衛門

表田舎間六間。裏行拾四間貳尺。此坪七拾坪八合五勺。

右之寛永八未年明地ニ有、先祖三浦久右衛門拜領より引續相續被致シ。

表田舎間拾間四尺五寸。裏行南拾間貳尺。此坪七拾貳坪七合。

御納戸口番 石崎仙右衛門

右之元和二午^{○辰}年中、中村與三郎拜領屋敷之所、天明三卯年中御上り地ニ相

成、同七未年同人亦以拜領被致シ處、文化十酉年中當地主相對替被致シ。

表田舎間五間貳尺。裏行南拾壹間三尺。此坪六拾壹坪。

御小人目付 足立定藏

右之元和二午^{○辰}年中、先祖足立次郎拜領被致シ處、天明三卯年中上り地ニ相成、同七未年同人亦以拜領被仰付^ハ引續相續被致シ。

表田舎間三尺五寸。裏行南拾九間三尺。此坪八拾五坪。

御仲間 宮川彦五郎

右之天和三亥年明地ニ有、先祖宮川安五郎拜領被致シ所、天明三卯年中上り地ニ相成、同七未年同人亦以拜領被仰付^ハ引續相續被致シ。

表田舎間五間貳尺。裏行南拾壹間三尺。此坪六拾壹坪。

御小間遣 栗田糸藏

右之元禄八亥年中鶴間七藏拜領屋敷之所、本所之爲代地、同役山本勘兵衛拜領之所、亦以神田山本町ニ有屋敷拜領ニ付、此所上ヶ屋敷ニ相成、貞享四卯年先祖栗田彌左衛門拜領より引續相續被致シ。

表田舎間七間五尺。裏行南八間。北四間。壹尺五寸。此坪五拾六坪。

西之丸御長刀役
鈴木定五郎

右之何年之頃を拜領被致し哉、相分り不申し。

表田舎間六間三尺。間行拾九間三尺。此坪百貳拾九坪九合。

小普請

矢部八左衛門

右之天和三亥年中、先祖矢部八左衛門拜領を引續相續被致し。

表田舎間六間三尺。裏行拾九間三尺。此坪百貳拾七坪五合。

小普請

丹羽勝次郎

右之天和三亥年中、先祖丹羽彌左衛門拜領を引續相續被致し。

表田舎間五間。裏行拾九間五寸。此坪八拾三坪四合。

西之丸御納戸口番

三ツ橋榮三郎

右之何年之頃を拜領被致し哉、相分り不申し。尤寛永八未年中を涼智院境内に貸置申し。

表田舎間拾壹間。裏行拾八間貳尺貳寸五分。此坪貳百五坪貳夕。

御仲間方御組

御預り地面

右之何年之頃を御預り地所に相成し哉、相分り不申し。尤寛永八未年中を涼

智院境内に貸置申し。

表田舎間四間五尺九寸。裏行拾七間四尺。此坪八拾貳坪七合。

定番役

鷹巢長藏

右之正保二酉年湯島三組町之内を爲代地明地にて鷹巢傳八拜領を引續相續被致し。

表田舎間四間壹尺。裏行拾七間。此坪七拾坪貳合。

御手鍵持

内山平八

右之天和三亥年明地を、先祖内山茂次郎拜領より引續相續被致し。

表田舎間四間壹尺七寸。裏行拾六間。此坪七拾坪。

御普請方同心

關口三次郎

右之寛永未年明地を、先祖關口三左衛門拜領を引續相續被致し。

表田舎間五間三尺九寸。裏行拾五間貳尺。此坪九拾九坪。

野方御使役

山崎清五郎

右之寛永未年明地を、先祖山崎清五郎拜領を引續相續被致し。

湯島切通町

一、當所之義を、往古武州豊嶋郡峽田領湯島郷之内之趣申傳し。

一、町銘起立之義を、年來相立し義を付、疋々相分り不申し。古來を奥州海道之

湯島切通町

市街恢弘時代

協道なる、纒之町家ニ有之由。其後年月等相分り兼ひ得共、御旗本辰巳彌次兵衛様、御同朋半田丹阿彌様、御臺所人福田五左衛門様、同坂入半平様、拜領町屋敷ニ有之由處、元祿年中追々町並屋敷ニ仕度段御願申上、願之通被仰付、夫賣渡沽券地ニ相成ひ得共、町御奉行所御支配ニ相成ひ年月相分不申。尤切通坂道有之由ニ付、右之名を町銘ニ相付、湯島切通町と相唱來ひ趣ニ御座。且古町之義ニ付、臨時御祝義、御能御座節と、町内家持共古來御能拜見被仰付。

一、切通シ坂 高サ貳丈五尺程。幅四間。登り五拾五間程。

當時南と湯島天神境内、北と根生院境内之間と、切通往還之内ニ御座。右と何ヶ年以前切開、下谷邊と湯島臺と之往還出來仕、通行致來ひ様ニ相成哉、其頃何方之御懸りと、出來致ひ哉、年古キ義と、相分り不申。且前書ニ申上、奥州海道協道と申上、此切通シ坂通りニ可有御座哉、奉存ひ得共、旋と仕ひ義と相知兼申。

一、宗源寺 大宗寺 万福寺 幡隨院

右之寺々切通邊ニ往古有之由、此得共、年數相立ひ義ニ御座。間、寺跡相

湯島三組町

分り不申。右之内幡隨院と、當時板倉越中守様御屋敷之場所之由ニ申傳。尤湯島切通片町當時大繩拜領屋敷ニ相成ひ以前、名前と相分り不申。得共、寺跡ニ有之由申傳ニ御座。委細と右町と申上。

湯島三組町

一、町名起立之儀と相分兼ひ得共、武州豊嶋郡峽田領之内湯嶋郷と申傳へ由。元和貳辰年四月神君様於駿河薨御被爲遊、御附之御仲間御小人御駕籠方江戸表に被召返、此付、同年中當所右三組之衆へ大繩と、屋敷被下置、銘々割渡之砌と、駿河町と相唱ひ由申傳。其後元祿九子年中町家相建申度段、地主一同相願ひ處、願之通相濟、町銘之儀と右躰三組之御家人衆拜領地面故、湯嶋三組町と相唱ひ由申傳。且亦右拜領地主之内、役替又と地面相對替等有之由得共、他組入替ひ儀無御座。尤右地主之内上り地面有之、當時組持ニ御座。依之拜領地主姓名并上り地預り人名前等、下ニ申上。

一、町内惣家數四百八拾九軒。

但、拜領地主九拾六人、内五拾壹人居付。其外他住居仕。

地借 百三拾人。 店借 三百五拾九人。

一、町内東之方横町、里俗ニ御駕籠町と相唱申シ。右ノ御駕籠方多分拜領地面
ニ有之ハ故、右躰相唱申シ。

一、町内東之方横町之儀、之、録之形ヲ有之ハ間、里俗ニ録町と相唱申シ。

一、町内西之方横町、里俗ニ駿河町と相唱申シ。尤當町地主衆元和貳辰年中駿
河ハ被召返シ故、駿河町と相唱申シ。委細繪圖面畧。ニ申上シ。

一、隣町之名

東之方岨下

小普請方手代組屋敷。御寄合。酒井舍人様御屋敷。

西之方往還を隔。本郷新町屋。眞言宗。靈雲寺。

南之方往還を隔。御小納戸。島田彈正様御屋敷。妻戀町。湯島三組町續拜領屋敷。

北之方。湯島天神門前町。

一、町内東西。南之方京間七拾七間四尺四寸。北之方同。三拾六間三尺九寸。南北。東之方京間三拾六間貳尺五寸。西之方京間三拾六間九寸。

惣坪數七千七百拾六坪三合

外ニ

往還七ヶ所。中央裏通共道幅四間。東西横町壹ヶ所同。西横町壹ヶ所同。

但持合場所ノ朱引ニ有、其外委細繪圖面畧。申上シ。

一、拜領地面、左之通。

表間口京間三拾貳間五寸。裏幅七間壹尺。西御丸十人。柳助九郎。

裏行南拾三間四尺五寸。北三拾貳間四尺五寸。此坪七百四拾四坪。

右ノ元和貳辰年十二月、先祖畔柳助九郎、及於番所ニ拜領被致シ。

表間口田舎間八間貳尺。裏幅八間三尺。御玄關番。木村元右衛門。

裏行南拾壹間。此坪七拾六坪四合。同。大塚定十郎。

表間口田舎間四間六寸五分。裏幅拾五間貳尺六寸。

裏行北三間。此坪五拾六坪五合。御金奉行。西村九郎右衛門。

表間口田舎間八間四寸。裏幅同斷。御臺様御廣敷添番。杉本岩太郎。

裏行南九間五尺四寸。此坪八拾六坪九合。御仲間頭。佐藤定藏。

表間口田舎間三間壹尺壹寸。裏幅四間壹尺。御中間。小澤文治郎。

裏行北九間五尺貳寸。此坪三拾七坪八合。御小人目付。荒井林之助。

表間口京間七間貳尺五寸。裏幅六間三尺。御仲間。梶間吉太郎。

裏行西貳拾間貳尺。此坪百四拾壹坪貳合。

表間口京間四間貳尺。裏幅六間三尺。

裏行東拾四間五寸。此坪六拾壹坪七合。

表間口京間四間貳尺八寸。裏幅四間三尺。

裏行南拾四間四尺壹寸。此坪六拾四坪壹合。

市街恢弘時代

表間口京間四間四尺四寸。裏幅四間四尺。
 裏行南拾九間。此坪六拾九坪四合。
 同 田能村新平
 表間口京間四間四尺五寸。裏幅四間六尺。
 裏行南拾五間。此坪六拾八坪八合。
 同 飯田與八郎
 表間口京間八間三寸。裏幅八間壹尺壹寸。
 裏行北拾壹間。此坪九拾坪。
 御仲間頭 遠宮藤九郎
 表間口京間六間四尺九寸。裏幅同斷。
 裏行南拾壹間。此坪六拾三坪。
 同 松永清四郎
 表間口京間五間四尺三寸。裏幅同斷。
 裏行北拾壹間。此坪百三坪六合。
 御小人目付 畔柳權九郎
 表間口京間五間四尺三寸。裏幅同斷。
 裏行南拾壹間。此坪百三坪六合。
 御仲間 眞壁岩治郎
 表間口京間五間四尺三寸。裏幅同斷。
 裏行北拾壹間。此坪百三坪六合。
 御仲間 生田與四郎
 表間口京間五間四尺三寸。裏幅同斷。
 裏行南拾壹間。此坪百三坪六合。
 同 指田新十郎
 表間口京間四間四尺。裏幅四間壹尺。
 裏行北拾九間。此坪百七拾坪三合。
 御普請組支配野豐前守組 早川兼太郎
 表間口京間三間四尺五寸。裏幅四間壹尺。
 裏行東拾三間。此坪六拾坪三合。
 御目付支配無役 川村才助
 表間口京間三間四尺五寸。裏幅四間壹尺。
 裏行西拾三間。此坪六拾坪三合。

表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行西拾三間。此坪六拾坪三合。
 御仲間 小泉瀧五郎
 表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行東拾三間。此坪六拾坪三合。
 同 成島惣治郎
 表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行西拾三間。此坪六拾坪三合。
 御小人目付 荒井爲三郎
 表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行東拾三間。此坪六拾坪三合。
 御金奉行同心組頭 伊佐新治郎
 表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行西拾三間。此坪六拾坪三合。
 御目付支配無役 西村圓左衛門
 表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行東拾三間。此坪六拾坪三合。
 御仲間組頭 田口次郎兵衛
 表間口京間三間三寸。裏幅三間三寸。
 裏行西拾三間。此坪六拾坪三合。
 御目付支配無役御仲間方 神谷權平
 御仲間 神谷十之丞
 西御丸切手御門番之頭 梶間鐵之助
 古坂辨藏組同心 御留守居石川甲斐守組 加藤利兵衛
 御仲間 橫川瀨平

表間口京間七間五尺。裏幅九間二五間五尺。
 裏行北拾壹間三尺八寸。此坪八拾六坪三合。
 表間口京間五間五尺六寸。裏幅六間六尺貳寸。
 裏行南拾壹間六寸。此坪六拾五坪五合。
 表間口京間六間壹寸。裏幅六間。
 裏行北拾間壹尺壹寸。此坪六拾三坪三合。
 表間口田舍間拾壹間四尺七寸。裏幅拾貳間貳尺九寸五分。
 裏行南拾八間三寸。此坪貳百四拾貳坪。
 表間口田舍間五間五寸。裏幅五間三寸。
 裏行北拾七間壹尺。此坪八拾九坪。
 表間口田舍間三間壹尺。裏幅三間三尺八寸。
 裏行南拾九間三寸。此坪七拾坪。
 表間口田舍間三間四尺。裏幅三間三尺八寸。
 裏行北拾九間壹尺。此坪七拾坪五合。
 表間口田舍間三間四尺五寸。裏幅三間三尺八寸。
 裏行南拾九間壹尺。此坪七拾壹坪。
 表間口田舍間四間壹尺。裏幅三間三尺八寸。
 裏行北拾八間四尺。此坪七拾三坪四合。
 表間口田舍間四間三尺。裏幅三間四尺八寸。
 裏行南拾八間壹尺。此坪七拾四坪。
 表間口田舍間四間壹尺五寸。裏幅三間四尺三寸。
 裏行北拾八間壹尺。此坪七拾三坪。

小普請方吟味役勤方
 金井九十郎
 御小人目付
 加瀬彦市
 御目付方御小人
 栗嶋藤吾
 御簀指役
 並木彦次郎
 御目付支配無役御仲間方
 野村太兵衛
 御仲間
 杉浦和助
 同
 山本大次郎
 同
 津田三之助
 同
 目黒長治郎
 御掃除之者頭
 末次左吉
 御簀指役
 小永井惣兵衛

表間口田舍間四間貳尺。裏幅三間四尺三寸。
 裏行北拾八間壹尺。此坪七拾貳坪七合。
 表間口田舍間四間貳尺。裏幅三間四尺。
 裏行北拾貳間三寸。此坪九拾三坪。
 表間口田舍間四間五尺。裏幅三間貳尺。
 裏行南貳拾貳間三寸。此坪百壹坪九合。
 表間口京間四間貳尺。裏幅五間五尺。
 裏行北三拾四間三尺。此坪六拾五坪壹合。
 表間口京間六間四寸。裏幅同斷。
 裏行南拾壹間四尺五寸。此坪七拾壹坪六合。
 表間口京間六間五寸。裏幅五間五尺三寸。
 裏行北右同斷。此坪百拾貳坪九合。
 表間口京間五間五寸。裏幅五間五尺。
 裏行南拾壹間五寸。此坪六拾四坪貳合。
 表間口京間貳間三寸。裏幅同斷。
 裏行南拾七間四尺五寸。此坪數百拾貳坪。
 表間口田舍間三間。裏幅四間壹尺。
 裏行北拾七間。此坪四拾七坪八合三勺。
 表間口京間五間壹尺壹寸。裏幅壹尺五寸。
 裏行南同斷。此坪七拾貳坪壹合。
 表間口京間四間四寸。裏幅六尺。
 裏行南廿五間壹尺五寸。此坪六拾五坪。

表間口田舎間四間五尺七寸裏幅貳間五尺三寸
裏行西同斷此坪五拾三坪六合。

御簾中様御用人侍
折原勇次郎

表間口田舎間四間四尺四寸裏幅三間五尺五寸
裏行西同斷此坪七拾坪壹合。

御仲間
芝沼八助
猪野藤右衛門

表間口田舎間五間壹尺三寸裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

御小人
鳥羽甚五郎

表間口田舎間五間壹尺三寸裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

同
佐藤九藏

表間口田舎間五間壹尺三寸裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

同
山川茂太郎

表間口田舎間五間壹尺三寸裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

御代官手付
金田專次郎

表間口田舎間五間壹尺五寸裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

御小人
吉田喜太郎

表間口田舎間五間壹尺三寸裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

御目付支配無役御小人方
森本善吉

表間口田舎間四間壹尺裏幅同斷
裏行南同斷此坪七拾八坪貳合。

御小人
坪山彦藏

表間口田舎間四間壹尺裏幅同斷
裏行南同斷此坪五拾三坪八合貳夕。

御仲間
石原安次郎

表間口田舎間六間壹尺裏幅拾壹間貳尺五寸
裏行西同斷此坪百四拾三坪壹合六夕。

御仲間
風間勝太郎
望月長三郎

表間口田舎間六間五尺壹寸裏幅六間六尺
裏行西同斷此坪六拾八坪貳合。

御駕籠之者
鈴木新八

表間口九間壹尺貳寸此間六拾五坪五合
裏行北同斷此坪六拾九坪三合。

御仲間
柴田十右衛門

表間口九間壹尺貳寸裏幅七間壹寸
裏行北同斷此坪六拾八坪四合。

同
岩堀本左衛門

表間口九間四尺六寸裏幅三間
裏行北同斷此坪五拾八坪九合。

同
今井清次郎

表間口三間貳尺九寸裏幅三間貳尺四寸
裏行北同斷此坪六拾九坪三合。

同
長坂新五郎

右九拾三人之年月不知寔初拜領名前相知不申以得共前書拜領主之先祖
銘々拜領被致以儀ニ後可有御座以。

表間口京間七間五尺九寸裏幅同斷
裏行北同斷此坪六拾七坪。

御仲間
加藤惣七

右預り地面之儀之御目付支配無役大濱甚右衛門儀出奔致以ニ付寛政八

辰年十一月十日右地面上り地ニ相成同月十三日元組以御返地ニ相成以

處組持地面ニ右三人當時役中引請預り地ニ御座以。

御仲間
岩崎孫次郎

表間口京間貳間五尺壹寸。裏幅貳間五尺。
裏行南拾六間七寸。此坪四拾五坪六合。

同 加藤惣七
同 深谷市右衛門

右預り地面之儀、御臺所番村田清四郎拜領地面ニ有之ハ處、御扶持被召
放享和戌年七月八日右地面上り地ニ相成、同月廿五日元組へ御返地ニ有
之引續キ右組持地面ニ有、右三人當時引受預り地ニ御座ハ。

表間口田舎間六間三尺。裏幅拾壹間貳尺五寸。
裏行西拾八間四尺。此坪百四拾三坪壹合。

御仲間 風間勝太郎
同 望月長三郎

右預り地面之儀、何之譯ニ有上り地ニ相成ハ哉、書留等無御座相分不申
ハ得共、年來組持地面ニ有、右貳人當時役中引受預り地ニ御座ハ。

一、淨心寺跡

右寺之儀、湯嶋三組町畔柳助九郎殿同町御家人衆駿河臺ニ有檀家之由、
元和元辰年中江戸表御召返ニ相成ハ節、檀家中ニ有右寺御當地へ引移、拜
領地面之内壹寺建立仕、先祖右助九郎殿開記有之ハ處、天和戌年中寺類燒
仕ハニ付、駒込村百性地之内借地仕、今以右地面ニ借地仕、引續檀家御座ハ。
尤湯嶋ニ有開記之寺故、山号湯嶋山常光院淨心寺と相唱申ハ。尤右寺跡當

時何方之場所ニハ哉、疑と相知不申ハ。

差上申一札之事

三寶院宮御末下當山派修驗道
御役所百螺山鳳閣寺支配
御法頭醍醐

利生院

一、借地拾八坪。

間口四間。奥行四間半。但シ平家建作。此内ニ前幅壹丈、奥行貳間ノ神前土藏
壹ヶ所。

右之通りニ御座ハ。

一、當院開山利生院養達法印

元祿十四辛巳年十月七日寂ス。

一、利生院妙軒法印

延享五戊辰年四月廿二日寂ス。

一、利生院尊勝法印

安永四乙未年四月廿三日寂ス。

一、利生院教存法印

寛政三辛亥年十一月三十日寂ス。

一、利生院教存法印

文政二己卯年六月廿一日寂ス。

一、利生院教存法印住居之儀、天明三癸卯年六月湯嶋三組町家主治兵衛
支配地面借地致罷在ハ處、勝手ニ付寛政五癸丑年八月申當地面ハ借地
致、是迄罷在ハ。尤天明卯年已前之儀、何方ニ罷在ハ哉、録記書附等ハ燒失

致、相分不申也。

一、拙増義之、下谷町當山派觀勝院悴ニ御座也。文化九甲申年七月當院
に住職仕、文政三庚辰年六月大峰山入峯修行仕、法印着色衣等迄ニ昇進仕、
則御補任等頂戴仕罷在也。

是頃幕府黑鋏組宅地ヲ下谷

内。○市ニ給ス。○文政町方書上。

黑鋏組下谷給地

文政町方書上ヲ左ニ抄ス。

武州豐島郡下谷山崎町壹丁目

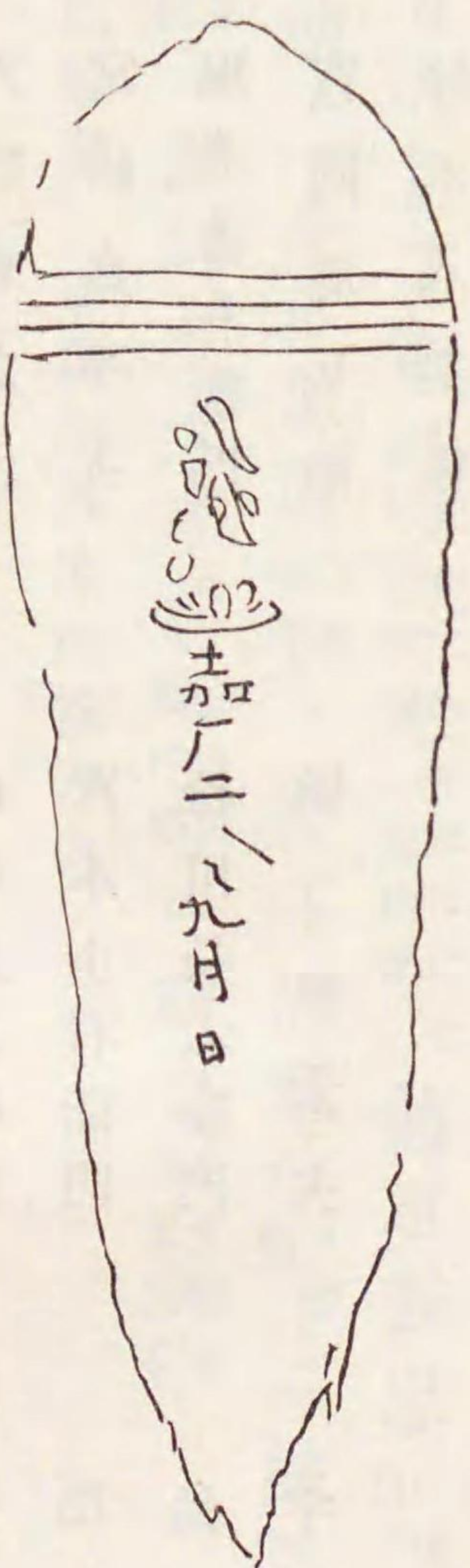
一、町名起立之儀也、年舊り儀ニ書留等無御座、黑鋏町申傳由。○中畧。
一、町内之儀也、不殘黑鋏方拜領町屋敷ニ、天正之度於三州竹束之者ニ被召
抱、所々御陣場御用相勤、年月不知、其後黑鋏之者ニ被仰付、元和二辰年御役人
方御名前不知、初る當所ニおゐて、黑鋏屋敷大繩地拜領仕。○下畧。○下谷山崎町壹丁目書上。
下谷山崎町貳丁目

一、町名起立之儀也、年舊り儀ニ書留等無御座、黑鋏町申傳由、其後元
祿年中、町屋敷ニ相成儀節、東叡山麓之儀ニ付、山崎町名付由、往古此邊都
有、沼地葭立ニ有、元和二辰年中、黑鋏方大繩地ニ拜領仕、元祿十二卯年三月廿

六日町屋鋪ニ相成、山崎町貳ヶ町ニ引分レ、壹丁目貳丁目申傳由。

一、地主船川市五郎殿地面内ニ有、拾六七ヶ年程以前池を堀候節、青キ薄石ニ
有、如圖之物堀出申也。當時同人庭ニ有之也。

圖中ノ旗



高サ貳尺七分

旗組ノ家人ニ地ヲ烏越村

○市内。○文政町方書上。

旗組家人給地 文政町方書上云フ、

神田八名川町

一、右町之義也、往古武州豐島郡峽田領烏越村之由ニ御座也。所、三州八名川村
被相越也。貳拾貳人之面々、權現様駿府御在城之節、御旗組ニ奉仕之由。元
和二丙辰年右貳拾貳人之面々、駿府御當地に罷下り、同年月日不相知當所
ニ有拜領町屋ニ被仰付、住居之由、町名之儀也、前書八名川村被相越也。面々

市街恢弘時代

旗組家人給地
旗組家人給地事蹟
神田八名川町

住居之地ニ付、八名川町と相唱ひ由申傳ひ。尤其節々、當時之神田餌鳥屋敷并町會所御取建已前馬場の場有之ひ地所、過半八名川町ニ御座ひ。○中但、元和二丙辰年拜領被仰付ひ地主名前、元祿年中書留ニ相見ひ間、左ニ申上ひ。

- 武井茂吉 鬼澤庄右衛門 牛越十三郎
- 花井左左衛門 都築文右衛門 山本唯右衛門
- 土田傳太夫 萩原甚藏 大木喜助
- 天野市之丞 山本武左衛門 安藤彌市右衛門
- 宮崎喜平次 宮本小右衛門 都築理兵衛
- 堀井善右衛門 松田長右衛門 鈴木角兵衛
- 吉岡藤兵衛 同 藤太夫 宇都宮茂平次
- 鈴木八兵衛

右貳拾貳人之者、銘々拜領致居、其節之惣小間百三拾九間壹尺六寸、家數貳拾貳軒有之趣、元祿年中書留ニ相見ひ申上ひ。○神田八名川町書上。

神田餌鳥屋敷

一、右町之儀を、往古武州豊島郡峽田領鳥越村之由ニ御座ひ處、元和二丙辰中、御旗組御家人方拜領地ニ被仰付、神田八名川町と唱ひ町屋ニ御座ひ。○下畧。○神田餌鳥屋敷書上。

本多氏賜邸

九月廿九日丁酉○元和二年紀元二二七將軍秀忠○德川第一女千姫、姫

路○播磨國城主本多忠政○美濃守ノ長子忠刻○中務少輔ニ嫁ス。○台徳院殿御實紀。是時忠

刻○本多中務少輔邸地ヲ大手前○市内麴町區ニ賜フ。○子爵本多家回答。

本多氏賜邸事蹟

本多氏賜邸 子爵本多家回答云フ、

大手前屋鋪

同上○嘉永江切繪圖。圖面ニアル辰ノ口北ノ方御用屋鋪ニケ所ノ分一圓、元和二辰年徳川家二代將軍秀忠公第一ノ女始メ豊臣千姫后天嫁ス。其時之レヲ拜領ス。其後寛文六午年閣老酒井雅樂頭ヨリ内命ニ因リテ還納ス。但坪數知レズ。

而シテ千姫婚嫁ハ、台徳院殿御實紀ニ、

廿九日○元和二年九月御所○徳川秀忠第一の姫君は、豊臣右大臣秀頼公の北方にましけるが、大坂の城陥りける後は、關東に下りましたるを、今度本多美濃守

市街恢弘時代

忠政が長子中務大輔忠刻へ降嫁せらるべきに定まりぬ。本多家譜に、七月の事従ふ。元和年録も同じ。これは忠政か妻は、岡崎三郎君の御女あり。此北方先に大御所御病のさまうかやはんとて駿府におはしけるとき、御病牀にまいり、懇に此事こはせ給ひ、御ゆるしありとぞ。さてその御輿添は、永井信濃守尙政、青山大藏少輔幸成、貝桶は安藤對馬守重信、本多かもとにて御輿を請取しは、松下河内長坂太郎左衛門あり。佐野傳右衛門正長、本多新五兵衛政重、染木八右衛門正信、星田次郎左衛門正種、長田六左衛門重政は、姫君につけられ、かの家につかはさる。姫君の湯沐の邑とて、別に十万石給ふ。こゝに石見國津和野城主坂崎出羽守孝親、この姫君勢州桑名に出たゝせたまふを待とりて、御輿を奪ひ進らせんとするの聞えあり。柳生又右衛門宗矩をはじめ、御使して、うち／＼なだめ仰らるゝ旨ありといへども、孝親は對面もせず、塗籠に引こもりて、家子郎等も戒具を用意し、何とかく其さまあやしげあり。關東にありあふ諸大名、この事聞傳へずは、事こそ出来たれと、兵を集る事大方ならず。よて執政の人々、かくては天下の騷動を引いだすへきかと大に驚き、其家人等に奉書を下し、汝か主の舉動、全く狂氣のいたす所と見え、君臣の禮を失ふとい

ふべし、まかしながら、反逆の例に准じ御沙汰あらんもあさけおしと、あはれみ思召ば、只今にも孝親自殺しては、てんには、一族のうちをえらび、其祀をは奉ぜしめらるべし、とにもかくにも汝等かはからひによるべきものありとの事ありしかば、家臣坂崎東武實錄による。勸兵衛等相ばかり、孝親を自殺せしめ、其首取て進らせたり。誠は孝親を沈酔せしめ、晝寢せしを薙刀取て首を刎しときこえける。藩翰譜本多上野介正純が傳に引き、ころに、よれば、坂崎がおまのよつぎを立らん事を思はし、下にすべしと議しけるとき、正純聞て、此奉書下されん事然るへからず、彼が不臣を罪せんがため、又かの政事は、不臣をすべしとあるべからず、たゞ速に軍勢をさしむけて、誅伐あるべきものなり、なんぞいやくも人臣の教を連し、かど衆議一決せし上は、正純が議を用ひられず。其時に及び、正純は、この奉書に、庫中に醉臥するを、元和年録には、柳生又右衛門其家臣牧野勘兵衛にすゝめ、出羽守政より家臣をも殺害すとも見ゆ。まか、れども、正純か此論あるを見れば、執所徳川聞召、出羽か舉動既に反逆に似たりといへども、彼老臣等か諫により、彼君臣の禮を守り、自殺したらんには、別議を以て一族の中をえらび、其家繼せ給ふべしとこそ思召つれ、それに彼家長どもをのが主をたばかり首刎て献する

德川頼房賜
邸事蹟

路○市内。二賜フ。○水戸紀年。

德川頼房賜邸 松原小路上屋敷是也。往古江戸繪圖紅葉山ノ西、糺町口内ニ水戸中納言様ト有リ。糺町口内番所ノ側ニ水戸様向長屋ト見ユ。今ノ吹上禁苑中央部ニ當ル。

○九月二年元和。台徳公○德川秀忠。公○德川頼房ニ宅地ヲ松原小路○市内ニ賜フ。一説、糺町トモ云。

頼房○德川

○上。元和二年丙辰九月、台徳公○德川秀忠賜宅地于江戸山手。今稱松原小路。

源流綜貫

水戸殿御館蹟

寛永板江戸繪圖正保江戸繪圖とも、前の紀伊殿御館の南鄰ニ水戸中納言殿○德川頼房と載り。寛永記ニ、元年西丸御普請ニ依テ、四月十九日より十月十日迄、大猷院殿○德川家光水戸殿館へ移らさ給ふと見へし。此御館なるへし。亦も明曆三年御用地と成をり。明曆年録ニ、三年五月十四日水戸中納言殿御上屋敷爲代地、エサシ町ニ被進之旨、松平因幡守に被仰渡之とあり。此エサシ

町と云ハ、小石川御屋鋪の添地と云へし。正保江戸圖ニ、彼御屋鋪の北手ニ組屋鋪と云もの多く載り。是元餌差衆の拜領地として、其のまゝ餌差町と唱へし町並なり。今の富坂町の、餌差町の變名なりと云。同町の舊記ニ、水戸殿添地と成し、餌差衆十人の屋鋪なり。其代地として今の富坂新町を賜ひしといへり。又此時東隣酒井日向守○忠能の屋鋪なども添地ニ圍入られしと見へて、寛文十年江戸圖ニ其の邊まで一圓水戸殿の御屋鋪構の如く圖したり。

府内備考

德川義直賜
邸

十二月○元和二年紀元二二七六年。名古屋○尾張國。城主德川義直○參議中將邸地ヲ北郭

内鼠穴○市内ニ賜フ。○德川家譜。名古屋○名古屋藩。侯爵德川家回答。

德川義直賜邸 鼠穴邸是也。往古江戸繪圖西丸西糺町口内ニ尾張大納言様、南

續ニたのり様下やしきト記ス。正保承應明曆江戸圖ハ、下屋敷及成瀬隼人、竹腰

山城邸ヲ合シテ一邸トス。今ノ吹上禁苑南部也。

義直○德川

一、同○元。二年丙辰十二月、始テ江戸城北郭内ニ邸地ヲ受ク。後市谷、麴町、築地、和田、戸山等ノ諸

邸地ヲ受ク。

德川家譜○名古屋藩

市街恢弘時代

德川義直賜
邸事蹟

元和二年十二月始テ江戸城北郭内ニ邸地ヲ受ク。

御家譜○名古屋藩。

閏十二月○元和六年。御屋形御普請出來。當年ヨリ御參勤。

柳營日次記

一、代官町御屋敷

下賜日不詳。

坪數不詳。

參照 敬公實錄ニ、十二月元和二年公○德川義直。發國如江戸、枉道謁久能山東照

宮廟、遂至江戸、寓本多美濃守忠政第。以未有邸也、既而幕府賜邸地於北丸内トアリ。

當家日記ニ、明曆三年五月十四日鼠穴御屋敷上りハ付、爲御替地、麴町並市ヶ谷御屋敷ハ御添地御拜領有之トアリ。又當春江府御城炎上、御作事被仰付、御曲輪御取廣ニ付、鼠穴御屋敷御廓中ニ相成トアリ。

備考 上記ノ年月日其他ノ記録ニ依リ推考スルニ、本屋敷ヲ鼠穴屋敷ト稱シタルモノナラン。

侯爵德川家回答

尾張殿御館蹟

寛永板江戸繪圖正保江戸繪圖とも吹上内前の水戸殿御館の南に、尾張大納

德川義直筆蹟

侯爵 德川家(○尾州)所藏

德川義直筆蹟二通、一ハ嗣子光友(○宰相)ニ宛テタル者、一ハ重臣成瀬正成(○隼人正)以下ニ宛ツ。遺誠懇到、其人ヲ想見スルニ足ル。

元和二年十二月始テ江戸城北郭内ニ邸地ヲ受ク。

御家譜○名古屋藩

閏十二月○元和六年御屋形御普請出來。當年ヨリ御參勤。

柳營日記

一、代官町御屋敷

下賜日不詳。

坪數不詳。

參照 敬公實錄ニ、十二月元和二年公○德川義直發國如江戸、狂道謁久能山東照宮廟、遂至江戸、寓本多美濃守忠政第。以未有邸也。既而幕府賜邸地於北丸内トアリ。

當家日記ニ、明曆三年五月十四日鼠穴御屋敷上りハ付、爲御替地、麴町並市ヶ谷御屋敷ハ御添地御拜領有之トアリ。又當春江府御城炎上、御作事被仰付、御曲輪御取廣ニ付、鼠穴御屋敷御廓中ニ相成トアリ。

備考 上記ノ年月日其他ノ記録ニ依リ推考スルニ、本屋敷ヲ鼠穴屋敷ト稱シタルモノナラン。

侯爵德川家回答

尾張殿御館蹟

寛永板江戸繪圖正保江戸繪圖とも吹上内前の水戸殿御館の南に、尾張大納

德川義直筆蹟

侯爵 德川家(○尾州)所藏

德川義直筆蹟二通、一ハ嗣子光友(○宰相)ニ宛テタル者、一ハ重臣

成瀬正成(○隼人正)以下ニ宛ツ。遺誠懇到、其人ヲ想見スルニ足ル。

元和二年十二月始ヲ江戸城北郭内ニ邸地ヲ没ス

同十二月〇元和御屋形御書請出來當年ノ御書勤

一代官町御屋敷
下賜日不詳
坪數不詳

參照 敬公實錄ニ十二月二〇日

吉原(?)海(?)御屋形御書請出來當年ノ御書勤

當家日記ニ明曆三年五月十四日鼠穴御屋敷上リ

被仰付御書勤御取廣ニ付鼠穴御屋敷御書中ニ相成

尾張殿御書勤

寛永版江戸繪圖正保江戸繪圖とも吹上内前〇水戸

御家譜

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

御書勤

一 建

一 我多病氣多過、痛すよりとて、
 不く、
 一 好信く、
 一 依の、
 一 心業の、
 一 己の、
 一 我を、

二月十七日

穿板

言

可き、
 二月十七日

御書勤



内務省告示第二五一号
 官定日記 明治三年五月十四日
 市ヶ崎川に於て...
 被仰付...
 備考 上記ノ年月日其地ノ記録ニ依リ推考スルニ本屋敷ノ氣穴屋
 敷下郡シタルモノナラズ
 尾張國津島郡

一 達し

一 我々病氣を過し病すよりしむる
 一 病を後遺症と云ふは...
 一 指原武道と云ふは...
 一 我々の病氣を過し病すよりしむる...
 一 病を後遺症と云ふは...
 一 指原武道と云ふは...
 一 我々の病氣を過し病すよりしむる...
 一 病を後遺症と云ふは...
 一 指原武道と云ふは...
 一 我々の病氣を過し病すよりしむる...

二月十七

義書

穿板

言と道徳

一 我々病氣を過し病すよりしむる
 一 病を後遺症と云ふは...
 一 指原武道と云ふは...
 一 我々の病氣を過し病すよりしむる...
 一 病を後遺症と云ふは...
 一 指原武道と云ふは...
 一 我々の病氣を過し病すよりしむる...
 一 病を後遺症と云ふは...
 一 指原武道と云ふは...
 一 我々の病氣を過し病すよりしむる...

二月十七

義書

成瀬先生
 竹橋先生
 石井先生
 高橋先生
 河合先生





言殿正保の方幸に作る。と載す。是も明曆三年御用地と成せり。明曆年録も、三年五月十四日明曆記三月三日尾張中納言殿御上屋鋪爲代地、桃町十丁目屋鋪被進之旨石河伊賀守に被仰渡之。清泰院下屋鋪入と見へり。是四ツ谷御門内の御屋鋪なり。又寛永板江戸繪圖前の御館の東に尾張様下屋鋪と記されど、正保圖よの載せず。明曆年録等よも御下屋敷の上りし事見へされは、恐くは前の御屋鋪に屬せる向屋鋪なと在しを誤り記せしならん。府内備考

〔參考〕 明良洪範ニ、

同年元和二年十二月、尾張義直卿當四月歸國セラレシニ、此時駿府ニ至リ久能山ノ神廟ヲ拜セラレ、夫ヨリ江戸ニ參勤有シ所、未江戸ニ居館ナキニ依テ、本多美濃守忠政ガ宅ヲ借テ暫ク居住シ給フ。賴宣卿ニモ、前ニ駿遠ニテ五十二萬石ヲ給リ、府中ヲ居城トシ給ヒ、此時同ク江戸ニ參勤有シニ、同様居館ナキ故、西丸下ノ邸下ヲ借テ居住シ給フ。之ニ依テ兩卿へ北ノ丸ニ於テ宅地ヲ下サレシカバ、早速造營有テ移ラセ給フト也。

〔附記〕 有馬氏邸

有馬左衛門佐直純

市街恢弘時代

附記
有馬氏邸

一、元和二年丙辰月日不詳。夫人及世子御同道ニテ江戸駿府へ參勤シ給フ。是年ヨリ御夫婦江戸ニ滯留シ給フ。

當時御屋鋪拜領ノ事ト思料スルモ、記録ナシ。——子爵有馬家回答直純時ニ延岡向日國。城主タリ。當時那邊ニ居住シタルヲ知ラス。

是頃金澤

賀國加。城主前田利常筑前守。本郷邸本市内ヲ賜フ。東邸沿革圖譜。

前田氏本郷邸事蹟

前田氏本郷邸 給賜年月明カナラズ。東邸沿革圖譜元和二三年頃ノ事ナル可シトス。姑ク茲ニ載ス。

本郷邸、神田邸并黒多門邸

舊簿ニ本郷ト云ヒ神田ト云ヒ二名ヲ舉ルヲ以テ、各邸ト世人卒爾ニ想像スレトシ、然ラス。同邸二名ト定着スヘシ。此故ニ三壺記ニ、神田邸前面ハ本郷町ヲ界ヒ、後背ハ不忍池ヲ界ヒ、數町四方ト云。是大約本郷邸ノ地境也。茲ニ不忍池ヲ後背ト云ナレハ、本郷邸内ニテ今ノ富山・大聖寺二邸ノ地ナト專ラ神田邸ト指セシ成ヘシ。明曆頃ハ本郷邸内ニテモ南ノ方ヲ中邸、東小屋ノ方ヲ下邸ト唱フアリ。東小屋ノ方トハ便チ富山等ノ邸也。サレハ神田邸ハ本郷邸中ニテ下邸ノヤウニモ想像スレトシ、明寛永ノ渡御ノ片、利常別墅ト東武實錄ニ載スレハ、別墅トハ下邸ニテ本郷神田ヲ併テ凡テ下邸ト爲ト見ユ。此比ハ辰口ノ蓋シ本郷邸其初頭ハ大久保相摸守忠隣上邸モ猶存スレハ、爾ク指ナルヘシ。藤田安藏筆記ニ、微妙ノ公酒井謙岐守ヲ招請ノ時、達摩亭ニテ露地ノ老松ハ大第也。久保相模邸ノ片ヨリノ樹ト語り玉ヘハ、相伴ノ内藤善齋誠ニ深山ニ似タル

前田利常筆蹟

原寸 横四寸五分 縦一尺七寸五分

東京 三宅長策所藏

「我ら事そや〜」 大きかちやく罷こし申ゆ。と、いまのちんざりの所、大ききそやうまへより十五六ちやうをさこなたにちんざり申て、きあいちやく御さいゆへ、やうふんゆさん御さなくゆ。兩御所様○德川家康・秀忠來廿二三日時分ニコ、もさへ御つきのよじ下見ユレハ、大坂冬ノ役ニ於ケル軍中ヨリノ書翰ナル可シ。十一月十五日ハ慶長十九年歟。

一、元和二年丙辰月日不詳。夫人及世子御同道ニテ江戸駿府へ參勤シ給フ。是年ヨリ御夫婦江戸ニ滞留シ給フ。

當時御屋鋪拜領ノ事ト思料スルモ、記録ナシ。子爵有馬家回答

直純時ニ延岡向日國城主タリ。當時那邊ニ居住シタルヲ知ラス。

是頃金澤賀國加城主前田利常筑前守。本郷邸本市内ヲ賜フ。東郷沿

前田氏本郷邸事蹟

前田氏本郷邸 給賜年月明カナラズ。東郷沿革圖譜元和二三年頃ノ事ナル可シトス。姑ク茲ニ載ス。

本郷邸、神田邸并黒多門邸

舊簿ニ本郷ト云ヒ神田ト云ヒ二名ヲ舉ルヲ以テ、各邸ト世人卒爾ニ想像スレド、然ラス。同邸二名ト定着スヘシ。此故ニ三壺記ニ、神田邸前面ハ本郷町ヲ界ヒ、後背ハ不忍池ヲ界ヒ、數町四方ト云。是大約本郷邸ノ地境也。茲ニ不忍池ヲ後背ト云ナレハ、本郷邸内ニテ今ノ富山・大聖寺二邸ノ地ヲ專ラ神田邸ト指セシ成ヘシ。明曆頃ハ本郷邸内ニテモ南ノ方ヲ中邸、東小屋ノ方ヲ下邸ト唱フモアリ。東小屋ノ方トハ便チ富山等ノ邸也。サレハ神田邸ハ本郷邸中ニテ下邸ノヤウニモ想像スレド、寛永ノ渡御ノキ、利常別墅ト東武實錄ニ載スレハ、別墅トハ下邸ニテ本郷神田ヲ併テ凡テ下邸ト爲ト見ユ。此比ハ辰口ノ蓋シ本郷邸其初頭ハ大久保相摸守忠隣上邸モ猶存スレハ、爾ク指ナルヘシ。第也。藤田安藏筆記ニ、微妙公酒井謙岐守ヲ招請ノ時、達摩亭ニテ露地ノ老松ハ大久保相模邸ノ片ヨリノ樹ト語り玉ヘハ、相伴ノ内藤善齋誠ニ深山ニ似タル

前田利常筆蹟

原寸 横四寸五分 縦一尺七寸五分

東京 三宅長策所藏

「我ら事そや、く、大きかちちく罷こし申ゆ。と、いまのちんさりの所、大さうそ、うまへより十五六ちやうなごこなたにちんさり申て、きあいちちく御さいゆへ、やうまんゆさん御さなくゆ。兩御所様(○)徳川家康・秀忠(來廿二三日時分ニコ、もさへ御つきのよし)下見ユレハ、大坂冬ノ役ニ於ケル軍中ヨリノ書翰ナル可シ。十一月十五日ハ慶長十九年歟。

ト申上ラルトアリ。達摩ノ亭名。慶長十九年甲寅正月忠隣湮祀、忠隣其罪ノ、説ハ狩野探幽達摩ヲ畫ク故ナリ。々紛如皆射覆ニテ、藩翰譜ニテモ明了ナラス。此月即チ井伊兵部少輔直政へ御預ケ、其後配所ニ於テ卒ス。年六十二也。失封録ニ云、相州小田原ニテ三万石也、其子七人殺害ヲ命ストアレ、藩翰譜ニハ全ク殺。其後廢地ト成アルヲ微妙公賜リ置ル、體ナレトモ、賜年害ノミトモ見ヘス。從前ノマ、ニテ篠箬草蔓茶然タリ。只守邸舍又ハ元和二年大坂兩役着落後、從前ノマ、ニテ篠箬草蔓茶然タリ。只守邸舍又ハ減獲ノ徒住居シ、其舍傍ニ茗園ヲ爲ノミナルヲ、寛永三年丙寅始テ四界ニ木墻ヲ環ラシ、明年丁卯千勝後稱富山侍從是也。宮松後稱大聖寺侍從是也。ノ二公子諸翁主及ヒ壽福孺人面々ノ座所經營有テ、金府ヨリ北癸此邸内へ移ラセ、且小田原町メツタ町ニ此二町名存ス。賃居セシ微臣ノ輩ヲ、此邸内ニ外廂ヲ構ヘ盡ク聚メ入置セラル。坊本是等ノコチヲ神田邸トナセ、只管本郷邸也。上文ニ記ス如ク、一邸二名ノ故也。茲ニ台徳大猷ノ二大君光臨有ヘキ内命ヲ以テ光臨殿造營ノ舉アリ。小幡宮内長監ス。今年四月ヨリ八月ニ至テ次。雨ナシ、我三州ノ諸民窮スルヲ以テ三州ノ人夫ヲ江戸ニケケ年ニノ殿閣落成。六年己巳四月二十六日三、壺見ヘ召シ、此造營ヲ爲シムト云。三ヶ年ニノ殿閣落成。六年己巳四月二十九日台徳大君光臨也。今東武實録并ニ渡御録ニ從フ。大猷大君光臨、同月二十九日台徳大君光臨也。兩渡御トモニ、東武實録ニ、利常別墅トアリ。又同録ニ、利常黎明九年壬申十二月辰口邸延燎シ、此災ノ一段三壺記等ニ詳ナレハ贅セス。其次第ヲ按ルニ、微妙公ハ神田邸陽廣公辰口邸ニ居マセシ。昭合ス。明年癸酉微妙公ハ神田邸ニ在テ

辰口邸經營ノ指法ヲ爲シ玉ヒ、此冬落成。既ノ十二月清泰夫人入興アリ。而ノ
 微妙公ハ尤神田邸ニ居玉フ也。十五戊寅年五月十八日大猷大君再ヒ此邸ニ
 光臨。此渡御ノ、前年內命有テ茨木小刑部ニ作事奉行ヲ命セラレ、露地中泉石假山
 造、成、富、見、亭、麻、木、亭、達、摩、亭、唐、笠、亭、三、角、亭、鳩、亭、等、建、ツ、大、君、駒、籠、へ、放、鷹、夫、ヨ、リ、本
 郷、背、門、ヨ、リ、書、院、へ、光、臨、饗、應、ノ、後、露、地、上、覽、碾、茶、敬、供、其、後、子、小、將、躍、上、覽、有、テ、又、背、門
 ヨ、リ、歸、御、右、謝、ト、シ、微、妙、陽、廣、利、次、利、治、ノ、四、公、登、城、ア、リ、此、光、臨、ヲ、多、ク、神、田、邸、ト、舊、記
 ス。然、レ、此、露、地、ノ、亭、名、等、皆、本、郷、邸、也。サ、レ、ハ、本、郷、神、田、一、邸、ニ、名、ナ、ル、ト、是、等、ヲ、以、テ、モ、愈、明、證、ヲ、取、ヘ、シ、也。十六年己卯微妙公養老有テ
 毛此節ニ居玉フ也。正保元年甲申二月六日犬千代松雲公也。社參後ノ中憩慶安元
 年戊子四月十七日八條宮親王。光臨皆神田邸本郷邸トモアリ。是レ一邸ノ
 故也。三年四月十九日富士塚此地今ハ本郷ヨリノ回祿ニ此邸延燒。三壺記ニ、今
 五町加賀下屋敷或ハ道筋ニ富士塚トテ小山アリ、其邊ノ小屋ヨリ出火シ、忽チ加賀
 ノ長屋ヲ打越ヘ、或ハ書院居間台所其餘亭山藏小屋長屋等轉火シ、申刻ニ火止ム。此
 時微妙公觀盡ク焚失トイヘ、曾テ驚キ玉ハス。露地ニ在マシ江戶大火風樹ヲ移サ
 シメ自若タル尊容也。但シトイヘ、匠人ヲ浪花ヘ走ラセ、未タシ江戶大火風樹ヲ移サ
 ナキ内ニ其材多ク買取ラレ、手ヲ空ク而シテ延燒ノ諸侯ヨリ後レテ浪花ヘ買ニ
 向者既ニ其材多ク買取ラレ、手ヲ空ク而シテ延燒ノ諸侯ヨリ後レテ浪花ヘ買ニ
 ツノ上ニ救火ノ衆火ヲ防ク、山ノ如シトアリ。案ルニ、此時未タ辰口邸ニ屬スレ
 尺、只管此邸ニ犬千代公土藏モ築キ有シトアリ。此山形ニ似タルノ山富士ト稱カス。
 ハトテ前ノ書院ヲ富士書院ト名ケラルトアリ。此山形ニ似タルノ山富士ト稱カス。
 謂ニ非ス、富士山見ユルヲ以テノ名也。所謂育徳園中八景ノ一ニ、富士ニ似タルノ名ノ
 松雲公此園ニ林學士ヲ始メ、千切士峯冠我州、觀中、凝望、喜同、遊斯、時記、得宋、瀛、句、六、月、雪
 云者是也。即チ剛伯學士詩ニ、千切士峯冠我州、觀中、凝望、喜同、遊斯、時記、得宋、瀛、句、六、月、雪

花酒寸眸是也。此戊寅光臨ノ時、富士社ノ地モ繼賜ルカ。然レ、下ノ文ノ万治二年ニ、本
 郷五町目ト六町目ト町家片側、永代買求セララルトモ有テ、彼是混シノケレハ、參考ス
 へシ。此圖ニ、富士山又富士社ノ遺跡ト。利次利治二君ノ館ハ、此地ト多分所不詳ナリ。今
 云所モ見ユ。是等古ノ富士社ノ遺跡ト。利次利治二君ノ館ハ、此地ト多分所不詳ナリ。今
 穴ヲ脱スルユヘ、微妙公ハ黃昏ニ至リ利治君ノ第館ヘ動座也。利治君在國ニ
 日松平安藝、侯前田右近大夫、織田出雲、小堀左馬溝口、金十郎、岡田將監、横山内記、本多
 帶刀等ヨリ人歩千五百許來リ、灰燼ヲ棄去リ、興造ノ地勢ヲ平均ス。我臣佃源、太左衛
 門松平半右衛門、西村彦兵衛、今茲五月十九日公ハ利治君第館ヨリ東發、小松ヘ還
 衛、富田七兵衛等之ヲ監ス。今茲五月十九日公ハ利治君第館ヨリ東發、小松ヘ還
 城、此行東海道也。尾州熱田ヨリ乘。四年辛卯東轅、利次君ノ第館ニ寓居シ玉フ。去
 船、太田ヘ上陸、關原ニ宿シ玉フ。四年辛卯東轅、利次君ノ第館ニ寓居シ玉フ。去
 年首夏燔後ノ新築未タ全ク成サルヲ、今夏四月大君大猷。薨セララルヲ以テ、彼
 是八月ニ至テ觀閣落成シ、此月二十一日公便チ利次君ノ第ヨリ移徙也。明曆
 二年丙申四月八日此新閣ニテ鼓吹ヲ命ス。此月十一日辰口邸ニテ迎賓。三年丁
 酉正月十九日ノ回祿ニ辰口邸燬失シ、少將公松雲公。災ヲ本郷邸ニ避ク。此避災
 道、大和橋邊ニテ、此橋本町通リ今川橋邊ニアル小橋ト云。森美作守鹵簿ト水戸宰
 相賴房卿世子頭搭ノ者ト、鳶口ニテ打爭ヒシ、松雲公夜話録ニ見ユ。此祝融
 江戶古今大災ナレハ本文關係セストイヘ、因ニ其大畧ヲ記ス。○此火十八
 蓮、宗本妙寺ヨリ出火、湯島六町殘ラズ、駿河臺鷹匠町大路、鎌倉河岸、一石橋、鞆町、八町
 堀舟藏、靈岸寺、今ノ靈岸島ノ地ナリ。夫ヨリ海濱ニ至リ、佃島、石川大隅守、今ノ石川島
 ナリ。其外村屋皆燒却未ノ刻ヨリ西風ト變シ、神田、明神等、村松町、柳原、和泉橋、須田町
 市街恢弘時代

ノ火、逸シ、官道通リ町焼ケ、火岐ノ二道トナリテ西本願末寺邊燒却、本町ノ火ハ傳馬町ニ轉シ、淺草門ニ至ル。夜子ノ刻ニ及ヒ、官藏盡ク燒却、深川村屋等舉テ焦土トナル。十九日北風、猶烈、小石川傳通院。此日松雲公ノ邸閣モ延燒ス。夫ヨリ常盤橋鍛冶橋數官廩、天守、二郭、盡ク燒。此日松雲公ノ邸閣モ延燒ス。夫ヨリ常盤橋鍛冶橋數奇屋橋八重州、海岸、長崎、町、橋、新橋、木挽、町、材木、町、水谷、町、尾州、紀州、二侯、邸、延燒シ、鐵炮洲、橋、燃、通、リ、海、岸、至、ル、町、既、ニ、西、ノ、刻、也、此、日、申、ノ、下、刻、糍、町、五、丁、目、ヨ、リ、出、火、シ、山、王、天、極、テ、火、風、共、ニ、止、ム。兩、日、外、櫻、田、邊、愛、宕、下、增、上、寺、ノ、十、町、余、芝、口、三、町、ヨ、リ、燒、ケ、海、ニ、極、テ、火、風、共、ニ、止、ム。兩、日、外、櫻、田、邊、愛、宕、下、增、上、寺、ノ、十、町、余、芝、口、三、町、ヨ、リ、燒、ケ、詳、也。是、ヨ、リ、直、ニ、本、郷、邸、ヲ、座、所、ト、改、定、ア、リ。今、年、牛、籠、邸、官、へ、上、リ、其、易、地、駒、籠、ニ、テ、四、万、步、猶、殘、步、二、万、步、ヲ、本、郷、邸、南、續、キ、近、藤、登、之、助、對、ヒ、本、多、丹、下、朝、比、奈、左、近、坪、内、惣、兵、衛、三、士、ノ、官、建、第、ヲ、交、收、セ、ラ、ル。年、表、ニ、本、郷、南、ノ、方、近、藤、登、之、助、向、敷、殘、ト、ア、リ。又、一、舊、記、ニ、登、之、助、向、ヒ、同、心、屋、敷、二、万、步、牛、籠、邸、易、地、ト、ノ、賜、ル、ト、ア、リ。是、所、也。又、一、書、ニ、二、万、二、千、九、百、四、十、二、坪、七、合、口、勺、明、曆、三、年、七、月、十、日、本、郷、邸、大、門、前、筆、記、ニ、ハ、幸、此、度、天、守、台、興、造、之、助、頼、マ、セ、ラ、ル、數、ノ、所、ヲ、望、マ、セ、ラ、レ、二、呼、寄、置、ル、人、夫、居、所、ノ、爲、メ、大、門、前、ヨ、リ、近、藤、登、之、助、頼、マ、セ、ラ、ル、數、ノ、所、ヲ、望、マ、セ、ラ、レ、二、呼、寄、置、ル、人、夫、居、小、屋、ヲ、作、ラ、セ、三、州、郡、方、ノ、人、夫、ヲ、入、置、セ、ラ、ル、ト、云、フ、同、所、也。又、明、曆、ヨ、リ、此、頃、本、郷、内、テ、受、取、セ、ラ、ル、是、牛、籠、邸、ノ、見、地、六、万、步、ノ、内、成、ユ、ヘ、此、二、万、步、ノ、所、ヲ、中、邸、ノ、近、藤、氏、向、ヒ、且、此、所、ヲ、中、邸、ト、唱、フ、カ、ユ、ヘ、夫、ニ、對、ノ、東、小、屋、ノ、方、ヲ、下、邸、ト、唱、フ、ヘ、習、ヘ、ル、カ、其、後、此、中、邸、ノ、唱、号、何、比、ニ、至、リ、テ、失、シ、ヤ、考、フ、可、カ、ラ、ス。又、一、書、ニ、九、万、七、千、六、百、步、余、七、千、六、百、九、十、二、步、ト、云、フ。本、郷、邸、井、中、之、邸、共、總、步、高、ニ、ノ、其、内、ニ、富、聖、二、侯、ノ、邸、步、ア、リ、之、又、此、上、ニ、苗、木、山、金、助、丁、續、其、頃、ハ、苗、木、山、ト、云、今、湯、島、五、町、目、ノ、裡、本、郷、境、ニ、ア、リ、其、頃、ハ、苗、ノ、地、三、木、ヲ、栽、置、地、ナ、ル、ヲ、以、テ、此、名、ア、リ、今、其、所、苗、木、組、ト、テ、先、年、炮、卒、ノ、第、ト、成、ノ、地、三、

千步許、ハ、松、雲、公、夜、話、錄、ニ、ア、ル。ヲ、前、田、帶、刀、注、既、錄、作、又、兵、衛、同、人、也。其、傳、牛、籠、坂、ノ、名、ア、リ。疑、ク、ハ、此、時、公、苗、木、山、ノ、地、ヲ、賜、リ、帶、刀、ヘ、附、與、シ、玉、フ、マ、テ、ハ、此、又、兵、衛、坂、ノ、地、ニ、帶、刀、ヲ、置、セ、ラ、レ、シ、遺、名、ナ、ル、カ、然、レ、ハ、猶、識、者、ヲ、驗、テ、論、定、ス、ヘ、シ。第、二、願、

ヒ、取、セ、附、與、シ、玉、フ、便、チ、今、ノ、又、吉、第、是、也。近、年、ノ、江、戶、武、鑑、ニ、湯、島、四、町、ノ、裏、御、茶、出、羽、守、父、見、ユ、是、ト、不、可、混。萬、治、元、年、戊、戌、七、月、二、十、六、日、松、嶺、夫、人、小、松、君、公、斯、

邸、へ、來、嫁、也。保、科、肥、後、侯、ノ、令、愛、也。但、シ、此、入、與、テ、舊、記、ニ、神、田、邸、ヘ、ハ、本、郷、邸、ヘ、ト、モ、ル、ニ、本、郷、邸、中、ト、イ、ヘ、ハ、微、妙、ノ、座、所、ト、專、ラ、神、田、邸、ト、云、シ、ト、想、ハ、ル。然、レ、ハ、公、今、年、十、月、小、松、邸、ト、イ、ヘ、ハ、神、田、邸、ノ、座、所、ト、專、ラ、神、田、邸、ト、云、シ、ト、想、ハ、ル。然、レ、ハ、公、今、年、

神、田、ノ、邸、名、ハ、見、ヘ、ス。又、強、解、ナ、ガ、ラ、仔、細、ニ、本、郷、ノ、地、體、ヲ、辨、セ、ハ、今、ノ、本、郷、邸、殿、ノ、地、ヨ、リ、山、ヘ、カ、ケ、西、ノ、方、ハ、一、段、地、高、ニ、テ、是、本、郷、ノ、地、體、成、ヘ、シ。又、本、宅、及、ヒ、梅、殿、ノ、地、ヨ、リ、

貸、小、屋、及、ヒ、富、山、大、聖、寺、ノ、界、ヘ、カ、ケ、テ、一、段、地、低、シ。此、高、低、ノ、際、ニ、小、河、ア、リ。此、河、ヲ、界、ト、呼、ビ、公、ノ、居、館、モ、湯、島、郷、内、ニ、在、シ、ユ、ヘ、神、田、邸、ト、云、シ、成、ヘ、シ。又、本、郷、ノ、南、邸、ノ、二、万、步、

ハ、明、曆、三、年、賜、ル、地、ニ、湯、島、郷、内、ニ、在、シ、ユ、ヘ、神、田、邸、ト、云、シ、成、ヘ、シ。又、本、郷、ノ、南、邸、ノ、二、万、步、ナ、ル、ヘ、シ。松、嶺、夫、人、ノ、來、嫁、モ、今、ノ、本、宅、ノ、地、ト、見、ハ、神、田、邸、ヘ、入、與、ト、云、モ、妨、ケ、ナ、カ、ル、

ヘ、シ。又、本、郷、ハ、富、士、社、ノ、生、地、ユ、ヘ、元、祿、三、年、九、月、十、一、日、勝、丸、公、國、始、テ、社、參、ノ、代、并、富、士、社、也。富、聖、二、侯、ノ、地、ハ、湯、島、郷、内、ニ、在、シ、ユ、ヘ、湯、島、郡、本、居、神、田、邸、ヘ、入、與、ト、云、モ、妨、ケ、ナ、カ、ル、

ト、ス。是、等、亦、本、郷、邸、ハ、二、郷、ニ、跨、ル、證、也。郡、ハ、湯、島、郡、本、居、神、田、邸、ヘ、入、與、ト、云、モ、妨、ケ、ナ、カ、ル、カ、ユ、ヘ、ニ、一、年、己、亥、本、郷、六、町、東、ノ、方、表、口、京、間、五、間、背、面、へ、廿、間、表、通、リ、同、間、代、

金、二、百、兩、ニ、永、代、買、取、セ、ラ、ル。尺、背、面、二、十、町、並、ノ、我、門、ヨ、リ、我、邸、ノ、土、牆、マ、テ、表、口、九、

左、ニ、百、坪、買、取、三、十、坪、ワ、タ、シ、下、サ、レ、殘、テ、七、十、坪、ノ、所、是、ナ、ル、ヘ、シ。尙、可、參、考。同、五、町、正、門、

前、町、家、間、數、表、口、五、間、半、背、面、二、十、間、ノ、所、代、金、六、十、五、兩、ニ、買、取、セ、ラ、ル。但、シ、代、市、街、恢、弘、時、代、

金永代買取セラレトアリ。天和二年壬戌十二月二十八日ノ回祿ニ、此邸屢延燒也。此時上使等ノ爲ニ、焦跡ニ飯屋ヲ造レリ。公。明年癸亥ヨリ本郷ヲ上邸ト号ス。及ヒ諸翁主等ハ駒籠邸ニ飯屋成テ移居也。

貞享四年本郷邸閣造營落成、九月十九日徙移ト年表ニ見ユ。元祿四年辛未此邸盡ク延燒。此時公中邸龍騎へ避火公ノ夜話録ノ十五年壬午四月二十六日大君公常憲此邸へ光臨也。十六年癸未十一月二十九日此邸屢又延燒。本郷六丁目ヨリ出。這時前年ノ光臨殿モ併セテ烏有トナル。光臨殿園内八千余畝。十四年二月間宮諸左衛門ヨリ此造營金中勘不復。以上本郷邸鬱攸ニ罹ル四タヒ也。步數今十万三千八百二十二坪。内一万八坪六步富山侯邸。五千七百六十二坪大聖寺侯邸也。年表ニ九万七千六百二十二步云。此分年月又舊記十万三千八百二十五坪八分七厘トアリ。然尺是亦今ト異數アリ。本文所舉ハ當時官。斯外ニ本郷六丁目町屋敷。表間口京尺五間、裏行二十間二尺也。テ是即今ノ御物見所ノ地也。按ルニ此坪餘ノ地ハ、万治二年永代被召上、百坪ノ地ニ一坪餘過數ナレ尺同地成ヘシ。百一坪五合三夕八撮、本郷上邸接壤ユヘ圍コミノ旨上達ト也。按ルニ本郷ノ邸名ハ其地本郷々内ナルユヘ成ヘシ。神田ノ邸名ハ湯島ノ神田明神ト相距ルコト不遠ユヘ成ヘシ。後輩ノ臆度ヲ以テ邸名ノ神田ト云ヨリ神田橋等ニ取テ辰口邸ヲ神田ト云シカト狐疑スレトモ、此神田邸ノ名ハ元和二年神田社ヲ湯島へ轉社後ノ名也。或ハ又神田邸ハ切通邸ヲ云シカト疑ヒ、又筋違邸ノカトモ疑ヒ、種々臆說ヲ附シ、我ヨリ古ヲ強ユ、皆失當ナリ。

附 黒多門邸

黒多門邸ノ名古ヘアリ。是本郷邸内ニ界墻ヲ以テ區別ヲ爲ノミ。按ルニ本郷邸内ノ證人第跡是也。証人第ナルコトハ即チ延寶八年庚申ノ江戸圖ニ見ヘテ、黒也。此郷邸并ニ中ノ御邸トモ總高ニシ、内一万三千步餘、大藏大輔君延寶二年ノ襲封百步餘、飛騨守君邸トアリ。是祇庸注ノ、此中ノ御邸トハ所謂黒多門邸ナラント。此説ナラン。證人チ牛籠邸ニ置カレシコト、舊簿ニ見ユレハ、牛籠邸返上後、此郷ニ證人チ置ル、ヤウナレ尺、左ニハ有可カラス。延寶八年發行ノ江戸圖ニ張アリ。一ハ一枚二口圖ヲ舉テ精密ナラス。本郷邸内ニ松平加賀松平大内藏飛騨二君、二邸ノ間ニ證人等介折本ニテ精細也。本郷邸内ニ松平加賀松平大内藏飛騨二君、二邸ノ間ニ證人等介マナレリ。然レハ寛永三年丙寅、利次利治ノ二君、初テ本郷邸ニ移館アルコト、自然ニ明カナリ。今茲小田原町等ニ賃居セシ臣士ノ輩ヲモ、本郷邸ニ置レシト見ユ。サレハ是證人第ヲ、此郷ニ置レシ起元成ヘシ。因ミニ證人ノ高緑長臣ノ子弟男女ヲ、江戸へ出ス始リ、神君慶長五年庚子命令ニ依ル。年季涉歴、期滿レハ交代ノ金澤ニ歸ル。此證人ハ大氏戰國ノ人實ノ如シ。多分無息、或ハ女子ヲ出ス。横山外記氏從譜ニ、二歳ノ出サレ、亡兄式部遺知、四年丁亥、證人ノ期滿テ歸リ、直ニ小松ニテ謁見、懇言ヲ賜ヒ、金澤へ歸ルトアリ。其證人ニモ既ニ記ス。寛文五年乙巳、諸列侯ヨリ出シ置證人、台命ニテ止ノ後モ、此郷ノ證人小屋等ハ、從前ノ如ク廢セラレス。聞番 治中始リ、役料知二百石賜リ、妻子等江戸へ引越ト云。其後貞享四年丁卯、引越ノコト止、料金六十兩ト改賜。元祿二年己巳、轉メ大小將ヨリ勤ム。享保十一年丙午、開番ヲ物頭並ノ命令有テ、役料知百五十石ヲ賜フヨリ、之 其它輕卒小人等ヲ置ト見ヘ、此所ニ彼等ニ倣フ。但シ近年ハ、組頭並ニモ至ル。居住ノコトアリ、右前後ノ頃、此郷ヲ黒多門邸ト唱ヘシ成ヘシ。黒多トハ、濫黒市街恢弘時代

ヘシ。多トハ、江戸ノ俗言、今モ常ニ云フナリ。黒田家ノ黒ク塗タル門ヲ、似セル義ニハ有ヘカラス。這黒門、此邸ノ總門タリシユヘ、此邸名ヲ貢フナラン。此總門中ニ富聖ニハ候ノ各邸アリ。按ルニ天和癸亥、黒多門邸ヲ、練替ララルトアレハ、此地前面三十七間、此時此門ヲ東ヘ少シ繰下ケ、直ニ總門ニ用サセラルナラン。此地前面三十七間、後背三十九間、横東五十間、西五十九間、併テ二千零七十一歩也。天和三年癸亥八月今年筋違邸、并切通邸、官ヘ歸スレハ、本大聖寺侯第ト、練替ラレテ、當時大聖郷邸内ニテ、彼是也。割替ノ事當レリ。寺侯第ノ内也。此練替ノ片、大聖寺侯第ノ隣地ニ在シ。寺屋鋪ヲ、富山侯ヘ引上ラルト、黒多門邸ノ舊記ニ載ス。是今ノ總門邊ナルカ。

東都邸沿革圖譜

加州家屋敷、嚴有公御代の頃迄、神田明神の坂下今旅籠町といふ方へりきて居住なまし。然るも或時藤堂大學頭高次振舞ふ參られしせつ、亭主加賀守申され候に、此書院の明神の坂より往來の者見込ミ以て、扱々おほりゆと之。その時大學頭無双活機の大將故、その挨拶、左の身共り本郷の屋敷を進むへしと有りなれ、亭主それの忝存、彌申請應しとて移らせしもの、今の加州家本郷の上屋敷是。藤堂家の、右に記スこと、元來屋敷數ヶ所所持ゆへ、其の神田の本館をも相對替ニもせまりしゆへ、公儀へ上り候まや、悉く町屋と取りぬり。是即神田旅籠町也。此時加州家が、大屋敷もらされ、報禮として、兩使を以夥しき進物品々送らせし處、大學頭忝しと受納せらせ、扱その

兩使は、加州家より送られぬ五増倍程のものをくれられぬ。其品々の内は、珍らしき作の腰物兩使ニ送られしところ。大學頭大氣をへてかくのどくは事よ南川物語ゆへ、不捨して書置なり。又具元按まると、加州家へもらされぬ、加賀家開基利家大納言より四代從四位下左少將筑前守光高朝臣なるへし。此人は大猷公の六女を被嫁て、公義の御智とし、多繁花榮曜限り取りし之。加州家上屋敷も、明曆三丁酉年大火前までの常盤橋の内大手通り南側也。然らば加州家神田の屋敷を別館とて、是亭へ大學頭を筑前守招請せられ、その事あるへし。然らば明曆よりよほど以前の事也。加州家本郷は、大屋敷得らるる後、その息の從三位宰相綱紀代に至り、明曆大火後、御三家始御城外に大館移され候せり。加州家も今の本郷屋敷へ移られぬるものと知るへし。大猷公の慶安四辛卯年四月廿日御他界也。是明曆三の大火以前五ヶ年也。然るも加州筑前守光高、大猷公御存在の時、三十一歳よ早世せられし之。此時正しく上屋敷常盤橋の内よ、此亭よおひそ光高卒去也。然ルも其向ふ屋敷は、越前開基秀康中納言の息參議從三位伊豫守忠昌在住せらせたり。是正しく大猷公の御從父兄弟とし、御親切他よならひ取し。公儀より御思召深りしり、

此人殊の外れ大酒にて在之候也へ、光高朝臣死去の翌日、大猷公より堀田加賀守正盛を上使とし、御内意被仰下候に、其方儀格別、御太切、被思召候、夫より昨日筑前守早世に付、其方常々大酒にて在之候間、唯是の御案し被遊、向後、大酒相止められ様よとの上意也。此時伊豫守短冊召寄せ、一首の狂歌を書き御返事申上られぬる也。

むりひなる加賀の筑前下戸取れど、三十一てきのふ死よたり。

大猷公此狂歌を上覽りて御笑ひ被遊、玄やうおとも取しとささし置れしと之。此事故木村高敦談之。此伊豫守居館も、明暦の大火後、靈岸島の屋敷に移り、代々居住の處、文昭公の御代以來正徳の頃、彼家六代從四位下左少將伊豫守始メ大炊頭吉邦朝臣、ぬたゝひ常盤橋の内、屋敷を拜領し、是より移り、至于今本館あり。

加州筑前守光高朝臣の簾中、實、水戸權中納言光國卿の息女、大猷公御養女とせられ入興せしめ給ふに、彼朝臣早世後、今世尾州家本館の後北方より住せられてあざし故、至于今その跡の地を加賀やしきと俗唱する也。法名清泰院と申ス是取り。

参考落穂集

附記
前田利孝

〔附記〕 前田利孝邸

一、寛永九年十二月二十九日江戸龍口上邸延焼。其後度々回祿ニ罹リ、載籍焼亡、諸事審ナラズ、下賜ノ年月不明ナルモ、賜封ハ元和二年十二月二十六日ナルヲ以テ、或ハ其當時ナルベシ。男爵前田家回答

往古江戸繪圖龍口細川氏邸ニ隣リテ「前田大和」利ト有ル者是歟、藩翰譜ニ、

大和守菅原利孝は、大納言利家の四男、將軍家より別に所帯を賜ひぬ。上野ケ市の地壹萬石。世に傳ふる所、利家が舍弟、前田右近秀繼といふ。此大和守利孝其世繼となりし也。其後利長の母芳春院と申せしが、徳川殿へ參られし。大和守利孝孝極へ給ひ、かの母にも壹萬石の地を給ひし。又土方河内守雄久も、上野七ヶ市下し給ふ。此土方ハ、利長ゆかりの人にて、此度利長と共に北陸を領し、つめし賞に與ふ。此時、老母關東に在れば、其便よからん爲に、利長望て、土方が領し、加賀の地と守に芳春院と傳領せしといふなり。大和

〔参考〕 邸宅買収

邸宅ノ交換給賜等、元和ノ初頃ヨリ已ニ買収ニ由ル者少ナカラサリシハ、細川家記左ノ如ク記スヲ觀テモ、其一斑ヲ推ス可シ。當時細川家ハ、忠興細川ノ意見ニ基キ、隣邸前田利孝邸ノ買収ハ之ヲ中止シタル者ノ如シ。

一、六月元和二年。和。忠利君細川。より江戸表之事、追々被仰上細川ニ付、同廿八日御書之内、

○中署

一、屋敷之儀被申越ひ竹中門。○重屋敷之道を隔ひ間、取申まじくは。朽河

木元。屋敷被望ひ由被申越ひ間、此屋敷被主付ひへと申遣ひ。何分屋敷と

らむ、地形つきあそたてらむは、十五貫目二ある中、調ははしく

は。其上人を不被遣を、第一徳ニは。是非是を被取ひへ。我等へ程近ひ間、樂

之ためにては由、され、のさかも申遣ひ。猶々異見可被申ひ。此屋敷於

被主付ひ、我等借り銀子之内少の用ニ立可申ひ事

一、堀淡路屋敷の、餘ニ高まりは。金子貳拾四五枚之内外ならひ取可申ひ。

然の藤泉○藤堂高虎へ、其方銀子からを渡ひ、可被受取ひ。我々と約束ニあ

は間、此由被申ひ、銀子の何れともかされ可申ひ。曾又左屋敷之儀ニ、

せい入ひ由、いよく相談めさるへくは事。○中署

一、此比忠利君、追々江戸へ被仰上ひ趣ニ付、七月十日、同十九日、八月十日、

同廿九日之御返書等之内、○中略

一、屋敷之儀、先度も被申越ひ。則人を遣し、定る可爲參着ひ。就夫藤泉州被

語ひへ、泉州則被申上ひへ、何方ニあるも、替屋敷可被下由御詮之由、先

以忝儀ニは。我々初る望申屋敷の、堀伊賀屋敷ニあるは。何とて前田大和利

孝。屋敷と被申上ひ様ニの仕あされは、一興成儀ニは。明屋敷を望ひの
て、ぬしのある屋敷を望ひ様ニ可被思召ひ。其上前田屋敷の高く可有之
は。旁不可然事ニは間、前田無何心分ニある、被打置事成ひ、其分ニ可被
仕ひ。とても買ひ程ならひ、堀淡路屋敷ましにては。兎角先書ニ如申ひ。屋
敷を仕度ひ間、可被得其意は。但遠路ニあるは間、跡ニ何と成共成ひ、可
爲其分は事。

鳥越市街創設

是年○元和二年(紀元二七六年)。神田川北岸鳥越村○市内ヲ拓開シテ、淺草平右衛

門町、淺草瓦町○市内及神田久右衛門町藏地○市内ヲ起立ス。○政町文

内方書上。府誌殘編。

鳥越市街創設事蹟

鳥越市街創設 元和二年鳥越村ニ平右衛門町其他ノ市街ヲ創ス。神田川掘替

ノ土砂ヲ以テ沮洳地ヲ整理シタル結果ナル可シ。

淺草平右衛門町

一、右町之儀、往古武州豊島郡峽田領鳥越村之内ニ御座候處、私先祖三枝平
右衛門儀、天正十八庚寅年八月、權現様御入國之節、御供仕御當地に罷下り、當
所ニ住居仕候様被仰渡候。其後元和二丙辰年月日、不相知、台徳院様淺草寺に

市街恢弘時代

御成之節、右三枝平右衛門并悴平八郎御前に罷出候處、此所町屋ニ取立可申旨蒙上意、町名之儀ニ、平右衛門住居之地ニ付平右衛門町ト附可申旨、拜領被仰付、同年月日不知、町御奉行米津勘兵衛殿政。田、島田彈正殿利御越被成、町年寄三人、地割方木原勘右衛門、并右平右衛門立合ニ、淺草橋御門外東西ニ、而地所御割渡有之、則平右衛門草創人ニ、追々町屋ニ取立、平右衛門町ト相唱申候。其節之間數、淺草橋御門ト西之方惣間口五拾間半、東西共裏行貳拾間、東之方惣間口九拾九間、西裏行貳拾間貳尺三寸、東裏行貳拾貳間四尺五寸、何レ也、片側町屋ニ、右西之方を上平右衛門町、東之方を下平右衛門町ト、其節ト里俗ニ唱來申候。然ル處、其後年代不知、上平右衛門町後ト松平中務少輔殿御屋敷ニ被下置候節、地尻御屋敷ト圍込ニ相成候ニ付、裏行縮り、西之方ニ六間半、東之方ニ、而拾七間半ニ相成候旨、寶永年中書留ニ相見ト申候。右中務少輔殿御後チ千次郎殿御屋敷ト、享保十巳年十月上ケ地ニ相成申候。

但、右上平右衛門町、下平右衛門町之儀、町用等古來ト振分相勤來り候ニ付、上下町分ニ仕、委細申上候。

〔存等〕平右衛門町之儀ト、古町ニ付、御代替り御昇進御轉任其外格別之御祝儀ニ、而

御能有之、御本丸於御白洲、町人拜見被仰付候節、先例之通、平右衛門町ニ、而貳拾人罷出、御能拜見仕、瓶子御酒御菓子并傘頂戴仕候。且拜見相濟候後、御月番町御奉行所ト被召出、拜見之者壹人前錢壹レ文宛、平右衛門町分貳拾レ文、外ニ月行事ト錢壹レ文被下置候。右貳拾人割合方、古來ト上平右衛門町ニ、而七人、下平右衛門町ニ、而拾三人、右ト家持家主共之内罷出拜見仕候。

一、古來下平右衛門町之内、表間口七間貳尺壹寸之地所、同町後ト松平日向守殿御屋敷ニ、而御座候節、年代不知、右之地所御屋敷ニ、而御買求被成、表御門通行路ニ御座候處、拜領地面ニ被成度旨、御願之上相濟、元祿十三庚辰年七月三日、地渡有之、右ニ付町役御免ニ相成候旨、同日町年寄喜多村彦右衛門方ニ、而名主平右衛門ト申達有之候。右日向守殿御後チ市正殿御屋敷ト、享保三戌年十二月類燒後上ケ地ニ相成申候。

一、享保三戌年十二月十一日上野ト出火之節、下平右衛門町并寂寄町々共類燒仕、同月十七日町御奉行大岡越前守殿御番所ト類燒町々名主共被召出、此度御用地ニ被召上候間、當分之小屋ト格別、普請等仕間敷旨、町人共ト申渡候様被仰渡、翌十八日御普請御奉行朽木丹後守殿御出被成、類燒町々檢地御改

有之、同四亥年四月廿二日松平市正殿御上ヶ屋敷跡ニ有、下平右衛門町跡退り、代地被下置候。元和二丙辰年々享保四亥年迄九拾九年目引地ニ相成申候。然ル處町人共是迄河岸附ニ有渡世仕居候處跡退り代地被下置候以後、商賣物差置可申處も無御座、難儀仕候ニ付、河岸並ニ土藏相建、商物入置申度左候ハ、出火之節火移り不申、川向之防ニも相成候間、御用地ニ被召上候元地ニ有藏地拜借地御免被成下候様、享保四亥年七月十一日町御奉行中山出雲守殿御番所ニ町人共一同奉願候處、御用地ニ相成候場所ニ候間、朽木丹後守殿ニも相願候様被仰渡、則奉願、其後出雲守殿御番所ニ有追々御詮議之上、同年十二月廿五日同御番所ニ一同被召出願之通藏地拜借地ニ被仰付、河岸通ニ有幅五間之道を付、土藏地之儀之與行八間ニ、柳橋東西ニ有長七拾七間半ニ仕、藏建候儀、一棟ニ拾間ハ長ク不仕、藏ニ有藏ニ之間三間程宛明ケ可申旨、被仰渡、同五子年正月廿一日地所御割渡有之候處、猶又土藏一棟五間ハ長ク不仕、藏ニ有藏ニ之間、九尺宛明ケ候様可致旨、同年四月七日町年寄奈良屋市右衛門方ハ申達有之、銘々土藏相建申ハ所藏地より家前迄之間、場廣ニ有往來も薄ク、夜中不用心ニ有之、殊ニ大川通御成之節、人拂人留等之儀取ベリ惡敷ハ間、

貳間四方宛之商床拾五ヶ所、藏地前通りハ御免被下度段、享保二十卯年五月中大岡越前守殿御番所ニ町人共奉願候處、同年七月六日同御番所御内寄合ニ被召出願之通被仰付、同月十一日商床地所御割渡有之候。

一、享保十巳年十月上平右衛門町御用地ニ被召上、松平千次郎殿御上ヶ屋敷跡ニ有跡退り代地被下置ハ御沙汰御座ハニ付、右之通被仰付ハ儀ニハハ、拜借金五百兩御下ヶ被成下、十五ヶ年賦ニ返納仕度段、町年寄奈良屋市右衛門方迄、町人共一同申立候處、同年十二月十八日大岡越前守殿御番所御内寄合ニ被召出、上平右衛門町御用地ニ被召上、代地之儀之松平千次郎殿御上ヶ屋敷跡ニ有被下置、右ニ付金三百兩町人共ハ拜借被仰付、返納之儀之、願之通十五ヶ年賦ニ被成下ハ旨被仰渡ハ、然ル處町内裏行短ク難儀仕ハ間、此度代地被下置候場所地尻之儀、先年町並之通り、裏行貳拾間ニ被成下ハハ、爲冥加沾券金高通り九拾九兩ハ銀四匁三分上納可仕ハ間、町内買上地ニ被仰付被下度段、享保十一年年正月十九日ハ追々奉願ハ處、同年三月町年寄奈良屋市右衛門方ニ有願之通被仰付ハ段申達有之、同月十五日跡退り代地并地尻買上地共御割渡ニ相成申ハ、元和二丙辰年より享保十一年年迄百六年目引

地ニ相成申。然ル處川端ノ家前迄之間、場廣ニ有往來も薄く、夜中不用心ニ有之、殊ニ大川通御成之節、人拂人留等之儀取リ、惡敷ハ間、貳間四方宛之商床拾貳ヶ所、河岸並ニ御免被下度段、享保二十卯年十一月中大岡越前守殿御番所ハ町人共奉願ハ處、翌元文元辰年二月十八日御内寄合ハ被召出、願之通被仰付、同月廿五日商床地所御割渡有之。

一、天明四辰年十二月中右上下平右衛門町河岸通藏地并商番屋有之ハ地所町内ハ買上、町屋又ハ上納地町屋ニ仕ハ共、兩様相願可申哉之段、町御奉行曲淵甲斐守殿御番所ニ有御尋御座ハニ付、右河岸通之儀ハ、町内元地ニ御座ハ處、下平右衛門町ハ、享保三戌年十二月中類燒仕、同月御用地ニ被召上、上平右衛門町ハ、類燒不仕ハ得とも、享保十巳年十二月御用地ニ被召上、右之通り何をも元地被召上、當時之場所ハ町屋跡退リ代地被下置ハ處、家前ハ川端迄之間、場廣ニ有用心惡敷ハニ付、藏地商番屋等奉願ハ地所ニ御座ハ間、右場所并前後添足地被下置、町内ハ買上沽券新規町屋ニ被仰付、被下度段、天明五巳年正月十四日同御番所ハ町人共一同奉願ハ處、追々御糺之上、同六年正月十五日同御番所ニ有願之通被仰付、同月十九日地所御割渡有之、河岸通り新規

町屋ニ相成申。右地所買上代金之儀ハ、其節一同ニ買上地願仕ハ茅町壹丁目第六天神門前、上下平右衛門町、右三ヶ所河岸通坪數都合貳千六百三拾六坪貳合貳夕、此代金八千兩、内金四千兩ハ、其節上納仕、殘金四千兩ハ、五ヶ年賦ニ上納仕度段相願ハ處、願之通被仰付。前書上下平右衛門町ハ、古來片側町屋ニ御座ハ處、右天明六年正月河岸之方新規町屋ニ被仰付ハ節ハ、兩側町屋ニ相成、當時有姿之通りニ御座。

但、右諸書物等有之ハ處、天明二寅年中私儀土藏修復仕ハニ付、同所福富町名主善次郎方ハ預置ハ處、翌卯年十二月廿日元鳥越町ハ出火之節、右善次郎土藏類燒仕、預置ハ諸帳面書留等不殘燒失仕ハニ付、其段同月廿三日町御奉行曲淵甲斐守殿、牧野大隅守殿御番所ハ御届ケ申上置、右ニ付巨細之儀ハ相分不申、古來ハ之申傳并聊相殘リハ書物等取調申上。

一、下平右衛門町之内、町醫山本壽仙拜領地、表田舍間四間五尺五寸、西裏行貳拾貳間壹尺八寸、東裏行貳拾貳間九寸、此坪數百九坪六合四夕、右拜領地之儀ハ、先祖壽仙伯母ハ、夫倉橋喜兵衛儀、權現様御代御賄頭相勤ハ處、御勘定不足仕ハニ付、逼塞被仰付、御役名不知久世大和守殿御差圖を以、同斷矢部四郎

兵衛殿被仰渡ひて、淺艸平右衛門町町人作兵衛上ヶ地ニ住居仕は様被仰渡、寛永十七辰年の右屋敷ニ罷在、同十八巳年十一月中、前書喜兵衛儀病死仕は以後、同人妻ぬさ儀、寛永二十未年御本丸の御奉公ニ被召出、其後ぬさ儀、弟山本藤右衛門を申のの壹所ニ住居仕は夫をふさ甥壽仙を申のの地所讓渡、ふさ儀を寛文十戌年五月中病死仕、壽仙悴當壽仙迄四代引續拜頭仕、町役等外並之通相勤罷在は、尤當時御用等相勤は儀無御座は。

一、下平右衛門町の下柳原同朋町に懸渡し柳橋之儀を、元祿十丑年十一月神田川口是迄渡舟場之處に新規ニ橋相懸ケ申度段、下平右衛門町月行事久左衛門を申者を、町御奉行松前伊豆守殿御番所に奉願は處、新規之橋相成兼は段、被仰渡は處、同十一寅年十一月二日町年寄樽屋藤左衛門方ニも、先達を願出候橋懸渡之儀、此度願之通被仰付は旨、伊豆守殿被仰渡は段、申渡有之、同月十八日の普請ニ取懸り、橋長サ拾五間、外ニ兩袖間壹間宛幅三間、橋臺共四間、同年十二月廿六日普請出來之上、伊豆守殿御出御見分有之、其節を右橋際西之方河岸ニ柳之木有之、殊ニ柳原續之川筋ニは得て、柳橋ニは哉と伊豆守殿御申被成候を、柳橋を唱來は由申傳、右御見分相濟翌廿七日渡初致申候、尤

私方書留ニも、多分川口橋を御座は得共、正徳年中懸替之節より柳橋を書上來り、唯今以柳橋を相唱申候。

但、下平右衛門町古町之方地所、享保三戌年十二月類焼以前迄を、松平市正殿御屋敷ニ有之、元祿十一寅年十一月柳橋新規懸渡之節、市正殿の材木料として金子町内に被相送、右に足金致相懸ケは由、以後橋懸直修復共出金之筈ニも、享保元申年十月懸直し之節も、金子被送は由、私方書留ニ相見は申は、且右橋懸渡之後、普請修復等奉願は年月、書物焼失仕、巨細相分不申は得共、相殘は書留等取調、荒増左ニ申上は。

〔符箋〕本文申上は柳橋西之方河岸ニ古來有之候柳之木、天明年中町内鎮守篠塚稻荷に相納、當時社地ニ植有之は。

一、元祿十一寅年橋懸渡之後、正徳三巳年十二月廿二日出火之節、燒失後假橋ニ御座候。

町御奉行中山出雲守殿、松野壹岐守殿、坪内能登守殿御勤役中、
一、享保元申年十月、右假橋取拂、本橋懸直、其節橋長サ拾四間、幅貳間ニ相成、當時も長幅同様ニ御座は。

町御奉行大岡越前守殿・中山出雲守殿御勤役中、

一、享保三戌年十二月類焼後、平右衛門町御用地ニ被召上ハ節、茅町壹丁目御藏前片町・森田町共同様被召上、同四亥年四月中松平市正殿御上ケ屋敷跡ニ平右衛門町右三ヶ町共代地被下置、其節ハ柳橋新規修復共四ヶ町持ニ相成、入用之内平右衛門町ハ六分、三ヶ町ハ四分差出候。尤右橋ニ付願等之儀也、先規之通平右衛門町ニ引受取計ハ儀ニ御座ハ。

町御奉行大岡越前守殿・諏訪美濃守殿御勤役中、

一、享保十三申年九月、神田川出水ニハ柳橋落候由書留御座ハ。其節懸直シ致ハ由。此儀書留無御座相分兼申ハ。

町御奉行大岡越前守殿御番所御懸リ、

一、元文元辰年六月 懸直シ普請。

但、是迄橋普請有之ハ共、柳橋向町屋ニ入用不相懸ハ處、右元文元辰年懸替之節、柳橋通兩側下柳原同朋町并同町續新地ハ出銀相懸ケ申度段、同年月日不知大岡越前守殿御番所ハ平右衛門町月行事共ハ奉願ハ處、同朋町續新地之儀也、上納屋敷ニ有之仕切地代ニ御受負罷在ハ間、上納金之外

ニ出銀之儀也迷惑之旨、右受負人共ハ申立ハ處、御詮儀之上、同年七月廿七日同御番所御内寄合ハ一同被召出、同朋町續新地分上納金之内ハ割合御差出被成ハニ付、外地主とも割合差出ハ様被仰渡、對談之上、以來修復之節也出銀不仕、懸直シ普請之節計入用金高二不拘金五兩差出ハ筈ニ相成、右伺之上割合左之通、

一、下柳原同朋町續新地受負地上納金之内ハ

一、金壹兩。

一、右納地受負人ハ

一、金壹兩。

一、同町地主三人ハ

一、金三兩。

右之通元文元辰年ハ出銀致來申ハ。

町御奉行能勢肥後守殿・馬場讚岐守殿御勤役中、

一、延享三寅年八月 懸直シ普請。

町御奉行土屋越前守殿御番所御懸リ、

一、寶曆七丑年八月 同 斷。

同依田豐前守殿御番所御懸り、

一、明和三戌年八月 懸直し普請。

町御奉行牧野大隅守殿御番所御懸り、

一、明和八卯年二月類焼後假橋出來迄舟渡同四月中願之上假橋往來ニ相成申候。

同御番所御懸り、

一、安永二巳年正月

右仮橋取拂、
本橋普請。

同山村信濃守殿御番所御懸り、

一、天明六年七月中、神田川出水之節、柳橋危く御座候ニ付、人留奉願、水防人足之儀、茅町壹丁目代地、御藏前片町代地、森田町代地、申遣候得共、一向罷出不申、其後右水防人足其外諸入用之儀、三ヶ所ニ申遣候處、是まで四分六分割合ニ差出來候得共、平右衛門町之儀、同年正月中新規町屋ニ被仰付、小間相増候間、以來平右衛門町ニ八分、外三ヶ町ニ貳分差出し可申段申聞ハニ付、先規之通四分六分ニ入用差出候様被仰付、被下度段、平右

衛門町月行事彌右衛門、天明七未年七月廿九日、山村信濃守殿御番所ニ奉願、双方御糺有之候處、其節四ヶ町對談之上、以來入用平右衛門町ニ七、分、三ヶ町ニ三分差出ハ筈取極、内濟仕候ニ付、同年九月朔日、御吟味御下ケ願ニ相成候。天明七未年ハ右之通りニ取極候事。

町御奉行山村信濃守殿御番所御懸り、

一、天明八申年九月 懸直し普請。

同根岸肥前守殿御番所御懸り、

一、享和元酉年八月 同 斷。

同永田備後守殿御番所御懸り、

一、文化十四丑年六月 同 斷。

右當時有形之橋ニ御座候、此外ニ修復願有之候得共、年月等相分兼候間、不申上候。

一、元祿十一寅年十一月、神田川口ハ柳橋懸渡し以前迄、同所ニ渡船場有之、俗ニ三途之渡しト相唱候。右ハ明曆三丁酉年正月十八日、十九日、江戸大火之節、焼死又ハ川堀等ニ斃死之、多人數有之、其節死骸ヲ集メ、右渡船ニ有、本

所回向院に運送致候由ニ、里俗三途之渡と唱來、元祿十一寅年迄右渡船場有之候處、同十一月柳橋懸渡之節、相止メ候由、同年書留ニ相見申候。

但、元祿五子年迄、兩國橋假橋ニ、唯今之所、壹町餘川下ニ懸渡有之、本所之通路不辨利ニ有之候故、前書神田川口ニ渡舟場御座候節、本所之方にも右渡舟ニ往來致候由、同年兩國橋本橋唯今之場所、御懸渡ニ相成、同十一寅年十一月柳橋出來致候ニ付、渡舟相止メ候由、元祿年中書留ニ御座候。

一、上平右衛門町河岸通り町屋西地境ニ、幅四間餘、町内持之物揚場有之、前々有來リニ、願濟之起立等書物燒失仕、相知兼申候。右隣地酒井左衛門尉殿物揚場河岸ニ御座候。

一、同町河岸通町屋中程ニ、幅五間之物揚場福井町壹丁目三丁目持ニ御座候。右ニ享保十巳年十月中、平右衛門町後口松平千次郎殿御屋敷御上ケ地跡、同十一年三月中、町御奉行大岡越前守殿御懸リニ、借地上納町屋ニ被仰付、福井町ニ相唱候處、上平右衛門町河岸ニ、物揚場被下置候様、福井町地守共享保十七子年十一月十六日越前守殿御番所ニ奉願候處、平右衛門町町人共

被召出御糺御座候ニ付、古來町内持之河岸地ニ御座候旨申立候處、河岸ニ、物揚場地可然割合候様、名主平右衛門被仰付候ニ付、河岸中程ニ、幅五間割出し、双方町人とも納得之旨、同年十二月十七日越前守殿ニ申立候處、同十八丑年正月十九日一同被召出、双方申立候通、平右衛門町河岸ニ、幅五間之物揚場福井町壹丁目三丁目持ニ被下置候儀ニ御座候。

一、同町河岸通り町屋東地境ニ、幅五間壹尺福井町壹丁目貳町目持之物揚場御座候。是ニ享保十一年三月中、同町上納町屋ニ被仰付候節、有來リ之由ニ、願濟之起立等相知兼申候。

一、下平右衛門町東之方大川通河岸中程ニ、幅四間餘、町内持之物揚場御座候。是ニ享保三戌年十二月類燒後、町内御用地ニ被召上、同四亥年四月中、松平市正殿御上ケ屋敷跡ニ、跡退リ代地御割渡之節、物揚場ニ致來候由ニ、書物等燒失仕、起立相知兼申候。

一、下平右衛門町同河岸通り大下水際、南之方ニ懸リ候明地、前文申上候同様、享保四亥年中、町内持ニ、物揚場致來候處、牧野大隅守殿、曲淵甲斐守殿、町方御勤役之節、天明三卯年十一月右下水際、南之方ニ長拾七間三尺幅五間

三尺之所、八丈島荷物揚場拜借地ニ被仰付、同年十二月五日町方ハ御代官江川太郎左衛門殿ハ地所御引渡ニ相成、八丈嶋地役人菊地左門ハ申上ノ揚場拜借罷在候處、天明七未年上野浚明院様御寶塔御普請御用石類先例之通り右河岸揚場ニ相成候ニ付、同年正月八日前書八丈嶋物揚場拜借地江川太郎左衛門殿ハ町方ハ返地ニ相成、同日直ニ町方ハ小普請方ハ地渡し有之、御石揚場ニ相成候處、右御用相濟、同年七月十六日小普請方ハ町方ハ返地ニ相成、如元町内ハ御引渡ニ御座候、于後右場所文化二丑年三月浚明院様御廟向御修復之節も、御石類揚場ニ相成申候。且御石揚場長幅之儀ハ、御普請之時ニ長短御座候ニ付、別段不申上候。右ハ先年ハ上野御寶塔御廟向御普請御修復之節ハ、度々御石揚場ニ相成ハ得共、古書物等燒失仕、相分兼申候、尤御用相濟候上ニ、町内ハ御引渡ニ相成ハニ付、物揚場等ニ相用申候。

一、下平右衛門町東之方河岸地之儀、享保四亥年四月中、右町跡退リ町屋ニ被仰付ハ節ハ、地先之者物置場ニ致、商物等差置、尤古來ハ類燒之度々、河岸地ハ商物差置申間敷旨被仰渡、其時々御慈悲相願銘々辨用致來候處、根岸肥前守殿、小田切土佐守殿町方御勤役之節、文化三寅年三月四日大火以後、町々家作

建出し、并元文四未年十一月中商物定尺被仰渡候節、洩候町々商物高積等之儀、其節御調之上、商物高サ五尺限り積置、右定尺之外高積仕間敷旨被仰渡、右寅年九月中、前書河岸ハ傍示杭貳ヶ所初、御打渡ニ相成、前々之通商物等差置ハ處去ル文政七申年七月四日河岸付町々名主共町御奉行榊原主計頭殿御番所ハ被召出、町々河岸地場所柄ニ應シ相當之冥加上金可申立様、地主共ハ可申聞旨被仰渡、其節取調之上、下平右衛門町分、壹坪ニ付銀五分宛、上納可仕旨申上、前書東之方河岸物揚場左右明地長延三拾間四尺、河岸行五間此坪數百五拾三坪三合三夕之處、同年十月ハ金壹兩壹歩ト銀壹匁六分六厘五毛宛、毎月冥加上金仕候儀ニ御座候。

一、平右衛門町名主平右衛門元祖三枝平右衛門儀ハ、往古遠州濱松ニ住居仕、天正十八庚寅年八月權現様御入國之節、御供仕御當地ハ罷下リ、當所ニ住居仕ハ様被仰渡ハ、其後元和二丙辰年月日不相知、台徳院様淺草寺ハ御成之節、右三枝平右衛門并悴平八郎御前ハ罷出ハ處、此所町屋ニ取立取締リ可仕旨蒙上意、町名之儀ハ平右衛門住居之地ニ付、平右衛門町ハ附可申旨拜領被仰付、同年地所御割渡有之候ニ付、則平右衛門草創人ニ、町屋ニ取立、平右衛門

儀之及老年に付、悴平八郎事平右衛門と改名致し、元和二丙辰年名主役相勤來候旨申傳。元祖平右衛門儀之、正保四年丁亥六月十八日死去、法名三枝院松譽如本了空居士。尤三枝院松譽と申之其後諡号ニ有之候由。二代目名主役祖平八郎事平右衛門儀之、寛文五年乙巳八月三日七拾六歳ニ死、法名到本院一譽淨圓居士。元祖當平右衛門迄八代相續仕。先祖平右衛門儀之、太宰大貳三枝守國末裔ニ系、圖書付等御座處、享保三戌年十二月十一日上野へ出火ニ當所、寂類焼仕節、持退途中ニ取落候由ニ申傳、其後同十八丑年寫取以略系譜書壹通、并往古へ持傳以鎗壹本、長刀壹振、所持仕外ニ享保十巳年十月平右衛門町後口松平千次郎殿御屋敷上ヶ地ニ相成候節、千次郎殿へ被下由ニ申傳、御影石大手洗鉢、并伊豆磯ホク石之踏段石所持仕。外古器物古書付等無御座、三代目平右衛門迄、苗字三枝と相名乘以得共、右平右衛門代子細有之村田と相改申。且私住居仕地所之儀之、上平右衛門町古町之方西角ニ表田舎間五間貳尺六寸八分、裏行貳拾間、此坪百拾坪貳合六夕七才、草創地ニ古來へ沽券狀無之、代々所持仕。

一、御本丸に 扇子三本入箱臺付、

淺草平右衛門町。

献上

名主 平 右 衛 門。

一、西御丸に 同斷。

右之例年正月三日御城に上り、於紅葉之御間御目見被仰付、右之扇子箱献上、御年頭御禮申上。尤例年之通御禮ニ罷出旨、町年寄方へ相達候節、罷出旨之受書平右衛門へ差出來。右之支配惣代ニ無之、乍恐平右衛門より御禮申上候由ニ申傳。且古來之鳥目壹文宛献上仕處、享保六丑年十二月廿七日以來三本入扇子箱献上可仕旨申渡有之、同七寅年正月御禮之節、扇子箱献上仕來。

御代替り御禮之節も、同様献上仕。

但、右諸書物等有之處、天明二寅年中私儀土藏修復仕ニ付、同所福富町名主善次郎方に預置處、翌卯年十二月廿日元鳥越町へ出火之節、右善次郎土藏類焼仕、預ヶ置諸帳面書留等、不殘焼失仕ニ付、其段同月廿三日町御奉行曲淵甲斐守殿、牧野大隅守殿御番所に御届ヶ申上置。右ニ付巨細之儀之、相分不申、古來之申傳并聊相残り書物等取調申上。

一、下平右衛門町之内、當時家主相勤居以勘五兵衛と申者、先祖代々平右衛

門町ニ住居仕、船宿渡世仕ハ處、天明年中ハ勝手ニ付相止メ由、右三代目勘五兵衛、并本所壹ツ目之由、渡世不知笹屋利兵衛ハ申兩人之ハ、早船工夫致シ、本所相生町邊ニ住居之由、五郎兵衛ハ申船大工ニ造立爲致、其節勘五兵衛方ニ召仕ハ船頭長吉ハ申之ハ、早船初ハ漕覺由、右船相雇ハ之ハ、長吉ならテハ難成由ニハ、俗ニ長吉船ハ申候ハ略語チヨキ船ハ唱來、其頃ハ艦ニ挺立ハヨヘ、二挺立とも相唱候處、其後二挺艦船御停止有之、壹挺立ニ相成當時もチヨキ船ハ相唱申ハ、右船形猪牙ニ似寄ハ、連當時猪牙船とも相認メ有之、尤川船御役所ハ、本名茶船ハ唱來申ハ、前書早船工夫致ハ三代目勘五兵衛法名、左之通、

享保十二年正月廿七日
關山了透信士

船大工五郎兵衛法名之由。

元文元辰年三月六日
釋秀善信士

右ハ勘五兵衛方過去帳ニ有之、寛文年中ハ之先祖法名御座ハ、右過去帳寂初祐天僧正直筆之名号有之、所持仕ハ、且家主役之儀ハ、明和年中ハ相勤、元祖ハ當勘五兵衛迄九代相續仕ハ。

一、同町之内家主久左衛門ハ申者、先祖ハ當久左衛門迄八代、右町ニ住居仕、家主役之儀ハ、元祿年中ハ相勤由、古來ハ持傳之由ニハ、栗田口久國作脇差壹腰、身丈七寸位、中心長貳寸五分位、銘有之、所持仕候、寛文年中ハ之先祖法名御座ハ、古來葭茅等を商ハ候由、當時ハ道具類商賣仕ハ。
一、天和元酉年九月北條安房守殿、甲斐庄飛驒守殿町方御勤役之節、下平右衛門町東之方南河岸際川中ハ、左之御高札御建被成ハ。

江戸中こみ捨舟、向後ハ永代新田並砂村新田ハ遣シ可捨之、若川筋違ハつるよをいてハ、急度曲事ハ行ふ趣きハ也。

九月

奉行

右之通御建被成ハ處、朽損ハニ付、元祿七戌年五月御建替有之、御文言御認メ直シニハ、月付之處、五月ハ御書改ニ相成ハ、其節之御懸リ御奉行所相分兼申ハ、然ル處猶又元祿十六未年殊之外朽損、且川中ニハ、船當リ合ハ節損ハニ付、其段町御奉行保田越前守殿ハ名主平右衛門ハ申立ハ處、御見分之上、川中ハ御差止メニ相成、同年五月七日同河岸陸ハ御建替有之、其節御文言左之通御書改ニ相成ハ。